

Prince of genius rise worst kingdom ~YES,treason it will do~

鳥羽 徹

Toru Tobu

Illustration  
ファルまる

Falmaro

売  
玉

し  
よ  
う

そ  
う  
じ

天才王子の  
赤字国家  
再生術

書店様向け試読版

◆第一章◆その名はウェイン・サレマ・アルバレスト

ナトラ王国、王宮。

その石造りの回廊かいろうを、二人の男が歩いている。

男たちは身なりのよい出いで立ちだ。歩く仕草しぐさからも品位を感じられる。

それもそのはず、二人はこのナトラ王国において、長らく国王に仕えてきた家臣であった。

片や文官、片や武官。その能力を奮ふるう場所こそ違えど、同時期に家臣として登用された二人は馬が合い、時折こうして王宮で顔を合わせて話に花

を咲かせる間柄だった。

しかし今、久しく会っていないなかつた親友と歩いているにも拘わらず、二人の表情は沈痛だ。

その理由が共通していることを、二人は知っていた。

「陛下の病状……やはり芳しくかないようだ」  
文官の男が、重い声音で呟いた。

武官の男は固く瞼を閉じ、息を吐く。

「ここ数年、大陸全土で氣候が荒れたからな。生来お体が弱い陛下には負担が大きかつたか……」

「天の機嫌とは厄介なものだ。我が国以外でも、要人が倒れ混乱が起きているところは少くない」

「帝国の皇帝こうていまでも倒れたという話だからな。おかげで向こうの宮廷は、権謀術数けんぼうじゆっすう渦巻く悪鬼あくきの巢窟そうくつとなつていと聞くと聞く」

文官の男が鼻を鳴らした。

「皇帝はそのカリスマ性で帝国を牽引けんいんしていたよ  
うだが、強い光ほど消えた時の闇やみは深まる。まして後継者も指名していなかつたとなればな」

「我が国と似たような状況か。だが帝国と違い、  
我らに希望があるとすれば――」

その時、回廊の向こう側に人が現れた。

二人はそれが誰だれかを認めめるや否いなや、すぐさま道を譲り敬礼の姿勢を取る。彼らがこの宮殿におい

て道を譲り礼をする相手は、僅わずかしかいない。

「おはようございます、ウェイン殿下でんか」

二人が揃そろって礼を送る先に立つのは、従者を連れた一人の少年。

ナトラ王国王子、ウェイン・サレマ・アルバレストである。

「ああ、おはよう」

年齢よわいにして十六。まだ少年と言って差し支えない人物だ。

されどつい先日、彼は摂政せつしょうの座についた。倒れた王に代わり、政務を執とり行うためである。

「どうした二人とも、暗い顔だな。……父上のこ

とか？」

ウェインの問いかけに二人は恭しくうやうや答えた。

「はっ、ご明察の通りです」

「申し訳ありません。陛下のご容体ようたいが芳しくない  
と聞き……」

そうか、とウェインは小さくつぶや呟くと、二人の肩  
に手を置いた。

「案ずるな。俺おれがいる」

ウェインの力強い言葉に、二人の体は僅わずかに震  
えた。

「そして俺だけじゃない。ナトラ王国には、長年  
父上を支えてきた家臣たちもいる。この両輪が一

つの目標に向かって共に走るのであれば、どんな  
国難も乗り越えられるはずだ」

「殿下……」

「まさしく、仰る通りです」

頷く二人に、ウェインは微笑を浮かべた。

「父上に回復に専念して頂くためにも、我らに嘆  
いている暇はない。ますますの奮起を期待してい  
るぞ、二人とも」

「ははっー!」

ではな、とウェインは従者を連れて回廊を進ん  
で行った。

その背中が消えるまで見送った後、二人は深く

感嘆の息を吐く。

「……やはり、あのお方こそ我らの希望だな」

「ああ。幼き頃ころより才気の片鱗へんりんを覗のぞかせていたが、帝国への留学から戻って以来、見事に開花された。宮廷の混乱も収まり、今や家臣たちは殿下の元で団結している」

「ふっ、帝国が耳にすればさぞ羨うらやむことだろう」

「ならば奴やつらを一層齒はぎしりさせるためにも、共に殿下をお支えせねばならんな」

「ああ、もちろんだ」

二人は頷きあつた。

先ほどまでの暗い表情は、もはやどこにも存在

しない。

二人の胸の中には、王国の輝ける未来の姿がしっかりと浮かんでいた。



ナトラ王国の王宮の中心には、政務をこなすための執務室がある。

その重厚な扉が開き、現れるのはウェインとその従者だ。本来ならば国王が使用する部屋だが、今は摂政である彼が使っている。

「二二ム、今日の予定をもう一度」

書類が積まれた机の椅子いすに腰かけながら、ウエインは従者に問いかける。

「二二ムと呼ばれたその従者は、見目麗みめうるわしい少女だ。年齢はウエインと同程度か。透き通るような白い髪と燃えるような赤い瞳ひとみが特徴的だ。

「午前は報告書の確認と意見書の裁定を。昼食会を挟みまして、午後は会談が三件と、陛下へお見舞いの予定が入っております」

「なら、午前中はこの部屋を訪れる者はいないな？」

「はい」

「そうか、とウエインは小さく呟き、そして、

「国売ってトングラしてええええええええええー！」  
思いつきり叫んだ。

「なーにが両輪が一つの目的に向かって共に走れば、だ！ 嘘うそですうー！ この国の詰みっぷりはそんなんで解決できませんー！ 無ー理ー！ 絶  
対無ー理ーですうー！」

「またそんなこと言つて」  
突然態度を豹変ひょうへんさせた主君に対して、しかしニムは動揺することなく、いくぶん砕けた口調で告げた。

「冗談でも口にするこじじゃないわよ、ウエイン」  
「冗談って何だよニム！ 俺は真剣に言ってる

つつーの！」

「なお悪いわよ」

はあ、とため息を吐くニニム。

ナトラ王国の次代の名君として敬われる少年――  
ウェイン・サレマ・アルバレスト。

しかしその実体は、義務、責任、努力といった  
言葉が大嫌いなダメ人間であつた。

「人目が無くなるとすぐだらしなくなるんだから  
……もう少しシヤキツとしなさい」

ウェインの本性を知る数少ない人間の一人が、  
このニニム・ラーレイだ。

立場的にはウェインの筆頭補佐官ひつとうほさかんであり、幼い頃から

彼に仕える側近中の側近である。国政を預かる摂政に就いた若い王太子の補佐が、同じくらい若い少女であることは、常識的に考えれば何の冗談かと思われるところだが、しかしそれを口にする者はこの宮廷にはいない。

理由としては、彼女を重用する王太子の勘<sup>かん</sup>氣<sup>き</sup>に触れるのを恐れているのが半分。もう半分が、二ムがこれまで補佐として確かな実績と能力を発揮しているためである。

二人きりで幼<sup>おさ</sup>馴<sup>な</sup>染<sup>なじ</sup>とはいえ、仮にも王太子である彼にこんな口を利けるのも、長い時をかけて培<sup>つち</sup>っ<sup>か</sup>た信頼と実績があつてこそだ。——もっとも、その二つがあるために、最近は苦言ばかり口にし

てしまうのだが。

とはいえ、ウェインの口から益体やくたいのない愚痴ぐちが飛び出すのは、何も彼の気質だけが理由ではない。

「ほーん？ なになに何スかその優等生気取りな態度はあ!?! ニニムだっこの国の全方位ド貧国つぶりは解つてるはずだろお!?!」

「ド貧国は言いすぎよ。……ちよつと人材が足りなくて、だいぶ資源が不足してて、かなりお金が無いだけじゃない」

「それを世の中じゃド貧国っていうんだよー!」  
ナトラ王国はヴーノ大陸にある国家の一つである。

人口は五十万人ほどで規模としては小国。大陸最北端に位置し、春は短く冬は長い。さらに国土の大半は不毛な岩と山だ。

歴史はあるが国内資源は乏しく、ろくな産業もない。名物といえれば雪景色ぐらいだが、ありがたいのは遠方から訪れる酔狂すいきやうな旅人ぐらいで、王国民からすれば厳しい冬の訪れを告げる小憎たらしい天の恵みである。

歴史が長いのも、侵略の旨味うまみに乏しく、他国から見向きされなかつたためだ。歴代の君主が総じて賢明であつたがゆえに、どうにかこれまで国家としての体裁ていさいは維持されてきたが、控えめに言っ

て何かの拍子に吹き飛びかねない弱小国家である。  
「内政に手を入れようにも金がない。金を集めよ  
うにも産業がない。他所よそから奪りおうにも軍事力が  
ない。優秀でまともな人材は立身りっしん出世しゅつせを  
目指して他の国へ行く！しかも大陸の各地で火種ひだねが燻くすぶ  
つてていつ嵐あらしが起こるか解らん状況で親父が倒れて  
俺が国のかじ取りとかああああもおおおお  
お！」  
そーいうわけで、ウェインのこの嘆きにも一理はある。  
十代半ばの少年が背負うには少々重すぎる責務であるこ  
とは間違いない。だからといって、誰かが代わられるもの  
ではないのだが。

「あーあ、何で俺はこんな国の王子に生まれたんだ。もつと資源と人材と資金で溢あふれる国に……あ、だめだ、絶対侵攻される。資源はちよつと削る感じだ……人材も強すぎるとクーデター起きそうだし弱めに……」

「はいはい、無駄なこと言っでないで。ほら、仕事を始めるわよ」

ぶつぶつと益体やくたいのない妄想を口にするウェインの鼻面はなづらに、ニニムは書類を押し付ける。

んあー、と亡者もうじやのような声を発しながらウェインは書類を受け取り、眺めると、ニニムに突き返した。

「問題なし。次」

「……ちやんと読んだ？」

「読んだ読んだ。超読んだ。二二ムの体重が増え  
たって書いて痛えっ！ おま、王子の足を踏むと  
か不敬だろ！」

「敬意を払ってほしいならもう少し真面目まじめにやり  
なさい。それと私の体重は増えてないわ」

「はあーん？ おいおいおい、ダメだぜ二二ム  
全然ダメだ、お前の足音の変化に気づかない俺だ  
と思っただか？ その起伏の少ないボディは間違い  
なく先週より六百グラム以上の重量を蓄えておい  
馬鹿ばかやめろ俺の腕はそんな方向に曲がらなくお

「おおおお!?」

「このまま関節の限界に挑戦するのと仕事に取り掛かるの、どっちがいいかしら?」

「お、お仕事頑張らせて頂きます……!」

「よろしい。それと私の体重は増えてない。いいわね?」

「ふえーい」

ウェインの尻しりを蹴けり飛ばして仕事をさせられるのは、王国広しといえ二二ムだけである。

「はーやだやだ。俺は何にも煩わづらわされずに、金貨に困こまれながら二二ムをからかって悠ゆう々ゆう自じ適てきに暮くらしたいただけなのに、どうしてそれが叶かなわらないん

だか」

と、ウェインが机に突っ伏したまま世迷いごとを口に  
したその時、執務室の扉がノックされた。

ウェインは即座に起き上がり、同時に扉がガチャリ  
と開いた。現れたのは一人の少女だった。

「お兄様、いらっしやる？」

年齢はウェインたちより少し下か。涼やかなド  
レスを纏まとい、長い黒髪をなびかせて、軽かるやかな足  
取りで部屋に入る彼女は、まさしく可憐かれんというに  
相ふさわ応しい。

それでいて顔立ちにウェインと似た雰囲気を感じ  
させる。それもそのはず、彼女の名はフラニー

ヤ・エルク・アルバレスト。ウェイン・サレマ・アルバレストの妹でありーすなわちナトラ王国王女である。

「ーフラーニヤか。どうかしたか？」

さも勤勉に仕事をこなしていたかのように、ウェインは背筋を伸ばしたまま書類から顔を上げた。

「ええと、大したことではないの。ただ、最近お兄様が忙しくて、あまりお話しできているとは思って」

フラーニヤは少し申し訳なまなざしさそうに、それでいてどこか期待を込めた眼差しを向けながら言った。

「……ご迷惑だったかしら？」

「まさか」

ウェインは微笑ほほえんだ。

「妹の来訪を迷惑と考える兄がいたら、それは生まれる順番を間違えているな。おいで」

フラワーニヤの顔がパツと華やいだ。そしてウェインの傍そばまで駆け寄ると、彼の膝ひざにぴょんと跳び乗った。

「つとと……フラワーニヤ、おいでとは言ったけど、これはちよつとはしたないぞ」

「そんなことないわ。昔からここが私の特等席だもの」

そう言つてフラワーニヤは頬ほおをウェインの胸にすりつ

ける。小動物が甘えるかのような動作だ。

思わずウェインの頬が緩むが、フラワーニヤの視線が向かうとすぐさまキリッと締め直す。傍にいたニムが紙にさらさらと文字を書き、ウェインにだけ見れるように示した。

『シスコン』

『ほっとけ』

ウェインも文字で返事をしていると、フラワーニヤがきよとんとして首を傾げる。<sup>かし</sup>

「お兄様、どうかしたの？」

「いや何でもないよ。ただそう、どこかの誰かと比べてフラワーニヤはまだまだ軽いと思っただけ」

「お兄様ってば。人の体重を比べるだなんて失礼よ」

「はは、悪い悪い」

言いながらウェインはニニムを見た。

『後でシメるわ』

見なかつたことにした。

「でも良かった」

フラーニヤは安堵あんどの吐息とそを漏もらす。

「お仕事を真面目にしてるお兄様のお邪魔をして、怒られないか不安だったの」

「……」

「お兄様？」

「いや、まあ、うん、真面目にやってるぞ。なあ  
ニニム？」

「もちろんです。——今も用意していた仕事では  
物足りぬと、こうして追加を求められるほどです  
から」

そう言っつてニニムはどこからもなく取り出し  
た山のような書類を机に置いた。

「摂政として十全じゅうぜんたるうとする殿下の姿勢、この  
ニニム、心より感服しております」

「まあ。さすがお兄様だわ」

「……だろぅ!? 王子として当然のことだから  
な！」

こんちくししょう、という視線をニニムに向けながらウエインは強気に笑った。もちろんニニムは素知らぬ顔だ。

「けれどこれじゃあ、当分はお兄様にお休みなんて無さそうね」

「そうだな。家臣の協力で宮廷は大かた掌握できたが、まだ国内の混乱は収まってない。これをどうにかするまでは忙しい日々が続くと思う。……すまないな、本当なら遊んでやりたいところだが」

「お兄様が謝る理由なんて一つもないわ」  
ふるふると頭を振り、それから不安そうにフラフラは呟いた。

「ただ、無理だけはししないでほしいの。もしもお兄様がお父様みたいに倒れたら……私にできるとなんて何もなし……」

「心配するな、こう見えて俺はしづといんだ。それにフラワーニヤが何もできないうのも間違いだ」

「……私に何かできるの？」

「難しいことじゃない。笑顔でいてくれればいいんだ」

ぷに、とウェインはフラワーニヤの頬を指でつついた。

「フラワーニヤが明るく笑ってくれただけで、俺も

父上も元気になる。これはフラーニヤにしかできないことだ」

「……ほんとに？」

「もちろん。俺が嘘を吐いたことなんて……それなりに……いや結構……うん、ともかく、これについては本当だ」

「じゃあ……こう？」

フラーニヤはにこつと笑顔を浮かべた。ウェインは満足げに頷いた。

「だいぶ元気になった。ただそうだな、この上でさらに抱き付いてくれればもっと元気になると思  
う」

「ふふ、お兄様ってば。えいっ」

フラワーニヤはくすくす笑いながらウェインの体に抱き付いた。

「これでどうかしら？」

「ああ、これなら午後の仕事も乗り切れるな。特に今日は大一番があるから助かった」

「それなら良かったわ。……でも、大一番って？」  
抱き付きながら首を傾げるフラワーニヤに、ウェインは言った。

「帝国大使との会談だ」



アースワルド帝国とは、ヴーノ大陸東部における一大国家である。

恵まれた気候と肥沃な土地。鉱物資源も豊富であり、大陸でも一、二を争う巨大な湖を抱えて水産も盛んだ。およそ国が豊かになる全てを備えた国であり、それゆえ、建国以来何度も他国から侵略を受けてきた国でもある。

それらを跳ねのけるために自然と帝国は軍事に傾倒し、気づけば大陸随一の軍事国家となった。そして今代の皇帝になると、その軍事力を背景に隣国を次々と占領していった。

帝国の勢いはまさに破竹はちくであり、歴史上一度として成立していない大陸統一を成し遂げるのではとすら思われたほどだ。

皇帝が倒れた、その日までは。

「――以上が、ウェイン・サレマ・アルバレスト王太子の情報になります」

「御苦労様」

補佐官の締めくくりに、あてがわれた館の一室にて、フィッシュ・ブランデルは小さく息を吐いた。

年齢は二十代半ばだろうか。流れるような金髪が特徴の、美しい女性だ。

しかしフィッシュは美しいだけの人物ではない。

彼女こそ帝国より派遣されたナトラ王国駐在大使である。

「噂通りの仁徳に溢れた次代の賢君、つてところね」

「ええ、内外ともにナトラ王国の次期国王として認められています。摂政への就任にも反発はほとんどなかつたようです」

「帝国は上を下への大騒ぎだつていうのに、羨ましいことだわ。でもそれだけに、これまで繋がりを  
持てなかつたのが悔やまれるわね」

「それは仕方ありませんよ。大使の赴任と王太子の帝国留学時期が重なつていたわけです」

フィッシュがナトラ王国に赴任したのはここ数年のことだ。根強い交渉で国王とはそれなりに話し合える関係を構築できたが、状況は一変してしまっただ。

「今日の会談で王太子はどうして出てくるでしょう？」  
「世間話で終わり……とはならないでしょうね。  
駐留してる帝国軍について言及するのは間違いな  
いわ」

現在、ナトラ王国には帝国軍が五千人ほど駐留している。これは国王との交渉によって正式に許可されていることだが、他国の軍を置くことにはナトラ王国内で不安と反発があることをフィッシュ

たちは知っていた。

「軍の撤退を要求されるでしょうか」

「どうかしらね。ただ、この会談で情報以外の彼の人となりが……そして本物の王器おうきの持ち主かが、少なからず見えてくるはずよ。まあ、フラム人を抱えてる時点で、変わり者ではあるんでしよっけど」

「ニニム・ラーレイですか」

「ええ。この国にフラム人が多く住んでいるのは知っていたけど、まさか帝国以外にも家臣として登用している国があるとは驚いたわ」

「まったくです。しかも彼らを受け入れた歴史は

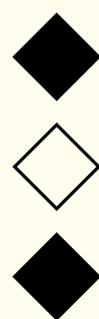
帝国より遙かに古いそうですよ。西側の国からすれば、奴隷階級である彼らを人として扱ってることの国は奇異に見えるでしょうね」

「我が帝国が大陸を統一した暁には、そんなくだらない価値観は消え失せるわ。……そろそろ会談の時間ね」

フィッシュは立ち上がる。ウェインは簡単な挨拶こそ交わしてはいるが、こうして正式に話し合いの場を設けるのは初めてだ。

「本国からの情報が正しいなら、帝国の停滞も近々終わるわ。そのためにも、駐留の件は是が非でも維持するわよ」

固い決意とともに、フィッシュは会談の場へ向かった。



「フィッシュ・ブランデルは元々バンヘリオに派遣されていた大使です」

宮廷の廊下を歩きながら、ニニムは前を行くウェインに向かって会談相手の情報を告げる。

「バンヘリオとなれば西の大国。それがなぜこの国に？」

人目もある廊下のため、二人の言葉遣いは主従

のそれ。しかしその程度の切り替えはお互い既に慣れたものだ。

「本国の政争に巻き込まれたようです。そして殿下の帝国留学と入れ替わるようにナトラに。出せ街道から外れたものの、かなりのエリートのようにですね」

「だとすれば、ナトラの田舎暮らしは退屈だろう」  
「それが本人は案外満喫まんきつしているようですよ。中央の政治かかに関わるのはもうまっぴらだと常々語っているとか」

ウェインは苦笑した。

「なるほどな。事情がなんにせよ、他国の民から

我が国が好かれるのは喜ばしいことだ。……しかしそれほど優秀な人間だとすると、会談は一筋縄ではないかな」

「目<sup>も</sup>下<sup>つか</sup>の問題としてはやはり駐留帝国軍ですが……難しいところですね」

それなんだよなー、とウェインは内心でため息を吐く。

そもそもその話として、なぜナトラ王国に帝国軍が駐留しているのか？

名目上は軍事訓練のために土地を貸している、というものだが、もちろんこれは本当の目的ではない。

ではなぜかといえ、いくつか要因があるものの、突き詰めるとナトラ王国の微妙な立地に辿り着く。一つ、大ざっぱに楕円を想像してもらいたい。それがヴーノ大陸だ。

そして巨人の背骨と呼ばれる長い山脈が、大陸を真っ二つにするようにして北から南にまで伸びている。この山脈という障壁によって東西は分断され、東と西で国体、人種、思想、文化が大きく異なっているのが現状だ。

もちろん、行き来ができなわけではない。遙か昔ならばともかく、今は整備された道も多くある。あるが——それらはあくまで個人や行商が利用す

る道の話だ。

そういった道を静脈と表現するのなら、千や万の兵隊が往来できる道は動脈だ。その数は静脈よりも少なく、当然、交易の面でも軍事の面でも動脈を抑えることは大きな価値を持つ。特に大陸の覇権を狙う<sup>ねら</sup>国にとっては必須とも言っていていい。

そして何を隠そうナトラ王国は、大陸最北にある動脈の上に造られた国なのである。大陸統一を狙う帝国にとって、放っておける場所ではなかった。

（どうしたもんかな）

帝国軍が駐留するにあたって、少くない代金がナト

ラに支払われている。彼らは決して一方的に居座っているわけではない。しかしそれでもやはり他国の軍がすぐ間近にいることは、喉元のどもとに刃やいばを突きつけられているようなものだ。民は不安になるし、王国軍も良く思っていない。いや、もっと直接的に言えば、軍部はウェインが摂政に就任したのを契機として、帝国軍を撤退させることを期待していた。

彼らの気持ちはわからないでもない。国防に対する懸念けねんもあれば、メンツの問題もあるだろう。しかしウェインには易々やすやすと彼らの望み通りに動けない理由があった。

その理由とはすなわち、

（ぶっちやけ帝国に媚<sup>こ</sup>びを売りたい！）  
というわけである。

（あんな大国に逆らっても面倒なだけだし、駐留の代金も正直助かってる。俺としては契約続行で何の異論もないんだよなあ……）

自身が留学していたこともあり、ウェインは帝国に造詣<sup>ぞうけい</sup>が深く、国力の差は身に染<sup>し</sup>みている。さりとして、このまま軍部の期待を突っぱねるのも問題だ。

（摂政の就任がスムーズだったのは、それだけ臣が俺に期待してるからだ。就任早々帝国に尻尾<sup>しっぽ</sup>を振って失望されたら今後がやりにくい。特に武

官連中がヘソを曲げたらクーデターを起こされる可能性もあるし)

あちらを立てればこちらが立たず。

板挟みの状況にウェインが呻うめいていると、ふと傍かたわらを歩いていたたはずのニニムの姿が消えていたことに気が付いた。

「ニニム？」

「――失礼しました」

呼びかけると、物陰よりニニムが姿を現す。

「今しがた帝国の密偵より報しらせが」

「報せ……？」

彼女は書簡を差し出した。ウェインはそれを受

け取り中を見る。

「……へえ」

ウェインは片眉まゆを上げた。

「この情報は間違いなく大使側も搦つかんでいるな……となると……」

そしてしばしその場で瞑目めいもくすると、不意に歩きだした。

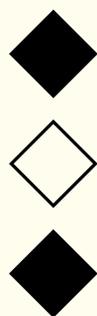
「行くぞニニム、方針は決まった」

「はっ……しかし方針とは？」

「決まっている」

にっとうエインは笑った。

「総取りだ」



「お久しぶりです、摂政殿下」

応接の間に到着したウェインとニニムを迎えたのは、先に待っていたフィッシュ・ブランデルとその補佐官だった。

「既に一度ご挨拶はさせて頂きましたが、改めまして、アースワルド帝国大使、フィッシュ・ブランデルです」

「ナトラ王国王子、ウェイン・サレマ・アルバレストだ」

互いに名乗りあい、席に着く。口火を切ったのはフイシユの方だ。

「本日はお時間を頂き、ありがとうございます。殿下におかれましては、摂政へのご就任の儀、誠におめでとうございます。恐れながら、国王陛下のご容体ようたいが優れないことで、王国に悲嘆が広がっているのを痛感していました。それゆえ此度こたびのことは、まさしく暗雲に一条の光が差し込まれたことと思っております」

「ありがとうございます、ブランデル大使。この肩に多くの期待がかかっていることは私も感じている。それを裏切らないよう努めるつもりだ。我がナトラと

アースワルドの友好のためにも、互いに協力できることを願っている」

「もちろんです、摂政殿下」

会談は和やかに始まった。

ウェインとフィッシュは取り留めのない会話を交わす。そうしながら片や国家元首代行として、片や大国より派遣された大使として、向かい合う相手の器を測り、人となりを確かめ合うのだ。それは一種の共同作業といえる。

しかし同時に、常にピリツとした緊張感が部屋にあるのを、この場にいる全員が感じている。

彼らは解っているのだ。この共同作業の間にど

れだけ相手に差をつけられるかが、この後に待ち受ける本題に大きく関わってくることを。

（……なるほど、この懐ふとこころの深さは本物ね）

ウェインと言葉を交わしながら、フィッシュは早々に彼が油断ならない相手であると感じ取っていた。

（若く、経験の乏しい人間はとにかく早急な結果を求めたがる……けれど彼にはその焦あせりがまるでない。王太子という立場を鼻にかけず、こうして同じ高さの席に座るのも余裕の表れね。摂政の座について間もないのに、貫禄かんろくすら感じられるわ）

こちらの探りを軽くいなし、かといって逆手さかてに取って詰め寄るといふことはせず、悠然と構える。

底が見えない相手だ。少なくとも自分が彼と同じ年齢の頃、これほどの深さは持っていなかった。

（本気でかからないと持っていられるわね……）  
警戒心を強め、フィッシュは気を引き締めた。

と、フィッシュが考える一方で、ウェインもまた強い確信に至っていた。

（この人おっぱいでかいな……）  
最低である。

（前に挨拶した時は忙しかったから気づかなかつたけど、かなりの大物だ……ただの脂肪しぼうの塊なのに貫禄すら感じる。これも富める帝国の人間だから

らこそか。それに比べて……)

ウェインはちらりと席の後ろに控えるニニムを見た。具体的には、その慎<sup>つつ</sup>ましやかな胸部を。

(……戦力差は歴然だな)

ぶす、とニニムの持っていた羽ペンが後頭部に突き刺さった。

「っ……！」

「殿下？」

「いや、少し頭痛がな。多忙を理由に睡眠時間を削るのはやはりよくないようだ」

慌てて取り繕っているところ、ニニムが背後から書類を差し出した。隅っくに『真面目にやいなさい』

と書いてあった。

なぜ考えていることがバレたのだろうか。女の勘の恐ろしさを感じていると、フィッシュが微笑<sup>ほほえ</sup>みながら言った。

「――それにしても、肩の荷が下りた気分です。実を言えばこの会談が始まるまで、殿下と良い関係を築けるか不安でした。が、こうして言葉を交わすことで杞憂<sup>きゆう</sup>であると確信いたしました」

「大使にそう言ってもらえると私としてもありがたい。帝国との友誼<sup>ゆうぎ</sup>が強固であると確信できれば、私の悩みも少しは晴れるというものだ」

「それはそれは。やはり国政を担うというのは、

悩みが尽きないものですか？」

「さながら海を飲み干そうとしているかのような気分だよ。民の暮らし、他国や諸侯との関係、軍の練度、財源、産業……考えることは山積みだ」

「……その中に」

フィッシュの眼が鋭く光る。

「駐留帝国軍については、含まれておりますでしょうか」

空気が張りつめた。

前哨戦ぜんしゅうせんは終わり、本番が始まる。

(さあどう返してくる?)

フィッシュが油断なく見つめる中で、ウェインは口を開いた。

「私としては、帝国との関係の維持を第一に考えている」

「それでは」

「しかし」

言葉を被<sup>かぶ</sup>せ、ウェインは続ける。

「我が軍の人間が、他国の軍隊を置いている現状に強い懸念を抱いているのも事実だ」

ウェインの言葉に、フィッシュは動揺しなかった。

ここまでは想定している範囲内だ。帝国の顔を立て、軍部にも良い顔をしたい。そのためにこち

らから何か——恐らくは資金か物資か——譲歩を  
引き出す。そんなところだろうと予見し、準備も  
してある。

だからこそフィッシュは、次のウェインの言葉に  
僅かな戸惑いを得た。

「ゆえに、私はその懸念を取り除くべきだと思っ  
ている」

「はっ……取り除く、ですか？」

「そうとも。先ほども言った通り、私は帝国との  
関係の維持を重視している。ならばこそ、帝国軍  
と我がナトラ王国軍の溝を埋めるべきだ。そうだ  
ろう？」

「……仰る通りです」  
おつしや

まずい、とフィッシュは思った。明らかに意図をもつて誘導しにきているが、その意図に思考が追いつかず向こうにペースを握られた。しかし今は取り戻せるタイミングではない。

「そのために私は、これを機に王国軍を再編しよう」と計画しているところだ」

「軍の再編を……？」

「恥を晒すさらようだが、我が軍は決して精強ではない。なにせ実戦経験がほとんどないからな。そしてその未熟と無知こそが、帝国軍との軋轢あつれきを生み、相互理解を阻はまんでいる」

「再編すること、それを失く<sup>な</sup>そうと?」

「その通りだ。しかし重ねて恥を晒すが、ただ王国軍の中でやり直すのでは進歩も変化も生まれない。それに加えて実行する資金も乏しい」  
ウェインはにっと笑った。

「そこでだ、ブランデル大使。――我が王国軍に、帝国軍のノウハウと資金を提供してもらえないだろうか?」

このウェインの言葉には、フィッシュのみならず補佐官やニニムまでもが目を見張った。

(何を馬鹿な! こんな要求通るわけがない!)

補佐官が内心で声を張り上げる一方、二二ムも眉根まゆねにしわを寄せせる。

（王国うちの軍を帝国そっちのノウハウで鍛えてよ。そのための金も帝国そっち持ちね、なんて……吹っ掛けるにしても限度があるわ。それともここから徐々に要求を下げていくつもり？）

二人は思わず懐疑的な視線をウェインに向ける。しかしウェインはどこ吹く風だ。それは自分の提案が決して無茶なものではないと確信している風情ふぜいであり――事実、対面しているフィッシュの反応は二人と違った。

「……果たして、それで本当に軋轢は解消される

でしようか？」

「帝国にそれだけ誠意を見せられれば、いかに武門の人間とて心に響くものがあるだろう。それに私も解消のために尽力するつもりだ」

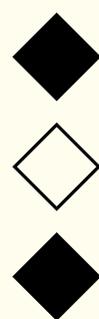
「……………」

フィッシュが深く沈黙する。その脳裏のうりで猛然と思慮が巡らされているのは言うまでもなく、三人の視線が集まる中で、やがて彼女は口を開いた。

「解りました。細かい条件はこれから詰めるとして……殿下の提案、受け入れましょう」

「ありがとう大使。貴女あなたなら理解してくれると思っ  
っていたよ」

二二ムと補佐官が驚く中で、二人は固く握手を交わした。



「つーかーれーたー！」

日も暮れ、月が浮かぶ夜。

摂政としての業務を終えたウェインは、寝室に到着するや否やベッドに倒れ込んだ。

「あーやだ、もーやだ。なんで摂政ってのはこんな忙しいんだ。こうなったら明日は休日にしよう。ついでに明後日と明々後日も」

「ダメに決まってるでしょ」

ベッドの上をごろごろと転げ回るウェインを見ながらニニムはため息。

「それよりウェイン、聞きたいことが」

「残念ながら本日の業務は終了しましたー。もう俺は寝るのでニニムも部屋に戻ってお休みしてくださいー」

「少しだけでいいから」

「……どうしても？」

「どうしても」

ふむ、とウェインは呟いた。

「じゃあ寝るまでの間、語尾ににゃんをつけてく

れるなら話す」

「……」

「へいへいへーい！ どうしたのかなニニムにやーん!? お前の好奇心はこの程度の恥すら乗り越えられないもんなのかにやーん!?」

「……解つたにやん」

「んんんんー!? 聞こえないにやーん！ もっと大きな声で言ってくれなきや困るにやおおお俺の腕があらぬ方角に！」

「あまり調子に乗るなにやん」

「すゝすいませんでしたにやん……」

そして場を仕切り直したところでウェインは言

った。

「でだ、なんであのおっばいがこっちの提案を呑<sup>の</sup>んだか、だろ？」

「おっばいって……まあその通りよ」

「にゃん」

「……その通りにゃん」

二二ムからの抗議の視線を受け流しながらウエインは言った。

「会談の前に届いた帝国からの報せを覚えてるか？」

「え？ ええ、もちろん。——アースワールド帝国皇帝に快復の兆しあり、でしょ？」

「それが理由」

「どういうこと？ ……にゃん」

ウェインは上体を起こした。

「いいか、ナトラ<sup>うち</sup>は東西を結ぶ出入り口の一つに位置してるが、実際のところ、この道は他と比べれば貧弱で使い勝手が悪く、優先度は低い。そこで他の道を制圧するまで、この国が他の国に奪われたりしないよう派遣されたのが、帝国軍五千の兵だ。そして順番が来れば、この国は武力か外交で帝国の属国になる……はずだった」

「皇帝が倒れたことでプランが崩れたわけね」

「そうだ。宮廷は荒れ、攻め落とした国の統治に

失敗し、各地で反乱の火種がくすぶり始めた。それらに対処するため、ナトラ<sup>うち</sup>みたいな弱小国相手でも友好関係を築いて時間を稼ぐ必要があった」

「でも、その皇帝が快復した。……解らないわね、尚更<sup>なおさら</sup>このタイミングでナトラ王国軍の再編に手を貸す必要がないわ。わざわざ敵を強くしてどうするの。それとも多少強くなっただころですぐに潰<sup>つぶ</sup>せると思ってるのかしら……にゃん」  
ウェインは頷いた。

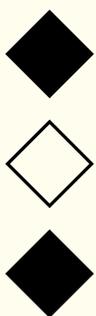
「最悪そうなくても武力制圧は可能だと考えてるだろう。でも向こうの狙いはそこじゃない。帝国にとってナトラは足掛かりでしかなく、その目的

はあくまで西側への進出だ。そこで考えてみよう、大陸制圧のためには国が大量に用意すべきものは何になる？」

「何って、資金に食料に装備、それと……」  
そこまで□にしたところまで、ニニムははっと目を見開いた。

まさかという表情でウェインに目をやり、彼はにっと笑った。

「そうさ、フィッシュ・ブランドルの狙いは——」



「ナトラの兵士を、未来の帝国兵として取り込む……!?」

「ええ、その通りよ」

ウェインとニニムが会話をしている同時刻。

あてがわれている館の一室で、フィシユは補佐官の言葉に首肯した。

「皇帝陛下の復調という喜ばしい報せは貴方あなたも聞いたでしょう？ 足踏みしていた西進政策もこれで動き出すわ。その時、精強な兵士は多ければ多いほどいい」

「……」

「一見すると、今回の取引は帝国われわれだけが負担して

いるように見える。けれど遠からずこの国が帝国領になれば、軍の教導も資金の出資も先行投資になるでしょう？ こちらに損は無いというわけよ」

「待ってください、前提に疑問があります」  
補佐官が声をあげた。

「ナトラが帝国に牙きばを剥むかない保証がどこにあるんです？」

その疑問はもつともだが、フィッシュは既に答えを得ていた。

「彼が帝国に齒は向むかうことはないわ。今日の彼の提案こそが、それを証明しているのよ。考えてもみなさい。仮にナトラの兵士が帝国兵と同等の力

量になつたとしても、帝国が負けると思う?」  
「それは……有り得ませんね。国力が違いすぎます」

「その通り。それは彼も当然解っているはずよ。じゃあ今日の提案の意味は? ただ国内の軍部へのご機嫌取り? いいえ、そんな浅いものじゃないわ。あれはナトラ王国国民を守るための痛烈な一手だったのよ」

「どういふことですか?」

「王太子は恐らく皇帝陛下の快復を知っていたんでしよう。そして当然私たちと同じように帝国の西進政策が進むことを予見し、考えた。帝国はナ

トラをどうするか？ 武力による征服か、外交に

よる降伏の二択。放っておかれることは有り得ず、  
どちらにせよ王国の歴史が終わる。ならば彼が望  
むのはどちらの結末かしら？」

補佐官の眼が見開かれた。

「あの提案は、我が国の武力制圧の可能性を遠ざ  
けるのが狙いだっただんですね……!?」

「ええ。事実、今のナトラは帝国にとってどうと  
でも捌さばける小国。武功を求め高官が武力制圧を  
推せば、そのまま通ることも考えうる。けれどこ

こに未来の帝国兵がいるとなれば話は変わるわ」

「間違いなく外交による恭順きょうじゆんが第一手として取ら

れますね……それを王太子が受け入れれば、ナトラ王国国民の余計な血が流れることはない。それに武力制圧がなければ両国間の感情摩擦まさつも極力薄くできます」

「対外的には帝国から一方的に利益りえきを得ることである。その手腕をアピールし、今の臨時政権を落ち着かせる。それでいて帝国に呑まれる将来を見越して、おんびん穩便びんに着地させる準備をする。……見事な作戦よ」

全く感嘆する他にない。会議で感じた懐の深さ。そしてこの策略を巡らせる智謀ちぼう。あれで十六歳だ

というのだから末恐ろしい。

ナトラ王国が併呑へいどんされた後、彼がどのような道

を辿るのかは分からないが――もしも生きて野に下るといふのであれば、是非とも帝国に迎えたいところだ。

しかしそうして感心しつつも、フィッシュには一つの懸念があつた。

（……本当に、彼の狙いはこれだけなのかしら）  
補佐官に語つた通り、今日の会議で彼の提案には実利があると気づき、受け入れた。

しかしその気づきをウェインは最初から想定していたはずであり、今の流れは間違いなく彼の思惑通りに進んでいる。ならば、この流れの中に他の罠わなを仕掛けは無いのだろうか。

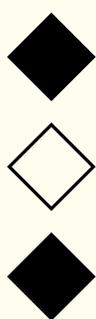
（取引の詳細を詰める段階で、あらゆる隙は潰した。  
仕掛けるなんて不可能……そのはず）

だがもしも。

もしもウェイン・サレマ・アルバレストという人物が、自分の想像するよりもなお深く、広い視野を持っていたとしたら。

（認めるしかないわね……彼の器が本物だと）

捨てきれない可能性を想いながら、フィッシュはウェインの姿を脳裏に思い描いた。



「——ま、毘なんてないんだけどな！」

「急に何の話？」

「いや、今頃向こうは疑心暗鬼いまごろになってるんじゃないかと思ってるさ」

「訝いぶかしむニニムに向かって、気にするな、とウエ

インは告げる。」

「ともあれ解っただろ、なんで向こうが条件を呑んだのか」

「……理解したわ」

「でも納得はしてないって顔だな」

「当然でしょう」

不満を露あらわにニニムは言った。

「帝国から支援を引き出すことに成功しても、その行き着く先が国家の終焉しゅうえんなんて聞かされたんですもの」

そしてニニムは躊躇ためらい気味に口にした。

「……本当に国を明け渡すつもりなの？」

「当然そのつもりだ。……おい待て腕の関節を極きめようとするな」

無言で腕を取ろうとするニニムを押し留とどめる。

「ニニムだって俺の帝国留学に付き合っただから解るだろ。帝国とは馬鹿みたいに国力差があるし、逆らっても余計に血を流すだけだ。それに留学中に帝国の統治を見て回ったけど、そんなに悪いものじゃなかつたろ？ この国

が帝国領になっても混乱は最初だけで、すぐに馴染む」

「……本心は？」

「これで面倒な立場からおさらばだぜひゃっほお  
おおおああああ腕が腕が腕が!？」

「ウェインならでできるでしょう。帝国を相手に立  
ちまわることだっつて」

「やだよ面倒くさい。……うおおおお腕が曲  
がっちやいけない方向にー!」

そのままひとしきりウェインに悲鳴を上げさせ  
た後、二二ムは諦めたようにウェインから離れた。

その背中に向かつて彼は言った。

「そんなに嫌なら反逆するか？ 俺を殺せば今回

の話は流れるぞ。なあ、俺の心臓しんぞうよ」

「……心臓がそんなことをするわけないでしょ」  
「どれほど不満を言おうとも、どれほど反対しようとも、しかし最終的にニニムがウェインの決定に逆らうことはない。」

彼女の祖先がこの地に辿り着き、王家に仕えることになった日から、それは決して覆くつがえることのない一族の誓いだ。

「そう拗すねるなよ。名残惜なごりしい気持ちは解るけど、どんな国もいずれは無くなるもんだ。それが偶々たまたま俺たちの代だったってことさ」

「……王国軍の説得は本当にできるの？」

「最初は嫌そうな顔するだろうけど、今は雌伏しふくの時とか言っつて帝国の強さを学ばせれば、逆らう気なんて自然と折れる。そんで時が来たら帝国に恭順。要所であるこの地は帝国の人間が統治するだろうから、俺は金をもらっつて悠々ゆうゆう隠居いんきよ！ 我ながら完璧かんぺきな計画だな！」

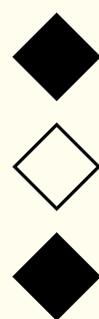
「……失敗すればいいのに」  
ウェインは笑った。

「こういう悪だくみが俺の十八番おはこだつてことは知ってるだろ？ まあ見てろつて。それとニニム」

「……にゃーん」

「よろしい」

自信満々な主君の様子に、二二ムは一層深いため息を吐いた。



二二ムの思いに反して、物事はウェインの思惑通り進んだ。

帝国の教導を受けることに最初こそ反発があつたものの、ウェインの言葉巧みな説得によつて予定通り軍の再編が実行に移される。

その結果は劇的だ。大陸でも屈指の強さを誇る帝国軍の手法を取り入れ、さらに帝国からもたら

された潤沢な資金を注ぎ込まれた王国軍は、みるみる内に成長した。

そして会談から三カ月後の今。

ナトラ王国軍は、以前と比べ物にならないほど精強な軍隊となっていた。

「いやー、つれーわー！　思い通り上手く行つてつれーわー！」

当然というべきか、この目に見える変化にウエインはご機嫌だった。

普段ならば執務室にいる時は文句と愚痴ばかりのウエインだが、今は鼻歌すら飛び出しかねない勢いだ。

「確かに王国軍の強化は順調ね」

釈然としない面持ちながら、彼の横に立つニニムもこの結果は認めざるを得ない。

「でも調子に乗って油断してると足元掬すくわれるかもしれないわよ？」

「おいおいニニム、掬すくわれるって今更どこの誰にだよ？大陸がひっくり返るような天変地異でも起きない限り、後はもう既定路線さ。隠居した後  
に何するか考えてもいいぐらいだ」

「まったく……」

大陸一周旅行とかいいかもなー、などと妄言もうげんを  
□にするウェインに、ニニムが呆あきれた眼差まなざししを向

けていると、執務室の窓を外から小突く音が届いた。音を鳴らしているのは一羽の鳥だ。窓の外にある止まり木から何度もくちばし嘴で窓を小突いており、その足には筒が結ばれている。二二ムが利用してる連絡用の鳥のうちの「一羽」だった。

二二ムは応じて窓を開けると、鳥の足首に結ばれた筒に手を伸ばして筒から伝文を取り出した。

「どうした？」

「帝国の密偵から緊急の連絡だわ」

「緊急の連絡？　なんだ、元気になった皇帝が早速軍を率いてどっかに攻め入ったか？」

「ええっと……」

二二ムは伝文を開き、書かれている文章に目を通す。

そして読み終わった彼女は、青ざめた顔で言った。

「……………皇帝が、死んだわ」

「はえ？」

ウェインは眼を瞬しばたたかせた。

執務室に奇妙な沈黙が落ちた。ウェインと二二ムは微動だにせず、さながら突然荒野に放り出されたか子羊のように、半ば途方に暮れた様子で視線を合わせていたが——やがて、ウェインが恐る恐る口火を切った。

「……………ん、ん、ん——、何か今聞き捨てならない言

葉が聞こえた気がしたんだが、多分恐らくきつと聞き間違いだと確信してるから、試しにもう一度言ってくれニム。……なんだって？」

「アースワルド帝国皇帝が、死んだわ」

「……」

ウェインは顔を覆って天井を仰いだ。  
おお てんじょう あお

「そっかー……皇帝死んじゃったかー」

噛みしめるように呟きながら、ウェインはゆっくりと息を吸い、

「はあああああああああっ!?!」  
叫んだ。

「死んだ!? 死んだ!? 死んだ!? あいつ!? いや

だって、この前快復してきたとか言ってたじゃん！  
なあちよつとどういふこと!?」

「最近また少し体調を崩して、大事を取って休んでたはずが急に……って感じみたい」

「ご、誤報ってことは!?」

「帝国の方で正式に発表されてるそうよ。……しばらくは隠すこともできたでしょうけど、多分帝国の宮廷内で政治的な駆け引きがあったんでしようね」

「ノオオオオオオオオオ！」

ウェインは全力で頭を抱えた。

「ま、まずい。待て、ちよつと待て、どうなるん

だこれは。えーっと皇帝が死ぬとナトラ<sup>うち</sup>への影響は……影響は……」

その時、乱暴なノックの音と共に有無を言わさず扉が開かれた。飛び込んできたのは、王国軍の伝令だ。

「失礼します、ウェイン殿下！ 我が国に駐留している帝国軍が、突然移動を始めました！」

（ほわあああああああ!?）

絶叫を心の中で留められたのは奇跡だった。しかし伝令はそんなウェインの内心に気づかず続ける。

「東の国境へ向かっている模様ですが目的地は不

明！ また、ラークルマ隊長が帝国軍を追うか否かの判断を求めています！」

伝令の言葉を聞きながらウェインは猛然と思考を働かせる。皇帝の死。国境へ向かう帝国軍。それらは間違いなく連動したものだ。

（だとするのならこの後に来るのは――）

ウェインの予感を裏付けるように、それは訪れた。

「お待ちを！ 私が取り次いでまいりますので！」

「大使殿！ どうかお下がりにください！」

「無礼は承知の上！ 時間がないので！」

開け放たれた扉の外から喧騒けんそうが届く。複数の

人間が言い争いながらこちらへ向かってくる気

配。二二ムがそれとなくウェインと扉との間に立とうとするのを手で阻む。これから現れるのが誰か、ウェインは既に察していた。

「摂政殿下！」

近衛このえの兵士たちを押しつけながら、荒い足音を立てて現れたのは、やはりというべきか、フィッシュ・ブランデルだった。フィッシュはウェインの姿を認めるや否やその場でひざまず跪いた。

「一国の宮廷にてこのような狼藉ろうぜきを働き、申し開きもございません！　しかし大至急お話ししなければならぬことが！」

「……帝国軍が国境へ向かっていることは聞き及およ

んでいる」

ウェインは冷たい眼差しをフィッシュに向けた。

「帝国軍の指揮権は当然そちらにある。しかし事前に何も告げずに軍を動かすとは、いかなる了見りようけんか。互いに良い関係を築こうとしていたのは、私の思い違いだったか？」

（――って言うしかないよなああああ――！）

□にしている言葉と対照的に、ウェインは内心で悶もだえていた。

（解るよー！めっっちゃ焦ってるの解るよー！でもここまで押しかけてきちゃダメだろ！これじや周りに秘密にできないじゃん！ 部屋の中で話

し合えたらそっちの都合にだっつて合わせられたの  
に！）」

この場にはウェインとフィッシュ、ニームは元より、  
先ほどの伝令や近衛が固唾かたずを呑んで見守っている。  
さらに騒ぎを聞きつけて他の家臣も集まってきた  
いるのをウェインは感じていた。

「その件につきましては、誠に申し訳ございませ  
ん……！　しかし、決してナトラ王国を害そうと  
いう意図があつてのことではないのですー！」

「では、いかなる理由で彼らは動いている？」

「……本国からの指示です。一刻も早く、駐留し  
ている帝国軍を帰還させよと」

「何ゆえそのような指示が？」

「……」

フィッシュが逡巡しゅんじゅんの表情を浮かべる。自らの知る重大な情報をここで口にすべきか悩んでいるのだらう。しかしウェインとしては彼女に言ってもらわなければ、自分とはともかく周囲の人間を納得させられない。

「皇帝陛下が……御隠おかくれになっただゆえのことです……」

どよめきが、さざなみのように広がった。

(……何てことなの)

頭こっぺを垂たれた姿勢のまま、フィシユの胸中つうちんは痛恨つうこんの極きわみにあつた。

それは皇帝の崩御ほうぎょや駐留軍の暴走に対して――ではない。

ウェインの目論見もくろみを看破できなかつた、自分への悔恨かいこんである。

帝国では皇帝を信奉する人々は非常に多く、何を隠そうフィシユもまたその一人だ。

だから思いもよらなかつた。いや、白状すれば考えたくなかつたのだ。

王国軍の強化をしてる最中さなかに皇帝が崩御したらどうなるか、などと。

（けれどその甘さは王太子にはなかつた。彼はここまで想定していた……！）

占領しているのならばいざ知らず、あくまで友好国に駐留しているだけとなれば、本国に政変があつた時に帰還命令が出る可能性は極めて高い。

止めようにもフィッシュは外交部署に所属する立場であつて、軍部に要請はできても命令する立場にはなく、駐留軍の帰還を止めることはできないのだ。

そして駐留軍が去れば、ナトラ王国に残るのは、帝国の資金で帝国式に鍛えられたナトラの軍隊である。少なくとも本国が落ち着くまでは、これを

取り込むなどできるとはさすがない。

（西進政策が進むことしか私には考えられなかつた。けれど王太子は、そうなた時のことと、そうならなかつた時のことまで考えていた）

認めるとはかない。彼の器は本物であり――自分はそのに負けたのだ。

心の中で悔しさとウェインへの賞賛がないまぜになるのを感じながらフィッシュは思った。勝者たる彼は今、何を想っているのだろうか。その冷たい眼差しの奥に、どのような意思の光が瞬いているのだろうか。

その答えをフィッシュが知ることは永久になかつ

たが、

（完全に俺が帝国ハメた形になっちやってるじゃんよおおおおおおお！）

自分を負かしたーと思っ  
ているー相手が内  
心でこんな七転八倒しちてんぱうとうして  
るなどは、知らない  
方が良かったらう。

「摂政殿下、我らに王国を侵犯する意  
思などなく、目的は本国への速やかな  
帰還です。どうか撤退を  
お許そうしつしてください。彼らの行  
動はあくまでも主君の喪失と忠義が  
ためなのです」

伏したままフィッシュは許しを請  
う。愚王ぐおうならばこれを機に撤退  
する帝国軍の背を討うつなどとする

かもしれないが、彼はそうはすまい。

「……事情は解つた。忠を尽くす相手を失つた将兵の心痛、憫察びんさつするに余りある。帝国へ真まつ直すぐに帰還するといふのであれば、これ以上我らは干渉すまい」

「感謝いたします、摂政殿下」

「なに、我が王国軍の教練が途中で終わるのは残念だが、帝国の大事となれば致し方ない。一刻も早く混乱が収まることを願っているぞ」

「……御言葉、有難ありがたく」

かくしてアースワルド帝崩御の報せは、瞬く間

に大陸全土へと広まり、列国に大きな動揺と、野心の炎をかきたてることとなる。

なおこの日、「どうしてこうなったあああああ  
あ！」という沈痛な叫び声がナトラ王国の王宮に  
て木<sup>こだま</sup>霊したとされているが、詳細な記録は残され  
ていない。

## ◆第二章◆戦場にて王子は悩む

ヴーノ大陸の東部に位置するアースワルド帝国が、強い指導力を持つ皇帝と、皇帝に忠誠を誓う有能な武人と文官たちに率いられ、建国以来の黄金期を迎えていたことは、大陸全土が知るところだ。帝国民たちは自らが帝国の民であることに誇りをもち、今日より明日が輝かしくなることを疑わなかつた。

しかしその展望は脆くも崩れる。偉大な皇帝の急逝を原因とした各地の混乱の勃発。輝いてきた

はずの未来に暗雲が立ち込めつつあることを、  
ての帝国民が肌で感じていた。全<sup>すべ</sup>

ここで帝国が踏みとどまれるかは、  
皇帝を支えてきた<sup>のうり</sup>能吏たちの手腕にかかっているのだが――今の皇宮は、  
権力闘争の魔窟<sup>まくつ</sup>と化している。皇帝という太陽を  
失ったことで、抑え込まれていた権力の闇<sup>やみ</sup>がにじ  
み出てきたのだ。

無論、その状況に歯止めをかけようとする思い  
を抱く者はいる。

ナトラ王国より帰国したフィッシュ・ブランデル  
もまたその一人だ。

（……だというのに、不<sup>ふ</sup>甲<sup>が</sup>斐<sup>い</sup>ないわね）

皇宮の一室から出てきたフィッシュは、小さくため息を吐く。

そこに駆け寄ってきたのは外で待っていた補佐官だ。

「大使、どうなりましたか？」

「しばらく<sup>きんしん</sup>謹慎してるとのお達しだったわ」

先のナトラ王国においてのフィッシュの失態。その処分を下されるのが今日だった。

「良かった、予想よりも軽いものでしたね。きつと、大使のこれまでの実績によるものですよ」

「というより、私に構っていられるような状況じゃないというのが正解でしょうね」

ナトラにしてやられたとはいえ、所詮しょせんは小国の出来事。他ほかにやるべきこと、優先すべきことは、今の帝国にはいくらでもあるのだ。

そう、いくらでもある。もちろんフィッシュにできること。しかし、それをすることが今の彼女には許されない。

「今こそ帝国のために身を粉こにしなくてはいけないのに……」

□惜しい。胸の中は自分に対する苛いらだ立ちでいっぱいだ。

「ダメですよ大使、謹慎中に何かしたら今度こそ重い処分が」

「もちろん解ってるわ。謹慎が解けるまで大人しくしてるつもりよ」

でも、と彼女は続けた。

「調べ物をするぐらいは大丈夫でしょう？」

「調べるって……何をです？」

「ナトラの王太子についてよ」

補佐官は困ったような顔になった。

「大使、してやられた気持ちちは解りますけど、終わったことですから切り替えないと」

「そうじゃないわよ。私はあの少年に怒ってなければ憎んでもないわ」

フィッシュの言葉は本心だ。

「いつそ、それもこれもあの王太子のせい、と思  
ってしまえば楽だったのかももしれないが、今でも  
ウェインに対する感情は好意的なものだ。彼は彼  
の最善を尽くし、自分は読み負けたのだと素直に  
認められる。」

「だからこそ思う。次は、次こそはと。」

「私の勘だけど、あの王太子はさらに躍進やくしんする。  
もしかしたら我が帝国に牙きばを剥むくことすらあるか  
もしれない。そうなった時に我が国が遅れを取ら  
ないようになしておきたいの」

「さすがに買いかぶりすぎな気もしますが……大  
使がそう仰おつしやるのなら、私も手伝いますよ」

フィッシュは微笑ほほえんだ。

「助かるわ。それじゃまずは、帝国に留学中の彼について調べることにしましよう。彼についてある程度は知っているけど、新しい発見があるかもしれないわ」

「解りました、では資料の閲覧を手配してきますね」

補佐官は駆けて行つた。

フィッシュは窓から外を見る。目に映るのは西のナトラ王国に繋つながる空だ。

「さて……あの王子様は、今頃いまごろどうしているのかしらね」

自らの好敵手となつた少年のことを考えながら、  
フィシユもまた廊下を進んで行つた。



帝国軍がナトラ王国から去り、二カ月が経<sup>た</sup>つた。  
今、ウェインの眼下に整然と並ぶのは数百の兵  
士たちだ。

指揮官から下される指示で、素早く的確<sup>に</sup>行  
動するその姿は、まるで一つの生物だ。一<sup>いっ</sup>拳<sup>きよ</sup>手<sup>しゆ</sup>  
一<sup>いっ</sup>投<sup>とう</sup>足<sup>そく</sup>から気迫<sup>あふ</sup>が溢れ、見て<sup>い</sup>る<sup>る</sup>だけ<sup>け</sup>でも気<sup>け</sup>圧<sup>お</sup>さ  
れ<sup>れ</sup>そ<sup>う</sup>う<sup>に</sup>なる。

「いかがでしよう、ウェイン殿下でんか」

「上々だ」

丘上の天幕から兵隊を眺めていたウェインは、家臣の言葉に満足げに頷うなずいた。

「帝国の教導きょうどうを失い、迷走するかとも思っていたが、よくぞここまで練り上げた。お前に任せたのは正しかつたな、ラークルマ」

「ははっ」

ラークルマと呼ばれた男は恭うやうやしく頭こぶを垂たれた。

長身でしっかりした体格の男だ。それでいて威圧感がないのは、その朴ぼく訥とつとした顔立ちによるものだろう。他に特徴といえば常人よりも長いその

両腕か。彼はナトラ王国軍が抱える指揮官の一人であり、ウェイン自身が見出した人材でもある。

「されど殿下、この件において私は殿下の意思をくみ取り、従ったにすぎません。お褒めの言葉を授かるに値するとは」

「それを十全じゅうぜんにこなせる家臣がどれほど得難えがたいか、解らないわけではないだろう。成し遂げたのは紛まぎれもなくお前の功績だ」

「私を見出し、重用ちゅうようしてくださったのは殿下であり、この任をお与えくださったのも殿下です。ならばこの結果は殿下の采配さいはいの賜物たまものであり、私自身の功など砂の一粒ほどもありません」

「……全く、相変わらずだなお前は」

呆れた様子あきのウェインと一層頭を垂れるラーケルム。

そこにくすくすと可憐かれんな笑い声が割って入った。

「ふふ、おかしいんだから二人とも」

そう口にするのはウェインの妹、フラワーニヤだった。

「すまないなフラワーニヤ。退屈だったか？」

「いいえ、綺麗きれいに動く兵隊さんは見てて面白おもしろいし、

二人の会話を聞くのも楽しいわ。でもねラーケルム、せつかくお兄様が褒ほめてくださってるんですから素直に受け取るべきよ。私だって滅多めったに褒められ

ないんだから、羨ましいぐらいだわ」

「だ、そうだぞラークルム」

苦笑しながら視線を向けると、ラークルムは困ったような顔になり、やがて言った。

「……両殿下のお言葉、有難く心に刻みます」

「ラークルムも我が妹にかかれば形無しだな。見事だフラワーニヤ、褒めてやろう」

「あら、困ったわ。これで褒められるなら、ラークルムにはこれからも意固地でいてもらわなきゃ」

兄妹は大きく声をあげて笑い、ラークルムも小さく笑みを零した。

「ところでお兄様、最近二二ムの姿を見かけない

けど、どうかしたの？」

「ん？ ああ、ちよつとニニムじゃないと任せられない仕事があつてな。それに取りかかつてもらつてるんだ」

生まれた時からウェインに仕えることが決まつており、そのために英才教育を受けているニニムは非常に優秀だ。大抵の事はそつなくこなしてしまふ。

「珍しいわ。仕事とはいえ、お兄様がニニムを傍そばから離すだなんて」

フラワーニヤの言葉は真実だ。ほとんどの時間において、ニニムはウェインの傍に控えている。

「仕方ない。他に任せられるのがいなかっただからな」

ウェインとて不本意だ。なにせ彼女が仕事を手伝ってくれるかどうかで、山を歩いて越えるか飛んで越えるかというぐらいに違ってくる。今日この後、自分一人でこなさなくてはいけない案件を想おもうと、「うばー」と心の中で呻うめいてしまっただ。それならば他の人材に――というのもなかなか難しい。摂政せつしょうであるウェインだが、あくまでも国王の代役でしかない。家臣の大半は国王によつて登用された人材であり、その忠誠心は当然ながら国家と国王に向いている。純粹にウェインに忠誠

を誓い、その能力が国政に携たすわるのに足りている人材は、今のところニニムとラークルムぐらいである。

そしてラークルムが練兵れんぺいに手を割いている以上、他に重要な事案があればニニムを向かわせる他になかった。

「そのお仕事って、もしかして帝国についてかしら？」

「うん？ どうしてそう思ったんだ？」

「最近、帝国の武器をいっぱい買ってるって聞いたから」

ほう、とウェインは内心で驚いた。隠し立てし

ているわけではないが、フラーニヤの耳にまで入っているとは。あるいはこの国難において、自分も何かしようと国政への関心を持ったのだろうか。「確かに武器は買ってるが、ニームに任せてるのはまた別だな。まあ無関係ってわけでもないんだが……」

フラーニヤの頭を撫なでながらそう答えていたウエインの脳裏のうりに、一つ閃ひらめくものがあった。

「そうだフラーニヤ、どうして俺おれが帝国から武器を買ってるか解るか？」

せっかく興味を持ったのだから、簡単な教材にするのも悪くない。問いかけられたフラーニヤも

ウェインの意をすぐに理解したのか、すこし考えてから言った。

「……ナトラ王国で作った武器より、帝国の武器の方が質が良いから？」

「正解の内の一つだな。とはいえこれはナトラが特別悪いのではなく、軍事大国だけあって帝国の特別質が高いんだ。他には？」

「まだあるの？ ええつと……」

フラニーヤは眉根まゆねを寄せて考え込むが、なかなか答えが出てこない。やがて困ったような顔をウェインに向け、その微笑ほほえましい様子に彼は小さく笑った。

「あまり大きな声では言えないが、帝国に対する詫<sup>わ</sup>びだ。先日の取引で、少々ナトラ<sup>うち</sup>が持つていきすぎた」

「そうなの？　でもみんながお兄様の事を褒<sup>ほ</sup>めてるわ。帝国大使をやり込めたって」

我がことのように誇らしげなフラワーニヤだが、ウェインは頭を振った。

「他国との外交は、一方的に利益<sup>りえき</sup>を得ればいいわけではないんだ。特に帝国との国力差を鑑<sup>かん</sup>みれば、余計な敵意を持たれるのはできるだけ避けなくてはいけない。これが二つ目の理由だな」

フラワーニヤは得心したように頷<sup>うなず</sup>き、それから首

を傾<sup>かし</sup>げた。

「三つ目もあるの？ お兄様」

「ああ。それはな——」

ウェインが答えようとしたその時、

「失礼します！」

天幕に飛び込んできた伝令が、その場にいる全員に聞こえる声で叫んだ。

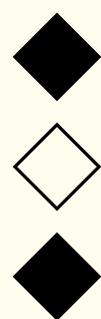
「マーデン王国が、我が国へ進軍を開始しました！」

フラニーヤが驚きに目を見張った。

きたか、とラークルムは小さく眩<sup>つぐや</sup>いた。

そしてウェインは淡々と告げた。

「すぐに必要になるからだ」



マーデンはナトラの西側に隣接する王国だ。

隣国であるにも拘わらず、かか国家間の交流は民間レベルに留まっとどている。大陸の中間に位置するナトラ王国だが、政治や思想的には東寄りであり、西側の諸国とはあまり仲が良くないのだ。

国土の規模はナトラと同等であり、小国である。当然国力も同じーだった。少し前までは。均衡が崩れたのは、マーデン国内における金鉱

山の発見が原因だ。それにより近年のマーデンの国力は大きく飛躍していた。

しかもその金鉱山は、ナトラとの国境に比較的近い位置に発見されたのだからたまらない。ウエインは何度心の中で「ちくしよおおおお！」と叫んだことか。攻め入って奪うことも真剣に検討けんとうされたが、最終的には立ち消えた。

そのマーデンが今、ナトラに攻め入ろうとしている。

他国との戦争は実に十数年ぶりだ。訓練と領内の取り締まりしか経験していない軍人も少なくなっている。さぞ関係者たちは浮足立っているだろう――

と思いきや、宮廷の会議室に集まったウェインと武将たちの顔に動揺は無かった。

「まさしく、お言葉の通りになりましたな」

「殿下の慧眼けいがんに感服いたします」

彼らが落ち着いていられる理由は単純だった。

ウェインはマーデンが遠からず侵攻してくることを読み、武将たちとその対策を練っていたのだ。

「そんな難しいことでもないさ」

答えるウェインの言葉は謙遜けんそんではなく事実だった。

た。

現マーデン国王の評判は良くない。その荒れた

統治は隣国であるナトラにも届いている。それ  
 いて政治的失策から目を逸そらし、自らを名君であ  
 ると肯定する奸臣かんしんばかりを侍はべらせ、諫言かんげんを口くちにす  
 る忠臣を遠ざける。それが一層国内の荒廃に拍車はくしゃ  
 をかけ、悪循環を起こしているのだ。

せっかく見つけた金鉱山も、その損失を補うこ  
 とに利用されている有様ありさまだ。先代の王が賢君であ  
 っただけに民の失望は一際ひととき強く、不満は大きい。

そんなマーデンにとつてみれば、今のナトラ  
 の状況は千載一遇せんざいいちぐうの好機だろう。国力は格下で、  
 目障りめざわりだった帝国軍は帰還した。戦果という解り  
 やすい功績を得るのにうつつだ。

もちろん全ては勝てればの話でありーそうさせないための準備を、ナトラ側は十分しているわけだが。

「国境の警備隊はどうしてる？」

「はっ。ご指示通り交戦を避け、敵軍の調査に専念させています」

「よろしい、それではマーデンの兵力はどの程度だ？」

「報告では七千ほどだそうです」

武将の一人が答えた。

「一万を切ったか。想定の中でも一番少ないところだな」

「カバリヌを警戒してのことでしょう。あそこは血気盛んな国ですから」

マーデンと隣接している国はナトラだけではなく、カバリヌもその一つだ。もちろんマーデンの金鉱山を羨うらやんでいるのも、ナトラだけではない。

他国を侵攻するにあたって、防衛にどれだけ兵を残して出兵するか。戦国の世において、このバランス感覚は決して尽きることはない悩みである。

「対して迎え撃つための我が軍の兵力は六千。少々届きませんか」

「それだけいけば十分だ。装備は行き届いているな？」

「はい。さすが帝国の武具は良いものが揃っそろていますな。これならばマーデンの装備に劣ることはありません。すまい」

事前に侵攻を予測していただけに、軍議は半ば確認と細部の詰め作業でしかない。

だからこそウェインは武将たちの言葉を耳にしながらか、意識では別のことを考えていた。

（準備に不足はない。帝国辺りが余計な騒動を起こす前に動けたのは幸いだな）

皇帝の復帰による速すみやかなナトラ従属の道は断たれた。さらに聞くところによれば、帝国は三人いる皇子の誰だれが後を継ぐかで宮廷が割れ、内乱の

気配すらあるとか。

しかしそれでもなお、ウェインは帝国は大国であり続けるとみている。その屋台骨が折れることはなく、国難を乗り越えて東の雄で有り続けるだろうと。

いずれ必ずまた帝国に国を売る機会が訪れる。ならばその時までにはすべきことは、ナトラの国力を高めることだろう。国の価値が高ければ高いほど、売る時の値段も高くなる。それが隠居いんきよ後のエンジョイライフを左右すると言っている。

（帝国式に鍛えられたナトラの兵。この強さと価値を証明するために、マーデンとの戦争は丁度いい。

他の国への牽制けんせいにもなる。問題は勝てるかどうか  
だけどーどー)

兵を鍛え、地理を調べ、戦術を練った。マーデ  
ン国軍の情報も収集してある。万が一にも負ける  
ことはない。少なくともマーデン軍を叩き返すこ  
とはできるとウエインは確信する。

そして叩き返した後は速やかな講和だ。マーデ  
ンがこちらに侵略してきたのは、簡単に勝てると  
侮あなどっていたからこそ。藪やぶを突いて蛇が出たとなれば、  
こんな不毛な国の土地を取りに来ることもないだ  
ろう。

(完璧かんぺきなシナリオだな……！)

以前の帝国との取引では、不幸な偶然が重なって目論見もくろみが破綻したが、あくまで事故だ。今度こそ物事が自分の思い通りに進むことを予見し、ウェインは内心で小躍りした。

だが、もしもこの場にニニムがいれば、浮かれるウェインに周りを見るよう忠告しただろう。そしてウェインは気づいたはずだ。平然としている武将たちの根底に、緊張とは違う何かがあることに。そもそも、ウェインが摂政となるまでのナトラ王国軍は、端的に言って不遇ふぐうだった。

国王が軍部を粗雑そざつに扱ったわけではない。しかし長い間戦争と無縁だったナトラにおいて、軍人

が功績を立てられる機会はごく僅わずかだ。自然と宮廷における発言力は低下していき、挙句あげく他国の軍人が我が物顔で国内を闊歩かつぽする始末。彼らの忸怩じくじたる思いは相当だ。

しかし、ウェインがそれらを変えた。

言葉巧みに帝国式の教練法を入手し、さらにナトラから帝国軍を追いだし、帝国の武器まで買い揃えて配布した。もちろんその政策には、政権が不安定な今、軍部の好感度を稼ごうというウェインの目論見が含まれており、それは軍部も承知していた。

承知した上で、軍部はウェインに感謝していた

のだ。彼が想像するよりもずつと。遙かに。はる

そこに来て、このマーデン侵攻である。

「今こそ、ナトラの剣としての役目を果たす時！」

「摂政殿下のご期待にこたええずしてなにが臣か！」

といった具合に、武将たちのテンションは最高潮だった。

もちろん、初陣だういじんというのに平然としているウェイ

ン——何せ彼は勝利を確信している——の前で、そ

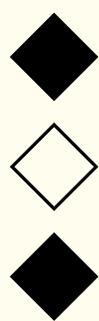
んな鼻息を荒くするのは無様ぶざまというもの。武将た

ちは表向き、努めて落ち着き払っており、それが

結果として両者の温度差を隠していた。

（殿下に完全なる勝利を捧たかげよう！）

（軽く一当てしてさっさと講和だー！）  
かくして、ウェインと武将たちはすれ違いに気づかないまま、マーデン軍との戦いを迎えることとなる。



ポルタ荒原こうげんはナトラ王国西部の国境付近の土地である。

荒原と呼ばれる通り、砂と岩だらけの不毛な地帯だ。春先のため雪は積もっていないが、真冬となれば一面が銀世界と様変わりする。

その荒原を今、七千の兵士からなるマーデン軍が進軍していた。

軍の指揮を預かるのはマーデン王国の将軍、ウルギオである。壮年の男であり、厳めしい顔つきと鋭い眼差しは、さながら猛禽類のようだ。

「ふん。話に聞いていた通り、何もない場所だな」  
馬の背から見られる景色を眺めながら、ウルギオはつまらなさそうに言った。

「宮廷の豚共の無能ぶりは度し難いな。こんな場所を切り取ったところで、何も得られまい」

「奴らは自分たちが招いた失策から、民草の目を逸らさせようと必死ですからなあ」

苦笑いを滲にじませながら副官が応える。ウルギオは鼻を鳴らした。

「それならば、今回の遠征費用を民にばら撒まいた方が目くらましになるだろう。そんなことも解とらない連中が政治を司つかさどっているとは、ますます度どし難がたい」

「無能なあいつらがそんなことをしたら、勢いあまつて我らの飯種めしだねまで配りそうですなあ」

「その時は、豚共を丸焼きにしてやろう。臭くて食えたものではないだろうがな」

二人が大笑いしていると、騎馬が一騎駆け寄ってきた。

「伝令！ 四十キロメートル東にてナトラ王国軍を発見！ こちらに進軍してきますー！」

「むっ……」

ウルギオの目に光がよぎった。

「我らの予想よりも動きが早いですな」

「ふん。さすがは北の風見鶏かざみどり。機敏さだけは取り

柄としてあるか。もっとも、足が早いだけで、槍やり

を家に忘れてきてなければよいがな」

「しかし將軍、奴らは最近帝国に兵を鍛えられたと聞きます。油断すると手を噛かまれるやもしれません」

「案ずるな。

鶏にわとりが鷹たかの飛び方を覚えたところで、

所詮は鶏であることを、奴らはこれから身を以て<sup>もっ</sup>知るだろう。行軍の足を速めろ。獲物が自ら首を差し出しにきたのだ、さっさと片づけるぞ」

「ははっ！」

副官が指示を飛ばす姿を横目に、ウルギオは東へ意識を向けた。

経緯がどうあれ、自分はこの戦争の將軍として任命された。相手が虫けらのごときナトラ王国と、というのが物足りないが、功は功だ。せいぜい首を挙げさせてもらおう。

「少しは楽しませてくださいよ、ナトラの弱兵ども」  
この荒れた大地がナトラ軍の血で染まることを

確信し、ウルギオは獰猛どうもうな笑みを浮かべた。

一方その頃ころ、ナトラ王国軍にもまたマーデン軍発見の報告が届いていた。

「想定からは外れていないな」

「はい。我らは予定通りこの先の丘に向かうとしましよう」

馬上で地図を広げるウェインに頷くのは、同じく馬に乗って隣を進む老境ろうきょうの武将だ。名をハガルといい、ナトラの將軍である。

今回のナトラ軍の総大将はウェインだ。彼自身は武功などに興味はないし、それどころか武官の

手柄を奪いかねないため、可能ならやりたくない  
とすら思っている。

が、なにせしばらく振りの戦争だ。どんな不測の事態  
が起こるか解らない。武力以外のことでは何か起きた時に  
迅速じんそくに対応できるよう、自分がついていった方がいいだろ  
うという判断である。

とはいえ、実際の戦場に出たことのない自分が  
指揮を執とるなどと言え、さすがに兵士たちも不  
安になる。なので今回の戦争で実際に指揮を執る  
のはこのハガルだった。彼は元々他国の武将であり、  
有名な戦争にて何度も活躍した歴戦の名将である。

本来ならばナトラにいるような人材ではないの

だが、数十年前、その華々しい人気を危険視した当時の主君によって命を狙われ、逃亡の果てにナトラに流れ着いた過去を持つ。最近は一線から離れているものの、彼が指揮するとあれば、誰も不満には思わない。

（しっかしまあ、軍が金食い虫ってのは本当だな）  
指揮をハガルに一任しているため、実質的に神輿みこしでしかないウェインは、これ幸いと軍で消費されている物資の種類と量を検証している。そうして感じるのは、とにかく軍を動かすのには金がかかるということだ。

支払う俸給ほうきゅうはもちろん、兵士たちが口にする水

や兵糧。馬や馬に食べさせる飼葉かいばや武具。他にも雑多な生活用品が山ほど。それをひっくるめた諸経費の精算を帰国したらせねばならないと思うと、「ヴぁー」と死人のような呻き声もが漏れそうになる。「如何いかがされましたか、殿下」

「ん、ああ……この戦争がどれほどで終わるかとか考えていてな」

なにせ早く終わればそれだけ出費も抑えられる。世の中には戦争大好きな国王もいると聞くが、きつと算術が得意ではないのだらうなとウェインは思った。

「ハガルはどう思う？」

「難しいところですね。戦いくさというのは蓋ふたを開けてみなくては結果は解らないものですから。……なるべく早い決着を殿下はお望みで？」

「早く終わるに越したことはないとは思ってる。が、それを求めるあまり勝利を遠ざけるようでは意味がない。そういう意味では……そうだな、俺が望むのは納得だ。たとえ時間がかかろうとも、この戦いこそが最良であつたという納得が欲しい。どうだ？ ハガル」

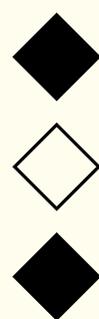
「お任せください」

老人は孫ほどの少年に恭うやうやしく頭こぶを垂たれた。

「必ずや、会心の戦をご覧に入れましょう」

「期待しよう。さて、そろそろだな」

ウェインの見据える先に、小高い丘が見えてきた。



ナトラ軍、兵六千。

マーデン軍、兵七千。

岩と砂だらけの荒野の上で、両軍は向かい合っていた。

両軍の距離は十分に離れているにも拘わらず、既に戦場の空気は張りつめている。これからこの一万余りの人々が、互いの命を奪い合うのだ。

「殿下、布陣が整いました」

丘の上に設営された天幕にて、ウェインはハガルからの報告に頷いた。

「マーデンの方はどうだ？」

「向こうも準備はできているようですね」

「後は開戦を待つばかり、か」

「はい。そこで殿下、よろしければ開戦前に、殿下の御言葉を皆に頂きたく」

「構わないが、戦う前に兵を鼓舞する効果は侮れないものなのか？ ハガル」

「もちろんです。軍と軍の戦いは文字通りの死域の世界。肉体以上に心の柱がすり減っていきます。

それが折れないよう支えるのが将の言葉なのです」  
歴戦の将がそういうのならば反対する理由も無  
かった。それに兵士をちゃんと気にかけているア  
ピールをしておけば、クーデター防止の一助にも  
なるだろう。

とはいえどのよう<sup>ふもと</sup>に語ればいいか。考えながら  
丘の麓に居並ぶ兵士たちの前に立ち、彼らの様子  
を目にした時、心は定まった。

「ヘーノイのトレイス」

ウェインが口にしたのは人の名前だった。

声に反応したのは、並んでいる兵士の中の一人だ。  
突然王太子に呼びかけられたことに、驚きと戸惑

いで目を白黒させている。そんな彼に向かつてウ  
 エインは言った。

「槍、逆」

「え……あつ」

指摘された兵士が自らの手元を見ると、槍の穂  
 先が地面に、石突きが空に向いていた。彼は慌て  
 て槍を回して穂先を空へ向け、直立不動ちよくりつふどうの姿勢に  
 戻った。しかしその顔は真まっ赤かになっ  
 ており、誰かが噴き出したのを皮切りに、周  
 囲に笑い声が伝染した。

が、そこにウエインの言葉が突き刺さる。

「カールマン、パテス、リビ、ログリー、笑いす

ぎだ」

ひときわ

一際大きく笑っていた兵士たちが、ギョツとして口をつぐんだ。その様子がまた滑稽こっけいで、しかしここで笑えば自分たちが名指しにされるため、兵士たちは口を閉じたまま肩を震わせた。

（どうやら、緊張は解けたみたいだな）

先ほど一目見てウェインは彼らが強い緊張の中にあるのを感じ取った。

無理もない。自分も含めて、まともな戦場など初めての人間が大半だ。いくら訓練を積んでいるとはいえ、実践でしか学べないものは確かに存在する。

ともあれここで第一段階はクリアした。ならばあとは士気を高めるだけだ。

「今日まで、我がナトラ軍は弱兵のそしりを受けてきた。あるいは、それは事実だったかもしれない。向こうのマーデン軍も我らをそう侮あなどっているだろう」

ウェインの声が兵士たちの間に響き渡る。

「だが、俺は知っている。お前たちが過酷な訓練を耐え抜いたことを。俺は知っている。お前たちが誰よりも気高い勇気を持っていることを。俺は知っている。侵略者を前にしたその心に、消えぬ炎が灯ともされていることを。――ならば、今のお前

「ない」

弛しかん緩かんした空気から一転。兵士たちに燃えるような高揚こうようが生まれる。その熱をさらに煽あおるべくウエインは声を張り上げた。

「この一戦で証明せよ！ 我らが北方に座ざす竜である！ 大陸に響かせよ！ 我らが地上最強の軍隊であると！ 征ゆくぞ！ 今こそ歴史を塗り替える時だ！」

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

天地を揺るがす歓声が響いた。

どうやら士気の向上はできたようだ。内心で一

息ついていると、ハガルが馬を寄せた。

「お見事でした、殿下。私の激げきではここまで火はつかなかっただでしょう」

「少なくとも、緊張して武器を落とすことはなさそうだな」

ウェインの軽口にはハガルは小さく笑った。

「時に、先ほど名前を呼んでいた兵士たちは仕込みですか？」

「馬鹿ばかを言え、即興そっきょうだ」

「ではたまたま名前を？」

「だいたい覚えてるだけだ。数十万も抱えている帝国じゃあるまいし、ナトラの兵士なんて全部ひ

つくるめても一万程度だしな」

「……………」

ハガルはとても奇妙な表情を浮かべた。

沸き立つナトラ軍の様子に、ウルギオは忌々しいまいまげに舌打ちした。

「風見鶏風情ふぜいが喚わめき散らすわ」

「將軍、こちらにも攻撃準備は整いました」

「うむ」

ウルギオは苛立いらだちを鎮め、整然と並ぶマーデン兵士たちに向き直った。数千の視線が集まる中、短気なところなど見せるわけにはいかない。

「聴け！ マーデンの勇士たちよー！」  
兵士たちの腹の底まで震えるような声でウルギ  
才は叫んだ。

「あれなるはナトラの雑兵ぞうひょうしである！ 勇気と蛮勇  
をはき違え、愚かにも我らの進撃に齒向かおうと  
するつもりだ！ だが北の田舎者いなかがどれほど集ま  
ろうと、真の精兵たる我らに勝てる道理など一つ  
もない！」

ウルギ才は剣を掲げ、呼応するように兵士たち  
も各々の武器を空に向けた。

「蹂躪じゅうりんせよ！ 奴らの血でこの荒野を染め上げる  
のだ！ 全軍、攻撃開始い——い——い——！」

七千の人間からなる咆哮ほうこうが空に木霊こだまし、一斉に地を蹴けった。

「きたか」

マーデン軍が動いた。それはまるで人で造られた津波だ。後方の本陣にいてもなお、刺すような圧力をウェインは感じた。

「全隊、構え！」

ハガルの指示により、ナトラ軍の歩兵たちが一斉に盾たてと槍を構える。攻め入るマーデン軍に対して、こちらはあくまで守備。その場を動かさず迎え撃つ態勢。あちらが津波ならば、こちらは堤防だ。

マーデン軍が迫る。チリチリと肌が焼けつくよ  
うだ。

勝てる。勝てると確信している。が、それでも  
不安を抱いてしまるのが人の性だ。表向きは泰然  
と戦局を見ているように装いながら、ウェインは  
内心で祈っていた。

（頼むぞー、上手うまくいっまてくれ）

両軍の距離が狭せままる。加速度的に上がる心拍数。  
そして津波と堤防の先端が――

「――ん？」

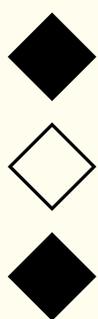
その瞬間、ウェインとウルギオは揃って目を見張った。

(おい……おいおい……！)

(ち、ちよつと待て……!?)

自らの目に映る光景に、両軍を挟んだ対極の位置にいる二人は、奇しくも同時に「こう思った。

(これは一体、どうなってる……!?)



この戦場において、ナトラ軍が組んだのは典型的な横陣おうじんだった。

上空から俯瞰ふかんすれば、長方形の陣形がマーデン軍に対して横向きに敷かれているのが解つただらう。

対するマーデン軍も横陣の構え。ただし厚みを均等にしたナトラと違い、陣形の中央に兵力を割いている。中央を突破した後、反転して背後から一気に崩してしまおうという魂胆だ。

言うまでもなく、人間というのは側面や背面からの攻撃に弱い。それは規模が軍隊になろうとも同じことだ。ゆえに、敵軍の背後を取れば、それは極きわめて有利な状況といえる。

当然ナトラとしてはマーデンに応じて中央を厚

くしたい。しかしここで純然とした兵力差が響いてくる。ナトラ六千対マーデン七千。数字的にどちらが有利かは明白だ。

そう、あくまでも数字的には。

兵の練度という、単純な数値では測れない要素が戦場にはあるのだ。

「ウルギオ將軍！ 左翼のロシナ隊から救援要請が！」

「伝令！ サンセ隊が壊滅！ トロジ―隊が援護に回っています！」

「將軍、右翼も苦戦してる模様です！」

矢継ぎ早に戦場の各所から届く情報は、その全

てがマーデン軍の劣勢を伝えていた。

「馬鹿な……」

ウルギオの口から零れたのは、状況へ対応するためのものではなかった。

しかしその言葉は、ここにいる全員が抱いていた困惑だった。

「なんだ、このナトラ兵の強さは……!?」

（マーデン弱っええええええええええええええええええええええ!?）

ウルギオとその幕僚が驚愕きょうがくに震えていた頃。軍を挟んだ対岸に座るウェインもまた、途方も

ない驚きを抱えていた。

（何これ!? え!? 何でこんなにボッコボコにしてんの!?)

ウェインの言葉通り、戦場は一方的な展開となっていた。

ぶつかり合ったナトラ軍とマーデン軍。しかし激突の衝撃が冷めやらぬうちに、両軍の格差は如実に表れていた。

目の前の敵を討つべく、ひたすらに武器を振り回すマーデン兵。そこには仲間との連携といったものはほとんどなく、半ば一人で戦っているようなものだ。

しかしナトラ兵は違った。たとえば敵が苛烈かれつな攻撃を仕掛けてくれば盾で防ぎ、代わりに傍そばの仲間が攻撃に転ずる。逆に敵が防御を固めれば、仲間と連携して防御を崩す。そうしながら陣形を維持し、孤立せず、徹底して互いをサポートし合える位置で戦っている。

そう、見比べてしまえば明白なのだ。たとえば数は劣っていても、軍隊として圧倒的にナトラ兵が格上なのである。

「如何いかされました、殿下」

ウェインの戸惑いに気づいたハガルが言葉を向けた。

「……いや、こちらの予想以上の奮戦ふんせんに驚いてな」  
ウェインとて勝てるとは思っていた。しかしこの展開は予想の上を行く。

「ハガルはこうなると解っていたのか？」

「はい。物事に対する創意工夫というのは、必要があればこそ洗練されるものです。その点において、長年戦い続ける帝国が積み上げた兵士の鍛え方は、大陸で最も優れた教練の一つに位置するでしょう。事実、拝見した私も感銘を受けました。この方法で鍛えられたのならば、小競り合こげりあいしか知らない小国の兵に後れを取ることはない、と」と  
とはいえ、と老人は苦笑した。

「ここまでマーデンが弱兵とは私も少々驚きです。あるいは計略の布石ふせきかとも考えましたが、この様子ではそれもないでしょう。ですが殿下」

「ああ、あの話については忘れてない。……今のうちに削れるだけ削らなくてはな」

その時、右翼の方で一際大きな歓声が上がった。突撃を跳ね返されて足が止まったマーデン兵に対して、右翼のナトラ兵が襲い掛かったのだ。

「どうやらラークルムが動いたようですね」

ナトラ兵とマーデン兵がぶつかり合う右翼の最先端。

怒号と悲鳴。血の匂においと死体で溢あふれかえるその  
只中ただなかに、騎馬に乗ったラークルムはいた。

「連携を崩すな！ 仲間と連動して動け！」

「防御を固めろ！ 補充部隊を送れ！」

「マーデンの奴ら、腰が引けてるぞ！ 押し返せ！」

指示を飛ばすのはラークルムの部下の指揮官たちであり、受け止めるのは兵士たちだ。

ウェインたちが感じていた圧倒の手ごたえは、前線にいる彼らもまた抱いていた。

戦える。通用する。むしろ押している。それは帝国式に鍛えられた辛つらい日々に対する肯定を意味

し、自然、士気はさらに上がっていく。

その士気の高さがさらなる指揮官の指示の鋭さと兵士の奮起を呼び、マーデン兵を一層押し返す。今、ナトラ軍はノっている。もはや疑いようもないことだ。ゆえに指揮官たちは、右翼の将であるラークルムに進言した。

「ラークルム隊長、好機です！ 打って出ましよう！」

「今なら敵の防御を崩して裏を取れます！」  
「ラークルム隊長！」

矢継ぎ早に繰り出される進言に、しかしラークルムは俯うつむいたまま反応しない。

指揮官たちが目を見合わせる。訓練において、好機だろうと劣勢だろうと淡々と的確な指示を出していくラークルムの姿を彼らは知っており、それは今の彼の姿と符合しない。何かあったのだらうかと、指揮官の一人がおずおずと手を伸ばした。

「隊長……？」

その手が彼の肩に触れると同時に、ラークルムは顔をあげた。

指揮官たちは思わずギョツとした。

ラークルムは、泣いていた。

大の大人が戦場で、部下の目があるのも構わず、<sup>そうぼう</sup>双眸から涙を流していた。

「ら、ラークルム隊長、一体」

なにが、と言いかけて。

瞬間、ラークルムの喉のどから凄まじい咆哮すさが飛び出した。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

人間のそれとは考えられないほどの大音声だいおんじょうが、右翼にいるナトラ兵とマーデン兵の心胆しんたんを震わせた。彼らは一様に戦いの手を止め、思わず声の方角——すなわちラークルムを見た。

「私は……私は悲しい」

全兵士が注目する中、ラークルムの馬が前に出た。「この戦は、栄えはあるウェイン・サレマ・アルバ

レスト摂政殿下の初陣……あの御方が歩む輝か  
しき道のりの第一歩……だというのに……だとい  
うのに」

朴訥な男の目に激情が宿る。溢れんばかりの怒り。見  
据えられるマーデン兵たちの体が震えた。

「なんだこの塵芥ちりあくたは……まるで雑草の駆除ではな  
いか。こんなはずでは無かった……強く、狡猾こうかつで、  
名のある獲物の血を捧げてこそ、殿下が纏まとう光輝  
の一片になりえるというのに……」

不意にラークルマが馬を下りた。

そのままつかつかと、無人むじんの野のを征くがごとく、  
立ち尽くすマーデン兵の前に立つ。

目の前に敵将が泣きながら一人で立つという異常事態に、マーデン兵は茫然ぼうぜんとしたままだ。

「ああ、殿下……臣の不徳をどうかお許しください  
い」

瞬間、ラークルムの長い両腕が鞭むちのようにしな  
った。

爆はぜるような音が鳴り、ラークルムの前に立っ  
ていたマーデン兵の顔面が弾はじけ飛び、その肉体が  
宙を舞った。

「――せめて、この塵芥なきどもで骸がらの山を作りま  
しよう」

そうしてようやくやく、その場にいた全員が我に返

った。

「そ、そいつを殺せえー！」

「ラークルム隊長に続けえー！」

自分に向かって殺到するマーデンの兵士に、ラークルムは籠こ手てに納められた拳こぶしを握り固めた。

「ラークルム隊、敵を押ししています！ 敵陣の崩壊も目前かと！」

伝令の報告に、ウェインは満足げに頷いた。

（あいつたまたまに暴走するんだけど、今回は大丈夫そうだな。よかったよかった）

自分が直接見出したからなのか、ラークルムは

妙な忠誠心の持ち方をしている。それが本番でこじれないかと若干不安だっただが、この様子なら大丈夫そうだ、とウェインは思った。

なお、後日詳細な報告を聞いて「馬下りて殴りかかるとか何やってんだあいつ……」とドン引きすることになるが、今のウェインには知る由よしもない。  
(しかし、まずいな)

各所から優位であるという報告が相次いでいる。だというのに、ウェインの内心には曇りが渦巻いていた。

(マーデンがさっさと見切りをつけて撤退してくれればいいんだけど、そつじゃないと……)

などと思いい悩んでいると、ハガルの眼光が鋭くなつた。

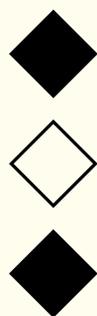
「殿下、兵の糸が切れ始めました」  
うげえ、と思わず漏れそうになつた声を飲み込んでウェインは言つた。

「間違いないか？」

「はい。……戦場が動きます。殿下も御心の備えを」

わかつた、と短く頷きながらウェインは対陣を見据える。

その脳裏には、出発前にハガルに言われたことが思い起こされていた。



「ナトラ兵が長くは持たない？」

「はい」

軍議の場にて、ハガルは淡々とウェインに告げた。

「帝国の教えにより、ナトラ王国軍は見違えるほど強くなりました。恐らく、開戦してしばらくはマーデン軍に対して優位を取れるでしょう。しかし三刻もすれば、その調子の糸が必ず切れます」「なぜだ？」

「戦場を知らぬ兵が大半だからです」

ハガルは断言した。

「空気の冷たさ、流れ出る血、ぶつけられる殺意……戦場において心は肉体以上にすり減ります。すると視野が狭くなり、周囲の音が耳に入らなくなります。仲間との連携や命令への反応も鈍にぶくなるでしょう。そうなれば我が軍の強さは半減すると言つてよいかと」

「あれだけ訓練してもか？」

「どれだけ訓練しようとも、です」

ハガルは小さく頭を振った。

「身を以もつて体験しなくては解らないことが、戦場には多すぎるのです」

「……となると粘りはマーデンのの方が上か。小競り合い程度とはいえ、戦争は体験している」

「はい。そしてよほどの愚将でない限り、こちらの糸が切れた隙すきを見逃すことはないでしょう。今回の戦争は、そうなるまでにどれだけマーデン軍の兵を削れるかが分岐点になります」

「できればよほどの愚将であることを期待したいところだな」

ウェインは嘆息しながらそう言った。



もちろん、そんな一方的なウェインの願いが届くはずもなく、  
(――圧力が落ちた！)  
ナトラ軍の変調を、ウルギオはすぐさま感じ取った。

「將軍！」

「解っている！ 十秒待て！」

ナトラ六千対マーデン七千が始まったこの戦い。緒戦の劣勢によって今の戦力はおよそ五千対五千。ほぼ同等にまで落ち込んでいる。  
ナトラ軍の圧力が落ちた今ならば、こちらの方が強く出られるだろう。

だがダメだ。それでは足りない。恐らく削り切れずに日の入りを迎え、仕切り直しになる。そうしなければ気力体力を回復させたナトラ兵とまた戦わなくてはならない。

（好機は今ここだ。ここしかない。ならば――）

（これはヤバい）

一方でウェインのしょうそう焦燥は最高潮に達していた。理由はナトラ王国軍の勢いが衰えたことだけではない。

それによって、マーデン軍に逆転の一手が生じてしまったためだ。

修正しようにも時間がかかる。もしもその間に相手に動かされてしまったら――

（頼むから気づいてくれるなよ……！）

ウェインは心の中で天に祈った。

だがウェインの祈りもむなしく、素早く戦場を見渡したウルギオの目はそれを捉え<sup>とら</sup>えた。

（正面が、薄い……？）

陣形を保とうと踏ん張っているナトラ軍。その中心部の兵力が減っている。

なぜ。理由を求めた脳裏はすぐさま回答を導き出す。こちらの左翼を崩すため、ナトラ軍は右翼

側に中央の兵力を回したのだ。しかし攻め切る前に軍の勢いが落ち、結果として中央を薄くしたまま膠着状態（じょうちやく）に入ってしまったのだらう。

ウルギオの脳裏に勝利までの絵図（えず）が浮かぶ。いける。確信を抱いた瞬間、彼は叫んだ。

「両翼の将に、そのまま乱戦に持ち込み相対して敵部隊を足止めしろと伝えろ！ 中央は陣形の再構築だ！ 完了次第突撃する！」

「はっ！ 狙う場所は!？」

「決まっている」

ウルギオはぎらつく目を彼方（かなた）に向けた。

「総大将の首だ！」

（ああくそっ！ 来るんじやねーよー！）

放たれたマーデン中央軍の突撃。

騎馬を主軸にしたその一撃が、兵が減ったナトラ中央軍の陣形に深々と食い込んでいた。

マーデンは止まらない。陣形の傷口から押し込んでくる。防ごうにも兵がなく、乱戦状態となった両翼から兵を呼び戻すこともできない。

中央が突破される。その数は千人ほどだろう。対して丘の上にはウェインとハガル、そして百人程度の近衛このえしかいない。

「殿下、後退いたします。お早く」

「解ってる」

もはやこれしか道は無い。

ハガルの指揮の下、ウェインたちは後退を開始した。

「將軍！ 奴ら本陣から逃げて行きますー！」

「無様な、潔く散ればいいものを。敵は少数だ、追うのは騎馬だけでいい！ 歩兵は中央の足止めをさせておけ！」

「ははっ！」

ここでウルギオは歩兵を分断。およそ四百騎の騎馬隊だけでウェインたちの背を追いかける。

瞬く間に丘を駆け上がり、本陣があつた場所に到達。捉えたのは、丘の背後にあるいくつもの岩山と、その一つの陰に潜り込もうとする近衛部隊の姿だつた。

「さらに逃げ隠れするつもりか……だが大半が重装歩兵なのが裏目に出たな！」

ナトラの本陣にいた近衛の大半が盾と槍を備えた歩兵だ。それでは馬の脚から逃げきることはできない。

「奴らが岩に隠れる前に背を討つ！ 行くぞ！」  
ウルギオは再び檄げきを飛ばし、騎兵を引き連れて丘を駆け降りる。

近衛部隊との距離は瞬く間に縮まり、観念したのか、近衛たちは足を止めて反転。ウルギオたちに向かつて防陣を構築する。

だがその防御はあまりにも薄い。衝突すれば一撃で突破できるだろう。

ウルギオは勝利の確信と共に雄叫おたけびを上げ――

「だから来るなっつたのに」

ウェインは、誰にも聞かれぬよう悪態あくたいを吐ついた。

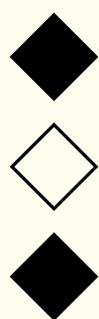
「これじゃ、完勝しちまうだろうが……！」

そしてニニム・ラーレイは、兵たちに指示を出

した。

「――弓隊、放て」

岩山の上から、マーデン兵目がけて矢の雨が降<sub>ふ</sub>り注<sub>そそ</sub>いだ。



「――大使、大変です！」

フィシユの自宅に補佐官が飛び込んできたのは、ナトラとマーデンが開戦したという情報に目を通していた最中のことだった。

「どうしたのそんなに慌てて」

「例の王太子について、とんでもない資料を入手したんです！ これを見てくださーい！」

補佐官が突きつけられた資料を受け取り、フィシユは視線を落とす。

「以前閲覧した王太子の資料に、妙な欠落がある」と大使は言っていたじゃありませんか。その答えがこれだったんです！」

補佐官の言葉を耳で受けながら資料を読み進めていたフィシユは、目を見開いた。

「士官学校に在学……!?」

「ええ、あの王太子は二年間、我が帝国の士官学校に通っていたんですよ！」

まさかという気持ちがフィッシュの中で強く渦巻く。しかし資料は間違いなくそれを事実だと告げていた。

「軍機ぐんきの塊かたまりともいえる士官学校に、どうしてもない国の王族が……」

「詳細はまだ解りませんが、周圀には王太子としての身分は隠して、市井しせいの人間として通っていたようです。教師などは彼の身分を知っていた節がありますか」

「彼はどうやって入学を？」

「帝国にいるフラム人の高官が便宜べんぎを図ったようです。フラム人にとって、ナトラ王国は迫害され

ていた自分たちを早くから受け入れてくれた国ですからね。帝国で立場を得たとはいえ、同族を多く庇護ひごしている国の王族には思うところがあつたのかと」

ありそうな話だ。フラム人の同族意識は特に強い。しかし腑ふに落ちない点がある。

「けれど、そうだとしても資料から情報を削除するほどかしら？ 確かに問題ではあるけれど」

「ところがそれだけじゃ無いんです。続きを見てください」

補佐官に促され、フィッシュは資料のページをめくる。そこにあつたのは、学校で行われた過去二

年間の試験の結果だ。

「これは……」

フィッシュは我が目を疑った。文学、歴史、数学、剣術、戦史——学校で課されるあらゆる試験で優秀な結果を出し、主席の位置に立つ一人の生徒の名前が塗り潰されていったのだ。

「入手した時点でそうなっていました。その主席の存在は、意図的に消されたんです」

なぜそのようなことをしたのか。

抱いた疑問に向かって、雷鳴のごとき閃きひらめが落ちた。

「消したのは、これが理由なのね。外国人、まし

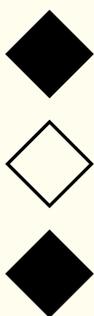
て他国の王族が、他の帝国人を差し置いて頂点に君臨していたという不名誉を、無かつたことにするために……！」

なんとということだろうか。こんな馬鹿げたことがあるだろうか。

帝国は自らが育てあげていたので。己おのれの喉元のどもとに届きうる牙を。

そしてその牙の名前こそが。

「ウェイン・サレマ・アルバレスト……！」



眼下のマーデン兵たちは総崩れの状況だった。

どれほど精強を誇る軍であろうとも、奇襲を受ければ浮足立うきあしつ。まして頭上から間断なく矢が降ってくる中で、冷静でいられる人間などどれほどいようか。

いるとすればそれは相応の訓練と実戦を経た指揮官や兵士くらいであり、この状況で彼らが真っ先にすることといえれば、将の周りを固めることだろう。

それゆえに、岩山の上から見つめるニニムの目には、敵将の居場所が手に取るように分かった。

「弓隊はそのまま敵兵を追い散らしなさい。騎馬隊、

行くわよ」

「はっ！」

二二ムの号令の下、隠れ潜んでいた騎馬隊が一斉に岩山を駆け降りた。

動揺し統率が取れず、足も止まっているマーデ  
ン兵に成す術すべはない。突撃してきた騎馬隊に次々と討ち取とられていく。

「順調ですね、隊長！」

「当然よ。そうなるよう崩したのだから」

淡々と答えながら、二二ムは自分がここにいることになった発端について思いを巡らせた。

「――兵を伏せておく？」

「そ」

マーデンが侵攻を始める半月ほど前。

会議室にて、ウェインはニームにそう告げた。

「もうじきマーデン軍が攻めてくる。互いの進軍速度の予測からしてぶつかり合う場所はここ、ポルタ荒原だ」

机の上に地図を広げ、ウェインはその内の一点を示す。

「ポルタ荒原は岩山や丘が点在してて、兵を隠すには

うってつけだ。ここにあらかじめ予め兵を伏せて、奇襲に使う。で、

その指揮をニームにやってもらいたい。軍部の方にはも

う話を通してある」

「……疑問がいくつもあるわ」

ニニムが手を上げて言った。

「まず、マーデンが攻めてくるのは間違いないの？」

かんちよう

まと

「間諜からの報告を纏めるとそこに収束する。間違はなく一カ月以内にマーデンは攻めてくる」

「隠す兵の数は？」

「信頼でききる奴を選抜して、だいたい七百から千程度。これ以上の大兵力は隠しておけないし、こちらの兵力が用意でききるはずの数よりだいたいぶ少なければ、相手も警戒をするからな」

「その数だと本当に奇襲用ね」

「ああ。相手の主力を釣りだしたところで側面を突く……って使い方が理想だな。実際どうなるかは戦況次第だけど」

「実際に出陣してから先行して隠すのじゃダメなの？」

「本隊には向こうの間諜も入ってるだろうから、出陣してから分離させるとどこかに伏せていることがバレる。それじゃ奇襲の効果は薄い」

ウェインの滞りのない返答にニニムは頷いた。ここまでは問題ない。が、一番気になるのは次だ。

「最後に、私がやる理由は？」

「あっねー!? ニニムさんできないのー!? い  
つもエリート風吹かして何でもできますよみたい  
な顔してるのにそっかー! できないんだー!  
……あ、やめ、痛っ、痛い!」

「真面目に」

「解った、解ったから俺の指をあらぬ方向に曲げ  
るのはやめろって!」

ニニムから解放された手を振りながらウェイ  
ン  
は言った。

「そんな複雑な理由じゃない。これをこなすに  
は、一カ月間、千人弱の兵士の息を潜めさせる統  
率力が必要だ。だが、有力な将をここで使うと本

隊の運営に差し支えるし、この大一番に姿が見えないことで相手に警戒される可能性もある。その点、二二ムなら統率できるとし、姿が見えなくても軍事的脅威には思われないだろ？」

「確かにそうね」

二二ムは対外的にはウェインの補佐官であり、文官だ。しかし軍を率いる将としての教育も受けている。兵士たちの方も、代々王家を支える一族の二二ムを軽んじることはそうそうしない。

「というかもっとハッキリ言おうと、二二ムとラークルマ以外の将はいまいち信用がな。あいつらが忠誠を誓ったのは親父と親父が運営していた王国

であって俺のじゃない。こういう気配りが必要な役割を振るのはまだ微妙だ」

「そんなことはないと思うわよ。彼らはちゃんとウェインに忠誠心を持ってるわ」

「いや！ そうやって油断してるとすぐクーデターされる！ 歴史が証明してることだー！」

警戒心を剥き出しにし、いもしない敵に向かつて威嚇するウェインに、ニムはやれやれと内心で頭を振った。この様子では、ウェインと武官との間に信用という名の架け橋が繋がるとの間、遠そうだ。

「まあ、どうしても無理そうなら俺がやるって手

もあるけどな。二二ムなら俺がいない間の政務の采配もできるし」

「それは……さすがに有り得ないわ。ウェインがいなくなつたら誰が本隊の指揮を執るのよ」

「いや、そもそも今回の戦じゃ指揮の方はハガルに預けるつもりだ。軍人が功績を上げるせつかくの機会に水を差したくないしな」

「……大丈夫なの？」

「ハガルの爺さん滅茶苦茶強いから安心しとけて。特にあの人の野戦はヤベーぞ。もしぶつかり合うことになつたら俺は即行逃げる。——と、話が逸れたな」

二二ムは頷き、本題の結論を言った。

「やっぱりウェインにそんなことをさせるぐらいなら、私がやるべきね。いいわよ、兵を引き連れて潜伏しとく」

「任せた。活躍する機会があるかどうかは半々ぐらいだけだな。俺としては、ほどほどに勝てればいいし」

「そこは圧勝を望むところじゃないの？」

「勝ちすぎるとそれはそれで問題なんだよ。……」

まあ、そんなことは起きないだろうから別にいいや。早速準備を始めようぜ」

二二ムは頷いた。潜伏場所の選定。兵の選抜。

潜伏最中の食料の手配等、やることは多く、全て秘密裏にこなさなくてはならない。

ただ最後に一つ、ニニムは懸念けねんを口にした。

「ちなみに……私がいなくてちゃんと仕事回る？」  
ウェインはにっと笑った。

「帰ったら修羅場しゆらばだ」

(……どれだけ仕事たが溜まっているのやら)

苦笑を浮かべながらニニムは部下と共に馬を走らせる。

ニニムたちが目指すのは、一塊になつて離脱しようとする数十人のマーデン兵たちだ。その中心

に敵将——ウルギオの姿はあつた。

「て、敵が来るぞ！」

「將軍をお守りせよ！ 前を固めるんだ！」

マーデン兵たちは急いで防御を固める。しかし、

「——薄い」

二二ム率いる騎馬隊は、呆気あっけなくその防御を吹

き飛ばして突入した。

抵抗するマーデン兵を蹴散けちらし、勢いを殺すことなく

二二ムたちは中心へ。そこにいたウルギオは迫る敵兵に向

かって剣を振るうが、馳はせ違いざま、逆に腕を切り落とさ

れて落馬した。

「ぐっ、がああああ……！」

痛みにもウルギオが絶叫する中、二二ムは馬を止め反転。周囲をナトラ兵に守らせながらウルギオを見下ろした。

「貴方あなたが将ね？」

汗と泥、そして苦悶くもんに汚れながらウルギオは二二ムを見上げる。

「そ、その声……それに白い髪……」

「降伏しなさい。すぐに治療すれば、助かる見込みはあるわよ」

二二ムの淡々とした勧告に、しかしウルギオは激高げっこうした。

「降伏……降伏だと……!? ふざけるな！」

腕の傷口から血が溢れ、今にも絶えそうなほど呼吸が荒れてなお、ウルギオは吼ほえた。

「俺はマーデンの將軍だ！ 女、それとも灰被はいかぶりごときに降伏などできるか！」

「そう」

二二ムの剣が振り抜かれた。

剣の軌跡はウルギオの首を通過し、一拍遅れて、その首が滑るようにして地面に落ちた。

「首を掲げて討ち取ったことを触れ回まわつて。……それと、そいつの末期まっごの言葉は決して□外はずしないように」

「了解しました。敵将は死の間際まぎわまで無□な男で

あつたと記憶します」

「それでいいわ」

副官が首を掲げて勝鬨かちどぎを上げた。

ナトラ兵が雄叫びで応え、残るマーデン兵から戦意が失われていく。

それを見届けながら、ニニムは岩山の陰に目を向けた。そこにいたのはウルギオたちを見事に釣りだした本営の兵士たちであり――その中心に立つ少年に向かって、ニニムは大きく手を振った。

「殿下、上手く行ったようです」

「みただな」

蜘蛛くもの子のように離散するマーデン兵。指揮官を失った彼らにもう抗あらがう力はないだろう。

奇襲用に準備していた伏兵とはいえ、まさか見事に敵の大將を釣りだして討ち取れるとは、ウエインも予想外だった。

「この戦、ほぼ決したか？」

問いにハガルは頷うなずいた。

「敵將を討ち取ったのは丘の裏ですから、丘の向こうで戦っている本隊にはまだ届いていません。なので素早く我らの無事と將の戦死を触れ回る必要があります。それさえこなせばマーデン軍は撤退するでしょう」

「解った。ではそうするとしよひ」  
「はっ」

ハガルの指示で部隊は動きだす。

この後、ウェイんたちはニーム率いる部隊と合流して丘の上に戻った。

丘の裏に消えた総大将の帰還と敵将討伐とうばつの報せしらにナトラ兵は大きく勢いづき、逆にマーデン兵の士気は底へと転じた。

加えてウルギオと共に指揮官も多く討ち取られていたため、彼らを纏まとめる力を持つ者はおらず、マーデン軍はそのまま潰走かいそうすることとなる。

かくしてポルタ荒原で始まった両軍の戦いは、

僅か一日でナトラ側が圧勝するという形で決着を得る。参戦したナトラの兵は誰もが勝利に沸き、栄光という名の美酒に酔った。

だが、ただ一人。

(どーしたもんかなああああ……)

ウエインだけは、これから先起こる展開を思い、一人暗澹たる気持ちを抱えていた。

### ◆第三章◆過ぎたるはなお

「はああああああああああ………」

机に突っ伏しながら、ウェインは亡者の吐息のごとく陰鬱な気を吐いていた。

傍らに立つのはニームだ。戦場と違い、その身に具足は纏っていない。

普段ならばウェインの気力が足りていない時は、ニームがあの手この手で奮起させようとするのだが、今日は事情が違った。

「……困ったことになったわね」



大半の人間が思い描いたものだった。

「侵攻してきたマーデン軍を打ち破った今、マーデン東部は完全な無防備！ 今ならばマーデンの領土を大いに切り取れます！」

ポルタ荒原こうげんの戦いが決着したその夜。

今後の方針を決める軍議において、各指揮官たちは大いに気を吐いていた。

「同感だ。兵たちの被害は少なく、短期で決着したゆえに物資の消費も少ない」

「マーデンの連中が置いて行った糧食も回収したからな。喰くいすぎて兵たちの腹が破裂してしまうかもしれない」

軍議の場に笑い声が満ちる。

彼らの間にあるのが先の快勝からくる余裕なのは間違いはない。

浮かれている、と断じるのは容易たやすいが、致し方ない側面もある。国内の日陰者ひかげものだった十数年。ようやく勝利と栄光という名の光を浴びることが叶かなったのだ。彼らも人の子である以上、喜びに打ち震えるのは当然だろう。

さらにいえば今回の戦いくさが防衛戦ということもある。戦とは領土を取ってこそ利益りえきを得られ、防衛においてあまり旨味うまみがない。実利の面でも踏み込みたいという思いはあるのだろう。

が、

（冗————談じゃねえー！）

上座かみざに座るウェインは、場の空気と正反対の心境にあつた。

（予定のない行軍計画こうぐんを立てるのがどんだけリスク高いと思つてんだー！）

ポルタ荒原はナトラ王国の領内であり、地形の詳細な地図もある。どの道がどこつなに繋がっているか、川や山の配置、地面の傾斜、村や町がどこにあるかなど、事前に知ることができる。それによつてスムーズな進軍や補給が可能になるのだ。

しかしマーデン国内になれば話は変わる。簡易

な地図こそあるものの、精度は自国のものと雲泥の差だ。あるはずの村がない、調べた時より川のカサが増えて渡れない、記されていた道が潰つぶれている――そんなことがザラであり、また身軽な一人旅ならばどうとでもできることでも、数千人の集まりとなれば、方向転換の一つだけでも時間と労力がかかる。

そうしてモタついていけば、いつの間にか兵の士気も下がりに、補給も滞って物資も減り、マーデイン側も兵を改めて用意してくるだろう。それぐらい危険なことだ。

（でも、そう言えないんだよなああああー！）

これが痛み分けの勝利だったのならば、ウェインの指摘に多くの将が頷いたはずだ。

だが今の空気で口にすれば、将たちの目にはいかにもウェインが弱腰で、戦を知らない凡百であるように映る。彼らの忠誠心が雪崩のように落ちていくのは間違いなく、行き着く先はクーデターだ。

（どうにか俺以外に誰かに止めてもらおうしかない……！）

苦し紛れの作戦だが、二二ムは使えない。今もウェインの一歩後ろで控えているものの、その立場はウェインの補佐官だ。部隊を指揮していたのはあくまで一時的なものであり、既に指揮権を返

上している。この場において発言権はない。となると候補は一つしかない。ウェインは少し離れた席に座るラークルムに視線を向けた。

（ラークルム！ おい、ラークルム！）

視線に気づいたラークルムが何事かとウェインを見る。

（今の軍議の流れはまずい。お前が横やり入れてどうにか冷静にさせる！）

（……なるほど。殿下でんかの意図、しかと伝わりました）

視線だけでやり取りしていたところに、折よくラークルムに水が向けられた。

「ラークルム殿、貴殿きでんはどう思われる？」

（頼むぞラークルム！）

（お任せください）

ラークルムは小さく頷き、言った。

「無論、一気呵成いっきかせいに攻め込む他ほかにあるまい！」

（違ちつげーーよバカ！）

ウェインは内心でラークルムを張り倒した。

（なんで後押ししてるんだよ！ やりましたぞ殿でん

下かみみたいな笑顔向けてくるんじゃないやねえ給料減らす

ぞこの草食獣野郎！）

もはや議場は侵攻一色だ。ここから自分が異を

唱えたところで覆すことはできないだろう。

そう、異を唱えるのではダメだ。しかし違う方向からアプローチはできる。

（できれば使いたくなかったが、もう四の五の言  
つてられん！）

ウェインは決意と共に口を開いた。

「――諸君の意見は解った」

その場にいる全員の動きが止まった。

高揚していた室内の空気が一転して静まり返り、あらゆる視線がウェインに向かう。

「ハガル」

ウェインは隣の席で黙然としているハガルの名を呼んだ。

「大勝した今、我らに大きな流れがあるという皆の主張は理解できる。しかし、予定のない行軍でどれほどの負荷が軍にかかるのか、経験がない俺には正しく計はかれん。意見を聞きたい」

「はっ……」

老人は恭うやうやしく頷うなずいた。

「我が軍の勢いは長くは続きませぬ。勝利の余韻よが晴れた後、兵士には強い疲労が圧おし掛かるでしょう。その時、帰路についていれば気力で移動することはできましようが、終わりの見えなただなかい侵攻の只中では、必ずや彼らは膝ひざを突きます」

「むっ……」

「ぬう……」

指揮官たちが一様に渋い顔をする。水を差されたのだから当然だ。しかしこの場で最も戦場の経験を積んできたハガルの言葉は、そう軽々と否定することはできない。

（ここまでは予想通り——！）  
手ごたえを感じつつも問いを重ねる。

「では、撤退すべきだと思うのか？」  
そうだと言ってくれれば楽になるが、恐らくはそうはならない。

ウェインの予想通り、老人は頭を振った。

「今が好機であることは間違いなく、みすみす逃

すのも愚かかと。……必要なのは、漫然と侵攻することではなく、兵士の気力と体力を見切り、明確に狙いを絞ることで「

「……皆に異論はあるか？」

ウェインの呼びかけに居合わせた指揮官たちは沈黙で応えた。

「結構。それならばハガルの意見を踏まえた上で、一つ俺から提案がある」

皆の前に置かれた近隣の地図をウェインは睨む。「知つての通り、この地域は恵まれた土地ではない。それはナトラ領だけではなく、マーデン領も同じだ。マーデン東部で戦略的な要所は多くない。そ

して我が軍の体力を踏まえ、到達可能な地点にあり、かつ攻め落とす意味がある場所となると――」  
ウェインは地図の―か所を指示した。

そこはマーデン東部の山岳地帯。少し前までは何の価値もなく、しかし今は最重要拠点の一つ。

「――ジラート金鉱山。狙うのだとしたら、ここしかないだろう」

ざわめきが指揮官たちの間に広がった。ウェインを前にして隠しきれない困惑がそこにはある。

―変した空気に、ウェインは内心で会心かいしんの笑みを浮かべる。

（そうだろう、そういう反応だよな。――どう考

えても金鉱山は無理筋！)

ジラート金鉱山は現在のマーデンの要所も要所。下手すれば王都よりも重要だ。詳しくは調べていないが、防備が堅牢けんろうであることに疑いの余地はない。そんなろくな調査も行われていない場所に、戦の疲労を残したまま攻め入る。いくら戦略的価値があるとはいえ、無理無駄無謀ここに極きわまるというものだ。もちろんウエインはそのことを解っている。

ではなぜ提案したのかといえれば、指揮官たちはこの進軍の意味が薄いと思わせるためだ。

指揮官たちはこう考えるだろう。金鉱山は無理だ。

攻めるなら別のところしかない。だがどこを攻める？ 金鉱山と同じぐらい価値のある場所が東部にあるか？

無い。無いのだ。東部に金鉱山以上に重要な拠点は無い。そうなると途端、他の候補が見劣りするように感じる。小さな砦とりでや村など占拠したところで、金鉱山に比べればどれほど無価値か。それを意識した時、指揮官たちのテンションが下がるのは自明じめいの理りだ。

（無理筋を提案した俺の評価が多少下がるだろうけど許容範囲！これで撤収に持ち込めると思えば安上がりつてもんだ）

我が策成れり。ウェインは内心でガッツポーズを取った。

「……殿下」

指揮官の一人が固い面持ちで口を開いた。恐らくどうやってウェインの提案が無茶であると納得させるか頭をフル回転させていることだろう。指揮官のメンツを潰さないよう、いかにも忠臣の諫言に心を打たれたかのような態度を取るべく、ウェインは気持ちを整えて――

「御慧眼、誠に感服いたしました」

「え？」

全く想像の範囲外の言葉に、目を瞬かせた。

「ジラート金鉱山……まさしく殿下の仰る通り、  
狙うのならばこじかありませんな」

「いやあ驚き申した。——まさか、我らが以前より密かにジラート金鉱山奪取計画を練っていたことを殿下がご存知だったとは！」

「え？」

「最新の調査では鉱山の陣地は脆弱で、詰めている兵士は干に満ためとのこと。進軍経路も十分に検証してあります」

「戦に絶対はありませぬが、挑むに値しますな」  
「我らが勝利で浮かれている間に、殿下は奪取計画の実施の可能性に思慮を巡らせていたとは。臣

として恥じ入るばかりです」

「それでは殿下、早速進軍の下知を！」

「このままジラート金鉱山に攻め入りましょう！」

「殿下！」「殿下！」「殿下！」

「……………」

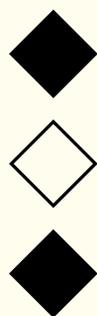
ウェインはひきつった笑みを浮かべながら、傍らに立つニニムをそっと見た。

（……………ニニム、ヘルプ）

ニニムはしつとりと微笑ほほえんだ。

（ごめん無理）

かくして、ナトラ王国軍によるマーデン侵攻が決定した。



「ほどほどの勝利だったなら、ストップかけられただけだなあ……」

ぐんによりと呻うめくウェインにニニムは申し訳なさそうに言う。

「あるいは、敵将を捕縛ほくばくできているれば速すみやかに戦後交渉を始めて、和睦わぼくに持ち込めたかもしれないわね。……ごめんなさい、ウェイン」

「降伏勧告をして無視されたんだろ？ そりや仕方ないさ、気にすることじゃない」

「……そうね」

「問題はこの後だ。まずは金鉾山の守備状況が欺ぎ瞞まんじやないか再確認して」

「補給線を見直して、兵の士気を可能なだけ高めに維持し続けて」

「マーデン側が対処する前に、金鉾山を奪い取る」  
□にするのは容易たやすいが、どれほど難しいことか。

たとえ事前に計画を練っているとはいえ、連戦だ。必ずどこかで躓つまずく。だが躓けば、それを理由に撤退に現実味を与えられる。

そうウエインは考えていたし、二二ムもそうなるだろうと思っていた。

——だが。

「取っちやっただんだよなあ」

「取っちやっただのよねえ」

二人は揃そろって、部屋の窓枠から外を見る。

見えるのは、星の浮かぶ夜空の中で、天を貫くようにそびえる巨影。

影の名はジラート金鉱山。マーデン国の金脈であり、今日、ナトラ王国軍によつて占拠された鉱山だった。

二人がいる場所は、鉱山の麓ふもとにある屋敷の一室なのである。

「……まさかここの守備兵があんなに弱いとは」

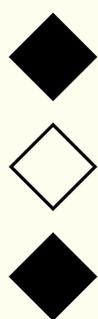
「びっくりするぐらい弱兵だったわよね……軽く  
一当てしたただけで逃げちゃったし」

「大方、ここを管理してた人間が予算を中抜きし  
てたんだろ。マーデン王もきちんと監視しと  
けよ……」

「言っても仕方ないわよ。それより、どうするか  
を考えないと」

「そうなんだよなあ……」

予想外で、かつ特大の問題に、ウェインとニニ  
ムは揃って唸<sup>うな</sup>り声をあげた。



マーデン国のエリスロー宮殿といえは、マーデンの成金なりきんぶりを象徴する建築物である。

金鉱山の収入に気をよくした今代のマーデン国王、フシユターレ王の指揮によって着工され、高名な技師、高価な資材、潤沢な資金が惜しげもなく用いられた。出来上がるのは歴史に残る素晴らしい宮殿になると、関係者の誰もが思っていただろう。

しかし残念ながら、一流の人間と資材と資金が集められたこの場所には、三流の国王というどうしようもない異物が混ぜられていたのである。

人間誰しも取り柄があるという。フシユターレ国王の取り柄が何なのかは不明だが、少なくとも芸術方面でないことはこの件で証明された。王という絶対的な権力を持つ彼は、使い古された硬貨よりも薄い知識と偏狭な美意識をこれでもかと思計図に盛り込み、鼻を高くしながら職人たちに突きつけたという。

およそ兎戯じぎに等しい設計図を、王の機嫌を損ねないようあらゆる技巧と言いつい訳を駆使して見れる形に直した職人はさすがの一言だ。彼らにとつて全く名誉ではない形ではあるものの、その腕前が本物であることは内外に示された。

しかしいかにかに名工であつても限界はある。人が行き来しにくい途切れ途切れの導線、内装デザインの不一致、飾られる調度品の統一性のなさ――芸術美としても機能美としても三流の建物であることは、少し目端めはしの利きく者ならば明らかだつた。

唯一の救いといえは、フシユターレ王が少しの目端すら持たない人物であることと、宮殿に仕える人々がそれを指摘しないだけの分別ぶんべつを持つていたことだろ。かくして裸の王様は、自らが造つた完璧かんぺきな宮殿の玉座にふんぞり返つてご機嫌でいられるわけである。

しかしそんなある意味平和な光景は、ここ数日

の宮殿からは消え去っていた。

「なんたることだ、なんたる……」

無意味に長いことで知られるエリスロー宮殿の西回廊を、壮年の男性が速足で進んでいた。

丸い。とにかく丸い。足が短ければ腕も短く、その上で胴体と顔立ちが丸みを帯びていて、蹴り飛ばせばさぞ綺麗きれに転がることだろうと思わせる体型だ。

彼の名はジーヴァ。マーデン国の外交官の一人だ、今や王宮でも少数派となった、生え抜きぬの臣下でもある。

「早く、一刻も早く……！」

青ざめた表情で何度も呟くしづさジーヴァは、やがて  
 広間に到着する。そこは壁の隅から柱の陰まで意  
 匠を凝らした、エリスロー宮殿においても一際ひときわ  
 贅沢ぜいたくに造られた場所であり、フシユターレ国王の  
 お気に入りの場所だ。

ゆえに最近の御前ごぜん会議かいぎは専らもっぱここで行われてお  
 り、今日の臨時会議も同様だった。

「これは一体どうということだー！」

怒声どせいだった。広間についた途端響いたのは、身が竦すくむような

「ジラート金鉾山が、よりにもよってナトラの羽  
 虫共に奪われただど!?」

広間の中心に据えられた長卓<sup>ちようたく</sup>。マーデンの重臣たちが居並ぶ中で、顔を赤黒く染め<sup>そ</sup>ながらあらゆる限りの罵声<sup>ばせい</sup>を口にするその人物こそ、国王フシユターレだ、

フシユターレは見事なまでの肥満体だ。ジーヴアの体型は家系からくる生来のものだが、彼のは節制という言葉<sup>おのれ</sup>を己の辞書から消した結果である。今の彼にとってみれば、目に映る<sup>すべ</sup>全てが怒りの対象だろう。ジーヴアはその身に似合わぬ機敏さで柱の影を進み、長卓の席についている一人の背後で<sup>ひきまも</sup>跪いた。

(ミダン様、遅れました……！)

ミダンと呼ばれたその老人は、マーデン王国の外務大臣。すなわちジーヴァの上司だ。

（この状況で遅参ちさんとは、どこで道草を食っていたジーヴァ）

（申し訳ございません。大使との会談が長引いてしまい）

（ふん、話は聞いているな？）

（はっ……）

（ならばよい。今は下がっている）

ミダンに命じられ、ジーヴァは一礼して広間の隅ぐもに寄った。

奇くしくもその時、広間にフシユターレのそれと

は違う声が響いた。

「王よ、お怒りはごもつともでござります」  
フシユターレ王に近い席に座る男の名はホロ又  
イエ。

猫背でやせ細り、歪ゆがんだ笑みを湛たえる不気味な  
姿からは想像もつかないが、マーデン国の財務大  
臣である。

（チツ、佞臣ねいしんめ……）

ジーヴァは内心で舌打ちをする。不愉快な思い  
をしているのは何もジーヴァに限った話ではなく、  
あの男が喋しゃべり始めると同時に、居合わせる人間の  
大半が顔を歪めている。

「しかしこのままでは事態は悪化するばかり……  
速やかに対策を講じなくてはなりませんせぬ」

「随分と身勝手ですな」

□を開いたのはミダンだった。

「ホロヌイ工殿、金鉱山については守備兵の差配さはい  
も含めて貴殿に一任していたはず。我が国の最重  
要拠点ともいえるあの場所を易々やすやすと奪われておい  
てその言い草……自らの責任を有耶無耶うやむやにするつ  
もりか？」

ミダンの眼光は若輩ならば竦すくみ上がるほどの威  
圧を持つ。安易な言い逃れは決して許さないと  
いう意思が感じられる。

だが、受けるホロヌイエもさるもの、一切動じいっさいることなく答えた。

「易々というのは間違いですなあ、ミダン殿。報告では守備兵の誰もがナトラ兵に果敢に応戦し、その職務を全うしたとあります」

「ならばなぜ奪われた」

「それはもちろん、ポルタ荒原での敗戦が原因でしょう」

にい、と不気味な笑みをホロヌイエは浮かべた。「ええ、ええ、あの戦いでウルギオ将軍がああも簡単に討ち取られていなければ、結果は違っていたかもしれません」

ホロヌイ工は一転してとぼけた表情になる。

「そういえば、軍の指揮を誰に任せるとかの選定でウルギオ將軍を推したのは、マーディア生粋の方々でしたなあ。まったく、実のない人間ほど他人の足を引っ張りたがる。ミダン殿もそう思いませんか？」

「貴様……」

現在マーデンに仕える臣下たちは、大別して二つの派閥に分かれている。

その一つはジーヴァも属するマーディア生粋派だ。マーデンに生まれ、マーデンで育ち、そしてマーデンに仕えることを選んだ生粋のマーデン人による派閥である。派閥内にあつれき軋轢もあるにはあるが、全体と

してマーデンへの忠誠心は高い。

対してもう一つが外来派ステラである。外国出身でありながら、その高い能力を見込まれて要職に就くことを許された者たちの派閥だ。全体として国家への忠誠心は薄く、彼らを国に繋ぎとめているのは高い俸禄ほうろくである。

この両派閥の対立が激しくなったのは、ここ数年のことである、というのも、それ以上前になると外来派ステラの数が少なすぎて、派閥として成立して  
いなかっただからだ。

ではなぜ外来派ステラが急進したのかといえは——そう、金鉱山の発見によるものだ。

鉦山が発見された当初、王宮は上を下への大騒ぎだった。なにせマーデンはしがない貧国だ。少ない資金をやりくりすることには慣れていても、降って湧わいた幸運の女神の扱いなど、誰一人として心得ていない。

そんな時に目ざとく現れたのが、ホロヌイ工を筆頭とした外国人の官僚である。彼らは他国で多くの政務を取り仕切った実績を手て土産みやげに、我らならばこの幸運を正しく扱うえる、とフシユターレ王に取り入った。海千山千うみせんやませんの政治闘争に明け暮れた経験を持つ彼らにとって、浮足立った田舎いなかの王を丸め込むことなど容易いことだった。

彼らは次々と王に登用され、その能力をいかんなく発揮した。彼らの的確な差配によつて生まれきた金鉱山の利益は莫大なもので、フシユターレは大いに気をよくし、さらに外国人を重用するようになった。

もちろん生粋派マーディアにとっては面白くないおもしろ。日々権威を増していく外来派ステラへの憎しみは高まるばかりだ。外来派ステラにとつても、地元出身というだけで大きな顔をマーディアする生粋派は目障りめざわで仕方ない。かくして両派閥の争いは、もはや誰にも止められない領域に至っていた。

「あの時、どうして生粋派マーディアの強行を許してしまったのか。

ドラーウィッド將軍にお任せしていれば、こうはならなかつたでしょうに。マーデン国を愛する忠臣として恥ずかしいばかりです」

「貴様が忠臣を気取るのか」

「もちろん、私以上にこの国と王を敬愛する者はいないと自負しておりますよ」

ナトラへの出兵が決まり、生粋派マーディアのウルギオと外來派ステラのドラーウィッドのどちらに軍を預けるかで両派は激しく対立し、最終的に生粋派マーディアがポストをもぎとったのだが、ここにきてそれが裏目に出ていた。

（馬鹿ばかげたことだ）

ジーヴアは内心で吐き捨てる。

彼は生<sup>マー</sup>粹<sup>デー</sup>派<sup>イア</sup>ではあるものの、政争とは距離を置いていた。派閥の利益のために国益を損なうことさえ厭<sup>いと</sup>わない両派には、心底嫌気がさしている。

「くだらぬ言い争いはもうよい！」

睨み合うホロヌイエとミダンの間を断ち切るように、フシユターレが再び声をあげた。

「おめおめと逃げ帰ってきた者どもは余<sup>よ</sup>が手ずから八つ裂きにする。だが、それよりも今は金鉱山だ。ホロヌイエ、策はあるのだろうか？」

「もちろんでございませす。とはいえ、策を弄<sup>ろう</sup>するほどでもございません。敗戦はあくまでもウルギ

才將軍の不覚によるもの。ならば次こそドラウ  
ツド將軍に任せれば良いだけのこと」

「待たれよ」

ミダンは即座に口を挟んだ。

「ナトラを侮<sup>あなご</sup>っていたウルギ才將軍の不覚は確か  
にある。しかし將を挿<sup>す</sup>げ替えればそれですむと  
考えるのは軽率ではないか。まして鉾山に籠<sup>こ</sup>もら  
れれば、並大抵の兵力では」

「ならば、先の戦の三倍の兵を用意しましょう。  
それで押し潰せばいいだけのこと」

「馬鹿な、それほどの兵を動かせば国境の守りが  
疎<sup>おろそ</sup>かになる！ 隣国のカバリヌがこちらを狙って

いるのを知らぬわけではあるまい！」

「だからこそ、ですよ。あの金鉾山は我が国の要かなめ。取り戻すのに時間をかけていれば国力は落ち込み、カバリ又などから狙われやすくなります。周辺国が挙兵する前に、迅速に、一気呵成に奪取するしかないのです。……それとも、ミダン殿は他に策が？」

値踏みするように目元を歪めるホロヌイエ。  
ミダンは視線を切り、フシユターレに進言した。  
「陛下、ここはナトラ側と話し合いの場を持つべきかと存じます」

「……なにゆえ余の国を侵した慮外者りよがいものと席を同じ

くしろと？」

フシユターレの顔が陰しくなる。しかしミダンはは怯<sup>ひる</sup>まず続けた。

「まず、大兵力を用意するのだけでも時間がかかります。次にそれだけの兵を用意しても、すぐさま奪還できるか不明です。ナトラ軍に粘られ長期化すれば、多くの物資を消費し、隣国に隙<sup>すき</sup>を見せることになるでしょう。ならば、ナトラと交渉し鉦山の引き渡しを要求する方が早く、安全であるかと……」

「それこそ馬鹿な、でしょう」

ホロヌイエは嘲<sup>あざけ</sup>るように言った。

「あの鉱山の価値を知っていれば手放すはずがな  
い」

「……金鉱山を持つとなれば諸外国から狙われる  
上に、その扱いは小国にいる人材の手に余る。そ  
れは貴様も知るところだろう？」

「む……」

ホロヌイエは僅わずかに言いい淀よどんだが、すぐさま頭  
を振った。

「しかし応じたとしても相当の資金を要求される  
はずですよ？」

「だが、交渉の余地はあるはずだ。……陛下、ど  
うか私にナトラとの交渉をお任せください」

二人の臣下の提言を受け、フシユターレは<sup>まぶた</sup>瞼を閉じて思案の顔になった。

次にその瞼が開いた時、視線の先に立っていたのはホロヌイエだった。

「……ホロヌイエ、ドラーウッド將軍を呼べ。奪還のための兵を<sup>おこ</sup>興す」

「ははっ」

「陛下……！」

食い下がろうとするミダンに、フシユターレは告げた。

「そこまで言うのならば<sup>やつ</sup>奴らとの交渉を許す、やってみせよ。……兵が集まるまでの間に、余が満

足する結果を出せるというのならば、な」

「……ははっ！」

そしてしばらく詳細を詰める議論が交わされた後、御前会議は終了となった。

家臣たちが次々と広間から退出する中で、ミダンの傍そばにジーヴアは跪く。

「話は聞いていたな、ジーヴア」

「はっ」

「今すぐ情報を集め、金鉱山へ向かえ。何としても金鉱山の引き渡しを成立させろ。これ以上外ス来テ派ラに手柄を奪われるようなことは避けねばならん」

「……」

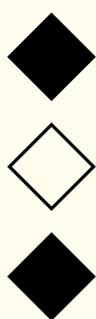
「ジーヴァア？」

「……はっ。うけたまわ承りました」

思うところはあるがこれも仕事だ。それに大兵力を興すことのリスクについてはジーヴァアとしても同意する。

（だが、短期間でどれだけできるか……）

胸の中で不安が膨らむのを自覚しながらも、ジーヴァアは行動を開始した。



二二ム・ラーレイの朝は早い。彼女が目を覚ますのは、決まってまだ夜明け前の時間帯である。

なにせ明かりが貴重な時代だ。さらに今は場所が遠征先ということもあり、油や蠟ろうの浪費を避けねばならない。となれば、日の出と共に仕事を始めるのが最適解になる。

そして起きた二二ムが真っ先に行くことは、浴室にて身を清めることだ。

「……ふう」

ナトラ軍がジラート金鉱山を占拠してから一週間。

かつて鉦山の管理者が利用し、今は臨時の本宮となっていてこの館の構造にも慣れ、業務の滞りも減少してきた。おかげでこうして水を浴びる時間も取れるようになってる。

もつとも、遠征先なので本当に浴びる程度だ。

溢あふれんばかりのお湯に浸かたり、香油を垂らし、肌を染みこませることはさすがにできない。時折、女としての思いが湧き上がって今以上の贅ぜい沢たくを望みそうになるが、そこは補佐官としての理性で押しとどめている。

（さて、そろそろ起こしにいかなきやいけないわね）

二二ムは湯船から出ると、水気を拭い身支度を整えた。

そして廊下を進み、目指す先はウェインの寝室だ。

「補佐官殿。今日もお早いですね」

扉の前には警備の兵が二人立っていた。

「私が寝坊などをすれば、その分殿下のお目覚めも遅れますからね。警備中、不審なことなどはありませんでしたか？」

「何もありません。静かなものでした」

「結構。それでは」

兵が扉の前から離れ、二二ムはウェインの寝室に踏み入った。

部屋の中は簡素なものだ。なにせ館を接收したその日のうちに、金になりそうなものも根こそぎ回収したからだ。とはいえ元の主が逃げ出す時に多くを持っていったようで、大したものはないが。だが。

しかし物に限定しないのならば、今この部屋にはナトラ王国で二番目に大事なものがある。ベツドで眠るウェイン・サレマ・アルバレストだ。

「……ウェイン」

彼の耳元に顔を寄せ、小さく囁く。

ウェインは起きない。知っている。彼は寝ることが好きだが起きることは好きではない。放つて

おけば太陽が中天に輝くまで眠りこけているだろう。

それを防ぐには、窓のカーテンを開いて部屋に光を取り入れ、彼の耳元で元気よく朝の到来を告げるしかない。そうすれば彼は気だるげに毛布の中から這はい出だして来る。

しかしニムはすぐにはそうしなかつた。ウエインの枕元まくらもとに頬杖ほおづえをつき、眠る彼の横顔をジツと見つめる。

眠るウエインの横でしばし時を過ごすこと。ニムがたまたまに行う、特別な贅沢だ。

「んー……むにゃ」

ウェインの喉のどから声が僅かに零こぼれ落ちる。何か夢でも見ているのだろうか。表情の柔らかかさから、悪夢ということではなさそうだ。

（もしかしたら、私の夢、とか）

そんなことは知る由よしもないけれど、そうなら少しだけ嬉うれしい。

（今日の朝食は、ウェインの好きなもので作ろうかしら）

王宮での食事は専任の料理人がいるが、この遠征先でのウェインの食事はニームが采配さいはいしている。ニームの腕前うでまえ的にも使用できざる食材的にも王宮で出されるそれより劣るが、王太子の口に入るものだ。

それなりに手の込んだ料理を用意している。

上機嫌になりながらそんなことを考えていると、  
ウェインは緩ゆるんだ顔で寝言を口にした。

「おっぱい……大きい……ふかふか……」

「……」

ニニムは自分の胸部をぺたぺたと触った。

お世辞にもふかふかではなかった。

朝食はウェインの苦手なものフルコースで行く  
と心に決めた。

それからニニムは、憤然ふんぜんとした気持ちを晴らす

ように彼の横顔を覗のぞき見る。

（……心なしか前より男らしい顔立ちになってる

ような)

ウェインの前髪を指先でいじりながら思う。  
(身長もまだ伸びてるのよね。小さい頃は私と同じくらいだったのに、いつの間にか抜かれて、体格もすっかりしてきて)

逆に自分の身長は打ち止めの気配が濃厚だ。顔つきや体格も丸みを帯びて女性らしくなった。なお、胸部については触れないことにする。

だというのにウェインといえ、不意に肩を掴つかんで抱き寄せてきたり、惜しげもなく上半身を晒さらしてみせたり、胸がどうのこうの言ってきたりと、性差など気にせず子供の頃ころと変わらない距離感で

いる。

それが嬉しいと思う気持ちもあれば、もやもやする気持ちもあり、何よりそういうことをされる度に、平静を取り繕いつつも心臓の鼓動が早くなる。

果たして彼はそのことに気づいているのだろうか。気づいていない気がする。でも気づいていてわざとやってる気もする。この野郎、という思いが高まり、顔に落書きでもしてやろうかと一瞬考えたが、すぐさま頭を振った。

(……そろそろ起こさなきゃいけないわね)

二二ムは静かにウェインから距離を取り、さも今しがたた部屋に入ったかのような足取りで窓の力

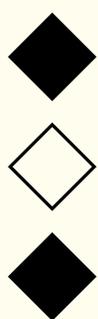
ーテンを引いた。

部屋に夜明けの光が差し込む。

光の気配を感じたウェインが小さく身じろぎをする。

「ウェイン、起きて。朝よ」

夜と朝の間にある、彼を独り占めにできぬひと時に、ニニムは自ら終わりを告げた。



「ーこうなったら、鉦山をとことん利用しよう」  
執務室の窓の外から見える鉦山を眺めながら、

ウェインは自らの結論を〇にした。

「いいの？ 間違いなくマーデンともう一度戦争よ？」

懸念けねんを示すのは傍らかたわの二二ムだ。

鉱山の稼働自体は可能だ。鉱山には鉱夫やその家族が住んでおり、占拠して当初は色々と混乱があつたが、今は周辺も含めて落ち着きを取り戻しつつある。彼らの協力を取り付け、仕事をさせることは難しくないだろう。

しかし当然、マーデン側は準備が出来次第取り返しに来るだろう。この金鉱山にはそれだけの価値がある。国力が上回るマーデンが本腰を入れ

れば、どれほどの被害が出るのか。

だがウェインとしても、それらを加味した上で  
の結論だ。

「取っっちゃったものは仕方ない。今更放棄なんて  
すれば軍どころか国の士気にも関かわる」

となれば二二ムに異があるはずもない。

「それなら問題は、マーデンからどうやって守り  
抜くかね」

「まずは周辺地理の把握だな。簡単には調べたけど、  
まだ足りない。それに鉦山の内情もだ」

「仕方ないことだけど、資料のほとんどが入手で  
きなかつたのが痛いわね」

鉦山の守備兵はすぐさま退却したが、その際に鉦山に関する資料などは多くが焼き捨てられ、あるいは持ち去られていた。陥落しそうになればそうしろと、事前に取り決めていたのだらう。

「失礼します」

不意に扉が叩たたかれた。現れたのはラークルマだ。

「殿下、各種調査の進捗しんちよくについてご報告に参りました」

「ご苦勞。順に始めてくれ」

「はっ。まずは鉦山の住民ですが、概ね我々おおむに対して好意的です。殿下のご指示通り、食料の配給や住居の建設に協力したのが功を奏したと思われ

ます」

「我が軍が到着する前の彼らの扱いを思えば、無理もありませんね」

ラークルムが現れたことで、口調を改めつつ二二ムは言う。

守備兵を蹴散らしたナトラ軍は、そのまま鉦山の制圧に乗り出した。

当然その中には鉦夫やその家族の居る居住区も含まれており――そこで目にしたのは、ぼろ小屋に押し込まれやせ衰えた人々の姿だった。

彼らは安価で買われた奴隷どれいであったり、あるいはマーデンにて罪を犯し、苦役くえきとしてここに送ら

れた者たちだ。中には罪を犯してないにも拘わらず、<sup>かか</sup>権力者の都合によつてここに送られた者もいる。鉾山労働は過酷の極みにあり、ろくな食事も与えられず、医者などは以て<sup>もつ</sup>の外<sup>ほか</sup>。住居も廃材をかき集めたような有様で、大半の人間が数年と持たずに死に至る有様だという。

そんな彼らの窮状を知ったウェインが行つたのが、食事の配給と、手すきの兵を駆り出しての簡易住居の建設である。これには鉾山の住人はこぞつて感謝を表した。

もちろんここにはウェインの打算がある。物資の消耗は増えたが、鉾山の運用を速やかに再開す

るためにも住民の協力は必須だ。マーデンとのぶ  
つかり合いが控えている中で、足元に火種ひだねを燻くすぶら  
せるのも良くない。

（それに、あんな非効率的な働かせ方してたら  
勿体もったいないしな）

人が死ぬということは、単純な労働力以外にも  
その人の持つ知識や経験も失われるということだ。  
鉋夫だからと軽々けいけいに死なせては、逆に採掘が  
滞とどこおる。

「地図の作製はどうだ？」

「鉋山周辺については一両日中に完成するかと。  
ですが鉋山内部については、坑道が多岐たきにわたり、

把握には今しばらく時間がかかります。鉦夫からも聞き取りを行っているのですが、入れ替わりが激しく全容を知る者はなかなか……」

「解った、そのまま進めるように。報告はそれだけだな？」

「はっ……ですが一つ、別件が」

「なんだ？」

「鉦山の住民の一人が、殿下に面会を求めています」

ウェインは小首を傾<sup>かし</sup>げた。

「陳情についてならお前に一任したはずだが」

「私もそう告げたのですが、どうしても殿下直々<sup>じきじき</sup>

にと。調べたところ、住民の纏め役まとの一人のよう  
ですが」

ウェインとニニムは目を見合わせた。

「どう思う？」

「何か企たくらみを感じますね。会ってみるのも一興か  
と」

「だな。ラークルム、呼んで来い」

「はっ！」

ラークルムは一旦いったん部屋から下がり、程なくして  
彼と一緒に現れたのは一人の男だ。

全身に倦怠けんたい感を纏かんうやつれた男だ。ここの住民  
ならば大半が瘦やせこけているが、彼の場合は一層

酷い。少し小突いただけでも倒れそうである。

(……)

が、跪くその男を見てウェインが考えたのは全く別の事だった。

「……お初にお目にかかります、ウェイン摂政殿下。  
私は」

「ペリント」

ウェインが口にした名前に、男はハッと顔を上げた。

「以前、マーデンの高官を調べた時に人相書きを見た。だいぶ雰囲気は変わっているが、その様子だと合っていたようだな」

「……<sup>じゅん</sup>尊に違わぬ見識。恐れ入りました」

ペリントは再び頭を垂<sup>た</sup>れた。

「殿下の仰る通り、私はペリントと申します。数年前まで、マーデンの王宮に仕えておりました」

「政争に敗れたか」

「重ね重ね、御明察の通りでございます。財産も全て奪われ、ここに押し込まれました」

「ならば要件は、我が国にて再起を望むというものか？」

「よくある話だ。そう思いながら口にした言葉だったが、しかしペリントは予想外にも頭を振った。「望む気持ちはございますが、此度<sup>こたび</sup>は別の願いの

ために参りました。そのための手土産も用意しております。……どうぞこちらを」

ペリントが取りだしたのは古びた巻物だ。

二二ムを経由してウェインが受け取り、中を確認する。その瞳が驚きに揺れた。

「これは……鉾山内部の地図か！」

「はい。全ての坑道を記した完全なものでございます」

今のウェインにとって喉から手が出るほど欲しいものだ。確認の必要はあるが、これがあるかないかで今後の作業の捗り具合が大きく変わるだろう。

「どうしてこれを？」

「摂政殿下が必要とされるだろうと考え、焼かれる前に盗み出しました」

「……なるほど、確かにこれにはあたいせんきん値千金の価値がある」

だがそれゆえに、ウェインは気を引き締める。この地図を代償とした願いはいかなるものか。

「言ってみろ、ペリント。何を望む」

「はっ」

ペリントはぞうふ臍腑に力を溜め込こむかのように大きく息を吸い、言った。

「——どうか、鉾山の民をお見捨てにならないで

頂きたい」

「……なんだと？」

予想外の言葉にウェインは眉根まゆねを寄せせる。

困惑は同席しているニニムとラークルムも同じだ。特にラークルムは不快そうに顔をしかめた。

「無礼だぞ、ペリントとやら。殿下がどれほどこの民に御心を砕かれているか、知らぬわけではあるまい。それを踏まえて見捨てるなどは、いかなる了見か」

「それゆえにでございます」

ラークルムの視線から逃れることなくペリントは続けた。

「恐れながら、殿下の御人徳ごじんとくを目にしなれば、私は口を閉ざし、地図の褒美ほうびとして金子きんすを頂戴ちようだいして去っていたでしょう。ですがそうではなかつた。ゆえにこれを秘することはできなかつたのです」  
 そう言うとペリントは、今度は書類の束たばを取り出した。

「……それは何の書類だ？」

「私が密かに記録してきた、この鉾山の採掘情報でございます。どうぞご覧に」  
 不穏な空気を感じつつも再度二二ムを經由して書類を受け取り、視線を落とす。

ペリントが口にした通り、書類の中身は金鉾山

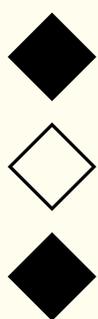
から採掘した鉱物の記録だ。最初期からつけられているものらしく、ウエインは順に読み進め――直近の記録に差し掛かったところで、止まる。

「……おい、まさかこれは」

「はい。その数字が示す通りです」

ペリントはしゆくしゆく粛々と告げた。

「この金鉱山は、こかつ枯渴しかけているのです」



ジラート金鉱山から程なく離れた場所に、小さな町がある。

これといった問題も産業も抱えていない物静かな町だが、今は違う。金鉱山を占拠したナトラ軍を警戒して近隣から兵士が集められ、物々しい雰囲気の中にあつた。伝手を持って住民は既に遠方へ避難しているが、そうでない住民は息を潜めながら暮らしている。

そんな厳戒態勢にある場所に寄り付く旅人といえ、よほど酔狂か、特別な事情があつてのことだろう。

閑古鳥かんこどりの鳴いている宿の一室を借りているジューアは、まさにその後者だつた。

「――以上が、鉱山の住民についてのご報告にな

ります」

「そうか、よくやってくれた」

部屋には二人の男がいた。片方はマーデン王国外交官のジーヴァだ。もう片方は、彼が個人的に雇っている密偵である。

ジーヴァはナトラ側と交渉するため密偵を放ち、同時に素早く交渉の席につけるよう、自らもこの町に乗り込んだのだ。そこで待つこと数日、帰還した密偵から報告を受け取ったのだが――その内容には耳を疑うようなものだった。

「まさか、金鉱山の住民がそこまで酷く扱われていたとは……」

部屋に備えつけてある、簡素な椅子いすの背もたれを軋きしませながら、ジーヴアは深く頂うなだ垂れる。噂うわさには聞いていた。人を人と思わず使い潰つぶしている。だが鉾山の全権はホロヌイエに委任されており、そして確かな利益を出しているため、外ス来テ派ラは元より生粹派マーディアも深く追及できずにいた。

( …… いや、そうではあるまい。恐らく生粹派マーディアの上層部も抱きこまれているのだ)

文字通りの金脈を押さえている上に大国の政争の経験者。この件において生粹派マーディアを丸め込むことも難しくないだろう。そして上が沈黙してしまえば、ジーヴアのような下の者たちは何も言えない。無

理にでも問題にしようとするれば——問題になる前に、そいつはいなくなるだろう。

「……ナトラが彼らを弾圧していないというのは、間違いないのだな？」

「はい。それどころか食料を配り、住居も建設しています。……恐れながら、鉦山の民の心は既にマーデンにないものかと」

「そうだろうな、そうだろうとも」  
自分たちを奴隷のごとく扱ってきた国に忠義など抱くはずもない。

彼らにしてみればマーデンは悪辣あくらつなる支配者であり、ナトラはその解放者だろう。

「ナトラ王国の王太子……徳の高い少年だとは耳にしてはいたが、真実のようだ。軍としての動きはどうだ？」

「周辺の調査をして地理の把握に努めているようです。それにまだ手<sup>て</sup>付<sup>つけ</sup>の段階でしたが、防衛用の<sup>るい</sup>塁も作り始めています」

「……」

着々とナトラ側も防衛戦の準備をしているようだ。

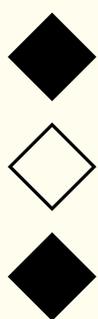
これ以上悠長にはしてられない。ジーヴァは決断を下した。

「行くしかあるまいな。使者として、話し合いの

席に」

「ですが危険です。場合によっては殺されるやもしれません」

「その程度の危険を踏み越えなくては何も得られんさ。ここは王太子の仁徳に賭<sup>か</sup>けてみるとしよう」  
固い決意と共に、ジーヴァは金鉱山へ向かうべく準備を始めた。



一方その頃<sup>ころ</sup>、敵国の外交官から心意気を評価されてきたウエインは、

「ヴあー……」

亡者のように呻うめきながら、机に突っ伏していた。

「……いつまでもダシてないで、そろそろ立ち直りなさいよ」

そう告げるニニムの言葉にも普段の力が無い。今回ばかりは彼女もウェインの気落ちに同調していた。

「……枯れかけだぜ枯れかけ。よりにもよって、金鉱山が。本国から遙はるばる々遠征して占拠して、マーデンと戦争をしてでも確保しようって決めた矢先に、実は確保する価値がないとききた。テンション下がるわあー……」

あれからウェインたちはもたらされた資料の真偽を徹底的に調査した。

結果は真。現在採掘されている金脈が枯れかけていることはほぼ間違いなかった。ウェインの失意も当然だ。個人レベルで目算もくさんが外れたのならば笑い飛ばすこともできようが、国家戦略規模でハズレを引いたとなればそうもいかない。

「でも、何もせずにいるわけにもいかないでしょう」  
「う」

ウェインへ向けると同時に、自らに対してもそうニニムは言い聞かせる。

「とにかくこれからの方針を決めないと」

「方針つつても、撤退しかないだろ」  
机から僅かに顔をあげ、不機嫌そうにウェインは言った。

「攻めたのは、ここに価値があると見込んだから。占拠して守りを固めるのは、ここの価値を維持するため。でも実は価値がないとなれば？ 早々に手を引くのが一番傷が浅い」

道理である。こうしている間にも、軍団の維持に費用がかさんでいる。まして敵地に食い込んでいくなれば尋常ならざる出費だ。早期に撤退するのが最も利口だろう。

「撤退するならあの約束はどうするの？ ペリントが言

ってた、鉾山の民を見捨てないっていう」

「民を見捨てるなとは言われたけど、鉾山を見捨てるなとは言われてないだろ。望む奴だけ連れて帰ればいいさ。ここにいたって未来はないし、元々ナトラ<sup>うち</sup>は多民族国家だ。マーデンの鉾山民が加わるぐらい何ともない」

「……妥当なところね」  
頷き、二二ムは続けた。

「それじゃあ、すぐに住民に布告を出して撤退の準備に入るのでもいいの？」

「……いや、まだだ」

「どうして？」

「絶対文句出るだろ、今撤退するなんて言っても」  
 遠征して切り取った領土を一方的に放棄するな  
 ど、軍部のみならず国のメンツにも関わる。せめ  
 て説得のためにも何かしら理由が欲しいところだ。

「軍に事実を伝えればいいんじゃない？ 全員が  
 不都合なら、指揮官にだけとか」

「指揮官に限定しても必ず兵士に漏<sup>も</sup>れる。そして  
 漏れたら士気はガタ落ちだし、下手すれば住民に  
 暴行を働く連中も出てきかねない。可能なら伏せ  
 ておきたい」

「となると……マーデンが軍を興すの待つわけね」  
 「ああ、鉾山を取り戻すためにマーデンは相当な

大軍を引っ張ってくるはずだ。その兵力差が明確になれば、撤退にも納得してもらえる……はず」  
 いまいち煮え切らないのは、ここまで積み重なってきた予想外の出来事ゆえである。

「いっそのこと何も教えずに他国に売るのはどう？ カバリヌとか」

ペリント曰いわく、この鉱山を任されていたのはホロヌイエという家臣だが、採掘された金の量は役人を経由するたび横領のために数字が改ざんされており、恐らくは彼も正確な全容を把握していないはずだという。

すなわち金鉱山の枯渇を知るのはペリントとあ

の場にいたウェインたちのみ。ならばそのまま隠ぺいして他国に売るといふのは不可能ではないだろう。――が。

「短期間に話を纏めるのは難しいし、長期的になるとマーデンとぶつからなくちゃならん。そうになると採算が微妙になるし、バレた時に絶対恨うらまれるのがな」

悩ましいところだ。せつかく取った場所を何もせず手放すのは惜しい。

どこかに売り先がないものかとウェインは思考を巡らせる。

その時、にわかかに館の外から騒ぎ声が届いた。

「何かしら？」

二二ムと共に窓から外を覗き込むと、何やら外を慌ただしく兵が行き来している。もしや敵襲かと思っただとところで、部屋のドアが叩かれた。

「殿下、失礼します！」

僅かに息を切らしながら現れたラークルマに、ウエインは即座に問いかけた。

「敵の攻撃か？」

「いえ、違います」

ならばなんだと視線で続きを促す。

「使者です。マーデンからの使者が今しがた到着しました」

「――」

その時ウェインが目を見開いたのは、使者が到着したからではなかった。

脳裏のうりに浮かぶ、一つの閃きひらめによるものだ。

「殿下との会談を要求しています。如何いかがなさいますか？」

「……そいつは名乗ったか？　どんな身なりだった？」

「ジーヴァと名乗りました。そしてマーデンの外官である。立ち振る舞いからしても高位の官吏であるのは間違いないかと思われまます」

「聞き覚えがあるな。ニニムは？」

「ございます。そのような者がマーデンの宮中にいたはずです」

「よし、ラークルム、使者を応接間に案内しておけ。俺もすぐに向かう。くれぐれも失礼のないようにな」

「はっ！」

ラークルムは即座に踵きびすを返して部屋を出ていく。

「ニニム、対応の手配を頼む」

「解ったわ。すぐにすませー」

言いかけた唇が止まる。理由は目の前の主あるじの表情。

「どうしたのウェイン、変な顔して」

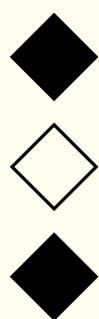
「いやなに、考えてみればこころが完全にすっぱ抜

けてたと思つてな」

「……何の話？」

ウェインはにっつと笑つた。

「鉾山の売り先だ」



館の応接間に通されたジューヴァは、椅子に腰かけながら交渉相手の来訪を待っていた。

静かに瞑目めいもくしているようにみえるが、横顔には僅かな緊張が伺うかがえる。

しかしそれも無理からぬことだろう。彼からす

ればここは既に敵地の只中だ。話し合いのために派遣した使者が殺されることなどざらにある。今こうしている間にも、部屋の外に武装した兵士たちが集まっっているかもしれないのだ。

（……だが、そうはならないはずだ）

始末する機会ならばここに来るまでにあつた。そして自らがマーデンの要人であることと、王太子の仁君という評判を踏まえれば、話し合いに持ち込める可能性は低くない。

（もっとも、その話し合いが最大の問題なのだがな）

どちらかといえ、緊張の理由はそちらの方だ。

時間を優先したため相手についてはほとんど調べられていない。知っている情報は断片的なものばかり。これが吉と出るか凶と出るか。

そう思い悩んでいると、扉が開いて一人の少女が現れた。抜けるような白い髪と赤い瞳。フラム人だ。そういえばマーデンと違いナトラではフラム人は珍しくないと聞く。

「摂政殿下のおなりです」

少女に次いで、扉の向こうから護衛を伴って少年が現れた。

「——お初にお目にかかります、摂政殿下」  
ジーヴァは少年に恭しく一礼した。

「私はマーデン王国外交官のジーヴァと申します」  
 「ナトラ王国摂政、ウェイン・サレマ・アルバレストだ」

若い、とジーヴァは思った。十代半ばの少年だとは聞いていたが、こうして目の<sup>ま</sup>当たり<sup>あ</sup>にするとやはりあどけなさがまだ残る。

しかし同時に、彼の立ち振る舞いには国を率いる人間としての自負と貫<sup>かん</sup>禄<sup>ろく</sup>があつた。血脈だけのお飾りではないとジーヴァは心に刻み込む。

「――まずは突然押しかける形になつたこと、お詫<sup>わ</sup>びいたします、摂政殿下」

互いに机を挟んで向かい合つたところで、スタ

トは儀礼的な謝罪から。

背後に二二ムを控えさせるウェインの方もそつなく応じる。

「火急かきゆうを要する問題が我らの間に存在することは承知の上だ。その点についてはむしろ、よくぞ来てくれたと歓迎したい」

そこでウェインは肩をすくめた。

「しかし、何分急なにぶんなことだったものでな。客人を迎えられるのはこの部屋だけだった。可能ならもう少し格式のある席を用意したかったが、許されよ」

「ご配慮はいりよ、痛み入ります。しかし事前に連絡を出さなかつたのはこちらの落ち度。たとえ招かれた

先が野原であつても感謝しかありません」

「そう言つてもらえればこちらの気も休まるというものだ」

ウェインが浮かべたのは友人に向けるようなくだけた微笑<sup>ほほえ</sup>みだ。彼の人柄がそのまま表れたかのようで、なるほど、彼はナトラの民にさぞ愛されていることだろうと思わせる。

だがジーヴァの心に緩みは生じない。自分はナトラではなくマーデンの民であり、何より本番はここからなのだ。

「してジーヴァ殿、ここには何用で来られたのかな？ 貴殿も知つての通り、今この地はマーデン

の民が呼吸をしやすい場所ではないが」  
来た。本題。ジーヴァは一度強く歯を噛みしめ、  
言った。

「それはもちろん——我が軍に代わってこの地の  
警護を請け負ってくださったあなた方への御礼と、  
引継ぎの準備についての話をしに参りました」

ジーヴァの言葉を受けて、「は？」という顔にな  
ったのはニニムや護衛の兵士だった。

あるいは臆面もなく鉦山を返せなどと言っ  
てくれば、兵士は殺意を漲らせていた。しか  
しジーヴァの言葉は彼らにとってあまりにも想定外

だ。

実のところ、それはウェインも同じだった。ただし彼が他と違うのは――

（な――るほど、随分思い切ったな）

ニニムや兵士たちが呆あっけ気に取られている中で、ウェインは一瞬にしてジーヴァの真意を見抜いたところである。

『ウェイン、これはどつらいつらと？』

ニニムは紙に走り書きした文字でウェインに問いかける。

『つまるところ、お互いの侵略行為を無かったことにしましょう、って提案だ』

素早くペンを走らせ返事を示す。

二二ムは数秒ほど眉根を寄せた後、はっとした表情になった。彼女だけに見えるよう、ウェインはにっと笑った。

マーデンにとって金鉱山は一日も早く取り戻したい場所だ。しかし交渉を始めれば先のマーデンの侵略行為への言及は避けられず、賠償ばいしょうや捕虜ほりよの返還、国境線をどこに引き直すかなどで長引くのは必然といえる。

（まさか、両国の間に戦争が起きていなかっただけに、そのあたりをすっ飛ばそうとはな。この丸いおっさん、見かけによらず大胆に斬きりこ

んでくる)

さらにこの一手は、マーデンの敗戦という事実を打ち消し、プライドの高いフシユターレ王の顔を立てることに繋がる。なかなかの妙手だ、とウェインは思った。

「我が国がカバリ又などの隣国に国境を脅かされている間、最重要拠点であるこの地の守護を担ってくださったことには感謝の言葉もありません。無論、相応の謝礼はさせていただきます」

侵略行為に対する賠償と金鉱山の買い取りを、謝礼という形で収める。当然謝礼がいくらになるかは議論を重ねることになるが、それでも普通の戦後交渉より

も話の進みはスムーズだろう。

そしてこの提案は一見するとマーデン側の都合を強く感じるが、ナトラにもメリットはある。

「いやしかし助かりました。この金鉱山は我が国の生命線。もしも他国に奪われていけば――総力を挙げて取り返し、不屈きな敵国を容赦なく滅ぼしていただでしよう」

メリットというのがこれだ。

マーデンとの戦争の回避。実際のところこれは大きい。

ポルタ荒原では勝利を得られた。しかし次は？  
次に勝ててもその次は？

国力レースになればナトラの不利は明白だ。そ  
 もそもレースになった時点で、国としては詰つんで  
 いる。たとえマーデンを凌しのげても別の国がここぞ  
 とばかりに襲いかかってくるだろう。もちろんそ  
 の危険はマーデン側にもあるのだが、ーフシユタ  
 ーレ王の理性が、そのリスクを認識してくれるか  
 どうか、ウェインとしては甚はなはだ疑問なのである。  
 (プライドの高いフシユターレだ。何度負けても  
 絶対に取り返そうとしてくる……それどころか負  
 けるほどにムキになるだろう。共倒れなんてまっ  
 ぴらごめんだ)

ゆえに、戦争の事実を消し去るのは悪くない。

敗戦の汚名がなくなれば、フシユターレも当面は大人しくしている公算は高いだろう。その間にマーデンからせしめた金銭で国力を高められる。もちろんデメリットもある。かねてより懸念<sup>けねん</sup>だった国家としてのメンツの問題だ。

特に軍部は反発するだろう。戦争の事実を消すということとは、彼らの功績も表向きは矢われるということになる。マーデンから支払われる金銭で補填<sup>ほてん</sup>しても、感情的にはしこりが残るだろう。

だがそのデメリットを踏まえてもなお、ジーヴアの提案を受けられる理由がある。

（ここまでの流れで解った……間違いないくマーデ

ン側は金鉱山の枯渇に気づいていない）  
 ウェインたちのみが知るこの事実。

このまま持ち続けても、いずれはハズレくじで  
 あることが露見し、軍の士気はガタ落ちになるだ  
 ろう。かといって他国に売れば恨まれるのは必然だ。  
 しかし今、マーデンに売るのはならば？

手を付ける間もない程速やかに返還されたのだ。  
 発覚してもこちらには向かず、マーデン内部で責  
 任の押し付け合いが発生することだろう。もし金  
 を返せと言われても、知らぬ存ぜぬで通せばいい。  
 売却することで下がる軍からの評価も、真実を知  
 れば英断であつたと再評価に繋がるはずだ。

（戦争を回避し、枯れた鉦山で大金をせしめるチャンスは恐らく今この時だけだな……）

『向こうの提案に乗るの？』

二二ムに文字で問いかけられ、ウェインは肯定する。

『ああ。ただしここですぐに食いつけば足元を見られる。ちよいと揺さぶりもかけなきやな』

『あんまり欲張らない方がいいんじゃない？』

『大丈夫だって。あくまで不自然に思われない程度に留<sup>とど</sup>めるさ』

不安そうな顔になる二二ムに、ウェインはにと笑った。

(……手ごたえが読めんな)

戦争事実の消去という提案は、ジーヴァにとって苦肉の策であつた。

もう少し時間があれば、あるいはフシユターレ王の度量がもう少し広ければ、別の方法もあつたらう。しかし短期間でフシユターレを満足させつつ実質的な講和に至る方法というのは、ジーヴァにはこれしか思いつかなかつた。

先ほどから一方的に語る言葉に熱が宿るのも、自らの提案の難しさを理解し、取り繕おうとしているがゆえのものだ。

しかし果たしてそんな小細工が通用しているのだろうか。

対面に座る少年は、こちらをジッと見つめながら黙するばかりだ。どんな言葉にも微動だにせず、ただジーヴアの目を真まっ直すぐに捉とらえている。

（鉄の像を木づちで叩いているような気分だが……こいで引くわけには……）

引くわけにはいかない。その思いが、しかし揺らいでいる。理由は脳裏にチラつく道中の光景だ。ボロボロの衣服を纏まとう鉱山の人々。そんな彼らに対して炊き出しなどを行うナトラの兵士たち。

もしもナトラ兵がいなくなれば、彼らはどうな

るだろう。戻ってくるマーデンの管理人は、果たして彼らを人として扱うだろうか。

（……私は何を考えている。金鉱山を取り戻す。そのため全力を尽くす。これでいい、これでいいんだ）

自らに何度も言い聞かせていたその時、ウェイが動いた。

「ーリビ」

言葉の意味を即座に理解できず、ジーヴァが戸惑う中でウェインは続ける。

「セフテイ、レヒス、タルギア、カーラル……」

「せ、摂政殿下……その、何を？」

「名前だ」

ウェインの声には、底冷えするような迫力があつた。

「ポルタ荒原で死んだ、我が軍の兵士たちの」  
「――」

ジーヴァは己の心臓が跳ねるのを感じた。

類稀たぐいまれなる仁君。目の前に座る少年がそう評される人物であることは知っていた。

知っていたのに。

「貴殿の主張は理解した。あるいは、そういう解釈も可能だろう。しかしジーヴァ殿、ならば死んだ彼らの魂はどこへ行けばいい？ 祖国のために、

誇り高く散っていった彼らの墓標ぼひょうになんと刻めばいい？」

「そーーれ、は」

「まさか、何もない荒原で死んだ間抜け共、ここに眠ると書けーーとは言っまいな？」

凄すごみを感じさせる眼差まなざしに、ジーヴァは二の句を継げなかつた。

その姿を見て、ウェインは心の中で喝采かつさいをあげる。  
(おっしや、効いてる効いてる！)

だが隣のニニムは心なしか渋面じゅうめんだ。

『ちよつと効きすぎじゃない？ これで交渉不可と思われたら本末転倒でしよ？』

『いやあこれぐらい普通だつて。むしろもうひと押し欲しいところさ』

幸いにも自分は表向きは仁君として通っている。兵や民を引き合いに出すことに説得力はあるはずだ。そうして交渉の壁を高くするほど、向こうは金を積まなくてはならなくなる。

「ジーヴァ殿、この民がどのような扱いを受けていたか、貴殿は知っているか？」

「……はい」

「少し前にここの纏め役の一人が陳情してきた。どうか鉱山の民を見捨てないでほしい、と。マーデンではなく、ナトラの我々にだぞ。それだけで

も彼らがどのようにならわれてきたか解るといってものだ。仮にここを君たちに引き渡したとして、彼らはどうなる？ ようやく搦<sup>つか</sup>めた希望を失い、残るのは絶望だけだ」

「……………」

「これらを踏まえたと上で、もう一度問おう。——ここに何用で来られたのだ、ジーヴァ殿」

——誇り高い人になりなさい。

かつて、母から贈られた言葉をジーヴァは思い出していた。

もはや色あせた記憶だが、きっかけはいじめら

れている一人の少年から目を逸そらしたことだ。□  
をつぐみ、家に戻り、何事もないように振る舞って、  
けれど母にはお見通しで。

——誇り高い人になりなさい。未来の自分に、  
胸を張れるように。

その言葉は強く心に残り、ゆえに、そうなるう  
と思つた。十年、二十年、三十年と歩き続けた先で、  
ふと振り向いた時に見えるものから目を背そむけるこ  
とのないような生き方をしようと思つた。

思つていたはずなのに。

挫折。圧力。保身。派閥争い。

気づけば幼き日の思いは失われ、歩く道は日ひなた向

から遠い場所に。

仕方のないことだ。理想は届かないからこそ理想なのだからと言い訳して。

なのにこの少年は、摂政という自分よりも遙かに困難な立場に身を置きながら、民を守ることに躊躇いがない。

「……摂政殿下」

「なんだ」

「お答えする前に、一つ、私からお尋ねすることをお許しいただきたい」

「許す」

ウェインの目に迷いはない。眩しいほどに真つ

直ぐだ。

「……その背後の方は、殿下にとつての何者なにものなの  
でしよるか」

美しく透き通る髪を持つ、フラム人の少女、  
あの時の少年もそうだった。彼もまたフラム人  
であり、それゆえに迫害されていた。

なぜ今になつてあの日のことを思い出したのか。  
その理由が、ようやく解つた。

「二二ムは、俺の心臓しんぞうだ」

（私は、彼のようになりたかつたのだ——）

（今の質問、何の意味があつたんだろ）

特に迷うことなく返事をしたものの、ウェインはジーヴァの問いに内心で首を傾<sup>かし</sup>げていた。

様子を探ろうにもジーヴァは俯<sup>うつむ</sup>き、その顔色は窺<sup>うかが</sup>えない。ここぞとばかりにウェインとニニムは文字でやり取りする。

『私が物珍しかったんじゃない？ 西側じゃ外交の場にフラム人がいるなんてまずないでしょ』

『にしては、タイミングと様子が変な気もするんだよな』

『だったらそうね……民と兵を労<sup>いた</sup>わり、フラム人でさえも差別しないウェインに感動したとか』

『ははっ、実はこの外交官が人情家だったか？』

無い無い』

『でも、もしそうだったら交渉諦められちゃうか  
あきらもしれないわよ?』

『大丈夫だって。そうなたたら鼻でジヤガイモ食  
つてやるよ』

そう気楽に応じていると、対面のジーヴァが静  
かに顔を上げた。

「――摂政殿下の御心、理解いたしました」

その表情はどこか晴れやかで、重荷から解放さ  
れたようにもみえる。

「戦死者の方々に対する無礼な発言、お許しください。  
私はとんだ思い違いをしていたようです」

「……ん？」

様子がおかしい。そんな気がしたウェインだが、ジーヴァはそのまま続ける。

「貴国が血を流して得たこの地をナトラの地とし、民を断固として庇護するつもりでおられる以上、我らとは弓矛ゆみほこを交えて決する他にないことは明白」

「え」

「恐らくこれを最後に私は外交の任から解かれるでしょう。ですが、貴国の断固たる姿勢は私が一分ぶも漏もらさずフシユターレ王へお伝えします」

「ちよ」

「それでは摂政殿下、私は急ぎ王宮へ戻らせて頂

きます。——最後に私的なことを言わせてもらえれば、貴方あなたのような徳の高い御方と言葉を交わせたことは、誠に光栄でした」

ジーヴァは深々と一礼し、部屋を辞した。

ウェインとニニムは彼の背中が扉の向こうに消えるのを見送り、そのまましばし硬直した後、互いに見合つて視線を重ねた。

「ええつと……ニニム？」

「……とりあえず、ジャガイモを用意してまいります」

ニニムに言えたことは、それだけだった。

## ◆第四章◆心臓

兄のウェインが軍を率いて西へ向かってからというもの、フラニーヤの日課には、私室のテラスから西の空を見つめる時間が追加された。

その行為がなんら益体やくたいのないものであることは、フラニーヤも解っている。兄がまだ帰って来ないことは、兄からこまめに届く手紙が教えてくれることだ。どんなに目を凝こらそうとも、兄の姿を捉とらえることは適かなわらない。

とはいえ理屈で解っていても自制できれば苦勞

はしない。思えば兄が帝国に留学してる時も同じことをしていた。あの頃は、見つめていたのは東側の空だったが。

誰も口を挟まなければ、フラーニヤは延々と空を見つめ続けるだろう。そして国王が病に臥せ、王子がいらないナトラの王宮において、王女たるフラーニヤの行いを諫めることができざる者は僅かだ。

「姫様、そろそろ部屋へお戻りなさいな。あまり風に当たるのは体によくありませんよ」

その内の一人、侍従のホリイに部屋の中から呼びかけられて、フラーニヤは振り向いた。

ホリイは恰幅の良い年配の女性だ。肌は浅黒く、

髪は短い。多民族国家であるナトラでもあまり見ない人種だ。出身は大陸の南方だそうだが、詳しくはフラワーニヤも知らない。物心ついた時には彼女が傍<sup>そば</sup>で世話をしてくれていた。

「もう少しだけ。お兄様の無事をお祈りしなくちや」

「寒いテラスでしようが暖かい部屋でしようが、祈りに違いはありませんよ」

「そんなことないわよ。神様だつて辛い<sup>つらい</sup>思いをしてる人のお祈りの方に耳を傾けると思うわ」

「でしたら返事は、まずは自分を労<sup>いた</sup>わりなさい、でしようね。それにほら姫様、うかうかしてると

焼き立てのパンケーキが私の胃袋に入っちゃいますよ」

「まあ。食べ物で釣ろうだなんて、ホリイってばずるいわ」

「せっかくの焼きたてを逃すなんて罪深いことをしてはならないと、私の神様がおっしや仰るもので」

そう笑いながらテーブルの準備をするホリイの姿と、僅かに届くパンケーキの香りを前にして、フラワーニヤはついにテラスから私室へと足を運んだ。

「ナナキ」

部屋に戻るやいなや、フラワーニヤは壁際に向か

って声をかけた。

するとまるで壁からにじみ出てきたかのように、一人の少年の姿が露あらわになる。

名はナナキ。彼女の護衛であり、その透き通るような白髪と赤い瞳ひとみが示す通り、ニニムと同じブラム人である。

「一緒に食べましょう」

「……」

ナナキはこつくりと頷うなずくと、フラーニヤと共に席についた。その様子を微笑ほほえましそうに見守りながら、ホリイはパンケーキを切り分けていく。「それにしてもお兄様、お手紙では元気そうだけど、

本当に大丈夫かしら」

「そうそう弱音を吐くような方ではありませんからねえ」

フラワーニヤと同じように、ウェインのこともホリイは長らく見てきた。彼の性格については時期によって差があるが、どの時期であつても自分の弱い部分は表に出さない子だつたと思う。

「問題ない」

その時、黙々とパンケーキを口くちばちに運んでいたナキが小さく呟つぶやいた。

「王太子には、ニニムがついてる」

ニニム・ラーレイ。ウェインの腹心であり、フ

ラーニヤにとつても姉のような人物。

「……そうね、お兄様とニニムが一緒ですものね」  
フラーニヤはウェインと同じくらい、彼女のことも信賴している。二人が一緒ならば、できないことなど何もないのだらうと思えるほどに。

「そうだわ。お兄様とニニムがいるのなら、私も遠征に参加したって問題は」

「ダメだ」

「ダメです」

即座に二人にダメだしされ、ふにゃあ、とフラーニヤは机に突っ伏した。

「いくらなんでも危険ですし、今の姫様にはそれ

ほど時間の余裕はありませんよ。政治の勉強をしたいと、ご自分で言いだしたことでしよう?」

「それはそうなのだけねどお」

これまでは蝶ちようよ花よと育てられてきたフラワーニヤだが、最近は兄を手助けするため、勉学に励んでいる。しかし勉強というのは往々にして、身につく速度よりも億劫おっくうになる速度の方が上回るのが常であり、今では講義の時間が来るたびに思わず呻うめき声が出てしまう。

「はあ……きつとお兄様は、私なんかじゃ想像もつかないような難題でも、軽々とこなしてしまうのでしようね」



応じるニニムはウェインと違い平静だが、表情は硬い。

「しかもさあ！ めっちや噂うわさになってるじゃん！ 会議の内容！」

「護衛に口止めしなかつたものね……」  
外交の失敗に気を取られている内に、会議を見聞きしていた護衛たちからその内容は鉦山にいる軍や住人に流布るふされた。

しかも、そもそも会議の内容からして「金の力で強引ごういんに解決しようとしたマーデンの提案を、民や兵を思いやる王太子殿下でんかは断固として拒絶した」というものだ。

元よりウェインに心酔している護衛たちを通し  
てこれが語られたとなれば、それはもうマーデン  
がいかにかに悪逆卑劣な蛮族あくぎやくひれつであり、ウェインがいか  
に天理てんりに通じた心優しい賢人であるかという内容  
になるのは必然だった。

その結果、

「マーデンめ。国を守るべく散った兵の死を侮辱ぶじよく  
するなど、道理を弁わきまえぬ畜生ちくしやうか！」  
「外面そとづらは金で誤魔化ごまかせても、心の卑いやしさは隠せぬ  
ようだな」

「おお、しかしさすがは王太子殿下。何でも国家  
予算に匹敵ひつてきする金を積まれても、頑がんとして首を縦

には振らなかつたとか」

「あの方こそまさしく我らが誇り。王太子殿下の決断に泥を塗るような真似まねはできんなー！」

というような具合で、軍の士気は最高潮。鉾山の住民も感動の涙を流し、どうか自分を王太子殿下の役に立ててほしいとこぞって名乗りを上げるほどである。

「もう今更撤退とかでききる空気じゃないじゃん……俺おれはただ金鉾山を売り払って大金をせしめたいただけなのに、どうしてこうなった……」

ぐえー、と机に突っ伏すウェイン。  
そんな彼を慰なぐさめるようにニニムは言った。

「……でも、私は良かったと思うわよ。今回の件を断つて」

「はあーん!? どの辺が良かったんですかね二二ムさあーん!? 不良債権を金を貰<sup>もら</sup>った上で押し付ける絶好の機会を逃<sup>のが</sup>したんですけどおー!?」

「でもその代わり、向こうの要求を呑<sup>の</sup>んで軍部のプライドを傷つけることになったわ。それは長い目で見れば、ウェインの統治にとって疵<sup>きず</sup>に」

「いや、そもそも俺そんな長く統治しないし即位したら帝国にとつとと身売りしてーーうおおおおい!? やめろ、俺の鼻にジャガイモを突っ込もうとするな……!」

ウェインはどうにかニームの蛮行を阻止すると、奪い取ったジャガイモを手の中で転がしながら言った。

「何にしても、この鉾山から手を引くのは確定事項だ。ただ問題は最高のチャンスを逃した今、どのタイミングでそれを行うかになる」

「軍が徹底抗戦一色の今、成果もなしに撤退はありえないわね」

「マーデンは大軍を率いてくるはずだ。その戦力差を<sup>ま</sup>目の<sup>あ</sup>当たり<sup>い</sup>にすれば、<sup>い</sup>否<sup>あ</sup>応<sup>お</sup>にも<sup>え</sup>厭<sup>ん</sup>戦<sup>せん</sup>感情は強くなる」

「今の士気の高さと強さは相当よ。逆に奮起しち

やうんじやない？」

「一戦やむなしとは思ってる」

不満そうにウエインは呟いた。

「血が流れれば自然と士気は落ちる。それに交渉が失敗に終わった今でもマーデンは早期解決を望んでるはずだ。膠着状態こうちやくに持ち込めれば、講和を結んで金鉱山を買い取らせることもできるかもしれん……！」

「まだ諦めてないの？」

「諦めきれなかったの！ただでさえ遠征費用が嵩かさんでるんだから、金をもぎ取れそうなら全力でもぎとるわ！」

「はいはい、解ったわよ。それじゃあマーデンの動向に目を光らせつつ、籠城戦ろうじょうせんを想定して準備を急がせるってことでいいわね？」

「それでいい」

ウェインは頷きさらに続けた。

「あとマーデンの王宮に内通者は入ってるよな？」

「ええ、生粋派マーディアと外来派ステラに少人数ずつだけど」

「外来派ステラの後押しと、鉦山の早期奪還を煽あおらせて

おいてくれ。不自然でない程度でいい」

「手配するわ」

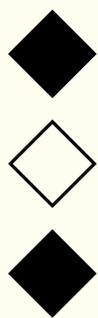
「それとラークルマとペリントに陣地について話がある」

「了解、ついでに呼んどく」

ニニムは踵きびすを返して執務室を出ていく。

一人になったウェインは、しばらくジヤガイモで手遊てすきびした後、天井てんじょうを仰あおいだ。

「次の戦争、ハガルに任せっぱなしにはできそうにないな……俺も動くか」



ラークルムの元にニニムが現れたのは、坑道の入り口に設営された拠点で、ペリントと坑道の場所と状態について話し合っているところだった。

「ラークルム隊長、殿下がお呼びです。ペリント  
さんも一緒に来るようにと」

「うけたまわ承りました。すぐ参ります」

兵の指揮や住民との交渉など、ラークルムが抱える雑務は大きい。しかしウェインから呼び出されたとなれば話は別だ。ラークルムはペリントをともな伴い館へと向かう。

「ラークルム殿、一つよろしいか」  
「何なりと」

最近のラークルムは業務内容的に、鉦山の顔役の一人であるペリントと過ごすことが多く、それなりに話せる間柄になっている。

だからこそペリントがその質問を口にしたのは、当然の流れと言えるだろう。

だが、

「あのフラム人の少女は、摂政殿下の愛妾あいしやうか何かなのか……？」

「……」

その瞬間、ラークルムは動きを止め、纏まとう空気が張りつめた。

ペリントは自分が間違いなく失言をしたと理解し、ラークルムの手が腰元の剣の柄に添えられたのを見て、死を覚悟した。

「……ペリント殿、そういえば貴殿きでんはマーデン人

だつたな」

「……その通りだ」

ペリントはゆっくり頷いた。即死は免れたが、まだ死がすぐ傍に揺蕩たゆたっているのを肌で感じた。

「ならば、不思議に思うのも無理はない。フラム人は西側ではよい扱いをされていないからな」

「……」

「ニニム殿は、王太子殿下にとってかけがえのない人物だ。愛妾という側面も確かにあるだろうが、それ以上に重要な補佐であり、また無二むにの友人でもある」

「それは……なるほど、どうやら失礼なことを□

にしてしまったようだ」

「いや、謝る必要はない。むしろ気づかせてもらえて助かった。ここは王宮と違い、二二ム殿を知らない者が多くいるのだな」

ラークルムはしばし言葉を探るように<sup>まぶた</sup>瞼を閉じ、言った。

「ペリント殿、我らが王太子殿下は心優しく、誠<sup>つか</sup>に仕え<sup>が</sup>甲斐<sup>い</sup>のある御方<sup>お</sup>だ<sup>かた</sup>。だが<sup>すべ</sup>全ての王がそうであるように、触れてならない逆鱗<sup>げきりん</sup>を殿下も持つている」

「……」

「私が知る限り、これまで三人、公然と二二ム殿

を侮辱ぶじやくした者がいる」

「……その者たちは？」

「もういない」

言葉の意味するところをプリントは速やかに理解した。

「プリント殿、私は貴殿に命令する権限を持たない。ゆえにこれは嘆願たんがんになるが、貴殿にも貴殿の配下にも口には気を付けるよう徹底してもらいたい」

「……承ろう。だがもしも、誰かが口を滑らせた」

「その時は」

ラーケルムは剣の柄を叩たたいた。

「速やかに無かったことにするのがいいだろう。怒った竜の息吹いぶきに焼かれるのが、その者だけです。むとは限らないからな」

「……」

ペリントは黙り込み、二人は沈黙を引き連れてウェインが待つ館の執務室に到着した。

「殿下、ラークルムとペリントです」  
「入れ」

ラークルムはペリントを伴って部屋に入る。ペリントの横顔が若干緊張してみえるのは、先の会話が少なからず影響しているのだろう。椅子いすに座るウェインの姿を認めると、彼らは揃そろって膝ひざを突

いた。

「お呼びにより参上いたしました」

「私にも用向きがあるとのこと。何なりと「命じ  
ください」

二人の口上を受け取り、ウェインは頷き言った。

「先日のマーデンとの交渉決裂については耳にし  
たか？」

「はっ。聞き及およんでおります」

「ならば話は早い。マーデンと一戦交えること  
はもはや避けられないだろう。これから軍議を重  
ねて詳細を詰めることになるが、恐らくは鉾山に  
立て籠こもって対抗することになるはずだ。そ「うで、

先んじてお前たち二人に進めておいてほしいことがある」

ウェインはにっこりと笑い、その計画を口にした。



ナトラ軍が着々と防衛準備を整える一方で、マーデン側も鉦山奪取に向けて動き出していた。

「兵の方は今どれほど揃っている？」

宮廷にて準備の陣頭指揮を執とるのは大臣のホロヌイエである。

「現在二万ほどになります」

「予定より少ないではないか。どうなっている」「それが、マーデニア生粋派のモナス家を筆頭に未だいまに出兵を渋る者たちが」

「この期に及んで無様ぶざまなことだ。これ以上駄だ々だをこねるならば王命により斬首ざんしゅすると伝えろ」

「ははっ！」

部下たちに指示を飛ばし、次に彼が向かうのは王の待つ広間だ。

現れたホロヌイエに、フシユターレ王は苛立いらだちを隠そうともせずと言った。

「ホロヌイエよ、まだナトラの羽虫はむし共を滅ぼせんのか」

「王よ、もうしばらくのご辛抱を。必ずや勝利を捧げますゆえ……」

「そんなことは当たり前だ！　いいか、奴らは無礼にも話し合いでの解決を断りおった！　羽虫の分際で、私の顔に二度も泥を塗ったのだ！　これが許せるものか！」

フシユターレ王はそもそも外交での解決に乗り気ではなかつたが、かといって断られるとはまるで考えていなかつたようだ。ナトラ王国を圧倒的に格下であると考ええている王にとって、話し合いを提案すれば、ナトラ側が卑屈に媚びてくる以外に想像もつかなかつたようである。

ホロヌイエとしては笑いが止まらない。おかげで外交による解決を主張していた政敵のミダン大臣は王から遠ざけられ、半ば失脚した形だ。さらに奪還作戦の采配は外来派の自分の手に任され、もはや邪魔する者はいない。

ここで金鉱山の奪取に成功すれば、王宮での地位は盤石だ。目障りな生粋派を駆逐し、ろくに政治を知らない王に代わって一國を牛耳れるだろう。(だが、このような小国で満足する私ではない……もっと大きなものを手にしてみせよう)

膨れ上がる野心と、それを成就する道筋がハッキリと見えることに、ホロヌイエは歓喜する。

そんな時、ホロヌイエにとって重要な人物の声が届いた。

「王よ、此方こちらにおられましたか」

現れたのは具足ぐそくを纏まとう一人の美丈夫びじょうふだ。

彼こそ外ス来テ派ラに属し、その全面的なバックアップを受けて若くして將軍の位についた男、ドラーウッドである。

「到着が遅れましたこと、お詫わびいたします。ドラーウッド、お召しにより参上いたしました」

「ふん、ようやくか……」

臣下の礼を取るドラーウッドを見て、フシユターレは仏頂面ぶつちやうめんで鼻を鳴らした。フシユターレはド

ラーウツドを嫌っており、その理由が自分とは比べ物にならない端正たんせいな顔立ちしつとに嫉妬しつとしているからであることは、家臣たちの間では周知の事実だ。それでもこの期ごに及べば、いくらフシユターレといえど顔を理由に遠ざけることはしないが。

もつとも、ドラーウツドが若く顔が良いのは偶然ではない。顔立ちが整っていればおの自ずと民衆の人気も取りやすく、若ければ経験不足から操縦も取りやすい。能力よりも政治的な面を重視した上で外ス来テ派ラによつて押し上げられたのがドラーウツドなのである。

「よくぞ戻られました、ドラーウツド將軍。西方

の守りではさぞ「苦勞なさつたでしよう」  
 「なんの、大きな衝突もなく落ち着いたものでした」

それはそうだろう。マーデンの西方は安定しており、將軍として守りを務めたという看板を得るためだけの場所だ。どんな無能でも失敗はしない。「真に苦勞を強いられているのは、今もナトラへの警戒を続けている兵士たちでしよう」  
 外<sup>ス</sup>来<sup>テ</sup>派<sup>ラ</sup>と繋<sup>つな</sup>がっているドラークは、当然東側で起きたナトラとの戦争についても承知している。

「そのナトラから我が国の領土を奪い返すために、

貴殿に指揮を執って頂く。承知していただけま  
すな？」

「もちろんです」

ドラーウツドは力強い笑みを浮かべた。

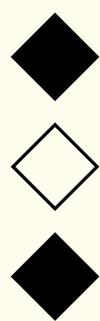
「ナトラといえ、レベティア教の教えを解さぬ  
下賤げせんな蛮族の集まり。そのような連中に愛する国  
を切り裂かれたと聞き、忸怩じくじたる思いを抱えてい  
ました。我が王と神の名において、奴らやつらに身の程  
を教えて差し上げましょう」

かくして、マーデンは金鉱山奪還のために軍容  
を整える。

集められた兵士はのべ三万。総指揮を執るのは

マーデンの外<sup>ステラ</sup>来派における武の象徴であるドラウツド。

大陸の季節が夏を迎える頃<sup>ころ</sup>、ナトラとマーデンの両軍はぶつかることになる。



ジラート金鉱山は、主要な採掘場となっている鉱山から、くるりと弧を描く尾根<sup>おね</sup>が伸びているのが特徴だ。上空から俯瞰<sup>ふかん</sup>すれば、さながら巻かれた獣の尻尾のように見えるだろう。

鉱山の頂点付近は比較的傾斜がなだらかだ。と

はいえあるのは岩と砂ばかりで、採掘も鉦山中腹の坑道から行われている。踏み入る者はほとんどいない。――これまでは。

今、鉦山の頂点にはナトラ王国軍の本陣が設営されていた。

「いやしかし、壮観だな」

本営の端から山麓さんろくを見下ろしながらウェインは呟いた。

彼の目に映るのは、鉦山を取り囲むように布陣したマーデンの軍勢だ。その数、実に三万。

「五千対三万。普通に考えたら絶望的ね」  
隣に立つニームが息を吐く。五千というのは、この鉦

山に籠<sup>こ</sup>もっているナトラ側の兵力である。

もちろん籠もるに当たって物資を鉾山内部に蓄えるなど、準備は入念にしてあるが――それでも絶望的な兵力差だ。

だということのに、ウェインにもニニムにも悲壮な様子は一切<sup>いっさい</sup>無い。

「鉾山の表に二万五千、裏手に五千ってところか」  
「鉾山の裏は切り立ってとても登れないものね。  
それにしたって、裏の布陣は手抜きすぎに見えたけど」

「ま、そりゃそうだろう」

ウェインはお見通しとばかりに言った。

「俺らを皆殺しにすることが相手の目的じゃないしな。むしろ裏から逃げられるなら逃げてくれって思ってるさ」

そしてそれこそが、圧倒的な戦力を持つ敵軍の付け入る隙すきであることを、ウェインはしっかりと理解していた。

「二二ム、皆は？」

「集まってるわ」

「オーライ、それじゃ開戦前に最後の打ち合わせをするか」

そう言って、ウェインと二二ムは設置された天幕の一つに向かった。

「ドラーウッド將軍、布陣の方が整いました」  
「ご苦労」

ウェインたちナトラ軍が山から下界を見下ろす一方、鉦山を見上げているのがマーデン軍だ。

マーデンの財に物を言わせてかき集めた兵数は実に三万。マーデンの歴史上でも屈指の大軍を預かるのは、さしものドラーウッドといえど初めてのことだったが、彼の端正な横顔に緊張や不安といった感情は浮かんでいない。

むしろ今の彼が抱く感情は、哀れみに近いものだ。「この大軍を前にして、逃げださずに籠城とは

……愚おろかなことだ」

「そこは勇気があると褒ほめるといえるのでは？」

副官が擲や揄ゆするように応こたえるが、ドラーウッドは痛ましげに頭を振る。

「こんなもの、蛮勇とすら言えんよ。戦力差という人間ならば誰もが持っている物差しを手にしていないだけだ。まったく、獣のごとき無む知ち蒙もう昧まいならば、せめて獣らしく引き際程度は心得ていればよいものを。そうすれば、流れる血も減るといふのに」

「さすが將軍、敵に同情してやるとはお優しいことぞ」

「人と人の戦ではなく、三万の軍勢で獣を狩り立てるだけの作業でしかないとなれば、こうもなるさ」

ドラーウツドは鉾山の天辺に目をやった。

「苦しませぬよう速やかに仕留めてやろう。それがせめてもの慈悲だ」

「――予定通りだ」

ウェインは軍議の席につくと、真っ先にそう口にしました。

天幕の中にいるのはナトラ軍の指揮官たちだ。当然、ラークルマやハガルの姿もある。

彼らの間に動揺はない。ウェインの言葉が虚勢きよせいではないことを、この場にいる全員が知っていた。

「向こうの王宮で煽あおらせた甲斐かいがあつた。敵は間違まちがいなく短期決戦を狙ねらってる」

「大軍で威い圧あつし、我々が逃げるのならばそれでよし。逃げなければ、兵力差で一気に奪還する、ということですね」

「ああ。これなら勝ち目は十分にある」  
ウェインたちナトラ軍にとって最悪なのは、絞った兵力での耐久戦を仕掛けられることだ。

大軍を用意するのではなく、数千程度の兵で鉾山を警戒させ、その間、鉾山を起点としたナトラ

軍の補給や交易をひたすら妨害する。

未だに鉦山周辺にはマーデンの支配域が多く、鉦山は半ば孤立している形だ。鉦山を守るための兵力を維持し続けるのも楽ではない。真綿で首を締めようように追い詰められれば、先に音を上げるのはナトラ側だろう。

しかしマーデンはそれをしなかった。金鉦山という金脈にして命脈を敵国に握られているという不安が、その選択肢を取らせなかったのだ。

「三万の兵は相当無理して引っ張り出したのは間違いない。維持のために消費される資金は元より、国境の防衛もかなり手薄になってるはずだ。とな

ると、あの三万を保っていていられる時間は、そう長くない。恐らくは――一カ月が限度」

密偵などからもたらされた情報を統合しての結論だ。精度は高い。

そして一カ月防衛してマーデン軍を撤退させられれば、ナトラ軍は相手を撤退させたことで自尊心が満たされ、マーデン側は武力で取り返すのが難しいと認識を改めるだろう。

（その時こそ、二度目の講和のチャンス……！）

今度こそ逃すまい。

決意を胸に、ウェインは言った。

「行くぞお前たち。――泥沼の一カ月の始まりだ」



最初に動いたのは、当然というべきか、マーデ  
ン軍だった。

鉦山の表側には二つの山道がある。その三つ全てか  
ら同時にマーデン兵たちは駆け上がった。

もちろん全ての山道にはナトラ兵が詰めており、  
すぐさま剣戟けんげきの音が木霊こだまし始める。

「走れ！ 仲間の骸むくろを乗り越えてでも進むのだ！」  
「止めろ！ 奴らを道から蹴けり落とせ！」

互いの兵士の怒号と指揮官の檄げきが飛び交い、戦

場を熱気が包む。

緒戦しよせんの攻防は全くの互角だ。攻める側と守る側、両方の奮闘にょじつが如実に表れている。

「ほお、ナトラも意外にやるようぞ」

「ははは、死の淵に追いやられてまさしく必死なのでしよう」

「あの勢いがいつまで持つのか見ものですね」  
勝負は緒戦しよせんで圧勝すると考えていたマーデンの各指揮官たちは、予想と外れた光景にそんな感想を抱く。

もちろん彼らの余裕は崩れない。敵の奮戦など一時的なもの。ましてこちらの圧倒的兵力を見れば、

どうして勝利を不安視できざるものか。

（数刻としないうちに、山の三合目ぐらいまで奪えそうだな……）

王宮の方には一週間以内に落とすと確約してある。この様子では、半分以下ですむかもしれない。遠からず訪れる凱旋がいせんの時を思い、ドラーウッドは小さく笑った。

そしてドラーウッドの予想通り、兵士たちが戦場の空気に慣れ始めた頃、戦況に変化が生じた。

ただしそれは、ドラーウッドの予想を大いに裏切る形で。

「……なんだこれは」

マーデン兵が、押し返されつつあった。

「どうなっているのだ……」

山頂の端から下の戦場を覗のぞき見ながら、ペリントは困惑していた。

戦争にあたって、鉾山の民の非戦闘員はナトラ国へ避難した。残っているのは兵士として徴集された者たちだ。とはいえろくな戦闘訓練を受けていない彼らは、主に工兵として働いているが。

ペリントもまた、そんな彼らの纏まとめ役として現地に残り、こうして戦場の只中ただなかに立っているのだが――胸中には不安と疑問が渦巻いていた。

敵兵は三万。三万だ。それだけの兵力が攻めてくると聞いた時、ペリントは死を確信した。しかし元よりマーデンの統治下であつたなら、数年で死んでいたであろう身。王太子殿下の恩に報いるつもりで散るのも良い——そう思つて残つていた。思つていたのだが。

「なぜこちらが優勢でいられる……？」

戦況は予想に反し、山道を使つて攻めてくるマーデン兵を、山道の途中に築いた防御陣地を軸にしてナトラ兵が次々と撃退しているというものだった。

ペリントが戸惑いつつ下界を眺めていると、声

が届いた。

「その理由はいくつかある」  
ペリントはぎょっとして振り向いた。

「お、王太子殿下!?!」

「そのままでもいい」

慌ててひざまず跪こうとするペリントを手で制し、ウエ  
インは彼の隣に立った。

「まずは単純に兵の練度の違いがある。マーデン  
軍の後ろの方をしてみる。白っぽい一団があるだ  
ろ」

「は、はい。あれは……?」

「この軍を率いているドラークウッドの精兵だ。白

く見えるのは甲冑かっちゆうに光が反射してるからだな。対

して今、山麓で戦っているマーデン兵はどうだ？」

「……ろくな装備をしていませんね」

「その通り」

ウェインは頷いた。

「マーデン軍の大半は金でかき集められた農民だ。

ドラーウッドは精兵を出し惜しみ、訓練も受けて

ない農民をぶつけてきたわけだな。しかしこちら

の兵は帝国式の教練を受け、さらにマーデンを一

度打ち破って自信と自負を得ている。雑兵ぞうひょうごとき

がそうそう打ち破れるものではない」

さらに、とウェインは続けた。

「この時期は山頂から山麓さんろくに吹き降ろす風がよく吹いている。おかげでこちらの弓矢は風を搦つかんで敵軍の深部まで届くが、相手の弓矢は途中で落ちていく。山麓から見えにくい場所に防衛用の拠点や空堀からぼりをいくつも用意し、相手の攻め手を鈍にぶらせている。――だがな、何よりも重要なのはこの地形だ」

「地形ですか？」

「五千対三万。数字にすれば恐ろしいが、見てみる。いま戦ってる兵士の数はどれほどだ？」

言われてペリントははっと気づいた。三万の敵兵。しかしその実、大半が周りを囲んで突っ立っ

るだけだ。戦っている兵士は、せいぜい数百だろう。

「山道の幅は決して広くない。万の兵士を敷き詰めることなど到底不可能。結果として、五千と三万から数百人ずつ選出してぶっつけあってる形になる。笑えるだろうペリント、奴らがかき集めた兵士は万単位の無駄飯食むだめしらいいになってるわけだ」

「そうか……私たち鉋夫に山肌を削らせ、山道以外の山肌の傾斜を急にさせたのは、このためだったのですね？」

「そういうことだ。寸鉄すんてつを帯びない身軽な足ならともかく、剣や槍やりを抱えて登るのは辛い傾斜だ。よじ登ろうにも、上にはナトラの兵士が待っている。

奴らは山道を使わざるをえない」

「ですが、恐れながらマーデン兵が新たに道を敷設するということは……？」

「当分はしないだろうな」

ペリントの問いにウェインは頭を振る。

「山道が無ければそうしたただろう。あるいはもつと細く、少なければ自分たちで道を作ろうと考えたかもしれない。だが道は三本ある。戦えないわけではない。新たに作ろうとすれば時間もかかるし道具も必要だ」

ウェインはにっこりと笑った。

「だから手間を惜しむ。楽をしたがる。低きに流

れる。このまま力押しですませようと思っ  
てしまおう。――そう思わせるのが、俺の戦争だ」

「……」

ここにきてペリントはようやく理解する。

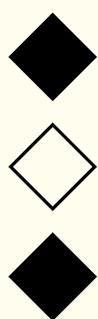
この少年はただ優しいだけの人間でなければ、民を愛するあまり玉砕するつもりでこの戦いくさに臨んだわけでもない。彼の脳裏のうりには余人の及ばぬ世界が広がり、そこには勝利への道筋があるのだと。

「さて、世間話はここまでだ。ペリント、例の件はどうだ？」

「あっ……ははっ！ 工事の方は完了し、いつでも利用できます」

「上出来だ」

ウェインの目が一点を見据える。それはマーデンの本陣。そこにいるはずの指揮官、ドラーウッド。「今頃いまごろ予定外のこといに悔しがつているんだろうが……もう少し、俺の手のひらで踊ってもらおう」



「——こんなバカげたことがあつていいのか！」

天幕の中にドラーウッドの怒声どろが響いた。

顔を俯うつむかせて押し黙るのは他の指揮官たちだ。

総指揮官であるドラーウッドの怒りのほこり矛先ぼこから逃

れようと、武張<sup>ぶ</sup>つた肉体を精一杯縮こまらせている。「三万対五千だぞ……！」  
 だというのに、なぜあんな山の一つを制圧できないのだ！」  
 開戦から、既に三日が経過していた。

しかしその間のマーデン軍の成果はほぼゼロと言って差し支えない有<sup>あり</sup>様だ。さま

調査の結果、ナトラ王国軍は山の一合目、二合目、三合目と節目ごとに主要な防衛用拠点を作っていた。そして鉱山内部に物資を大量に保管し、拠点を經由しながら素早く前線に補充させ、闘い続けるという形を取っている。

この拠点が固い。拠点の前には深い空堀が掘られ、

掘り出した土で壁を作っている。配備された兵士も精強そのもの。堀を駆け上がるうとするマーデ  
ン兵を巧みな連携で追いやり、疲労や負傷をすれ  
ばすぐさま後方の人員と入れ替わる。

マーデン側の準備の不足も響いた。いわばナ  
トラ軍は山を丸ごと城塞へと作り替えたわけだ  
が、マーデンが用意したのは野戦用の装備ばかりだ。  
城攻めには向いていない。

もちろん他に使える道はないか、防陣に隙は  
ないかなど、調べてはいるが——成果に結びつか  
ず、この体<sup>てい</sup>たらく。大量の物資は今も消費され続け、  
兵士は遅々として進まない攻略に士気を落としか

けている。

「おのれ蛮族どもが……！」

ドラーウッドの怒りは冷めやらない。蛮族と侮あなどっていた相手に、今のところ手玉に取られているのだ。怒りで覆い隠おおしているが、内心のプライドは大いに傷ついている。

そんな時、天幕に伝令が飛び込んだ。

「失礼します！」

「何事だ！ 今は軍議の最中だぞ！」

ドラーウッドが苛立いらだち混じりに睨にらみつけると、伝令は体を震わせながら言った。

「も、申し訳ありません。ですが、周辺調査をし

ていた兵から重要な報告が……」

そう言われては矛盾<sup>ほこ</sup>を収めざるをない。ドラーウツドは軽く舌打ちし、伝令に先を促した。

「報告とはなんだ」

「はっ……実は、鉦山内部に繋がっている可能性のある、古い坑道<sup>こうどう</sup>を発見したとのことですよ」

「なにい!？」

指揮官たちの間にざわめきがざざ波のように広がった。

「詳しく話せ。場所はどこだ!？」

「おい、鉦山周辺の地図を持ってこい!」

慌ただしく天幕の中に地図が広げられる。

地図に記載されたのは主体となる鉾山と、そこから弧を描いて伸びる尾根。伝令が指示したのは、尾根の根元付近だった。

「尾根のこの部分に洞窟どうくつを発見し、中を調査したところ、明らかに人の手によるものと思われる坑道があったそうです」

「洞窟の部分は自然のものか？」

「はい。これは発見した兵からの所見しよけんにすぎませんが、坑道内部を掘り進めるうちに洞窟に到達し、破棄したのではないかとのことですよ」

「坑道がどこに続いているかは、まだ確認していないのだな？」

「相当長いものではあるようですが、まだです。まずはこちらの判断を仰ぐべきと」  
 伝令はそう締めくくり、場にいる指揮官たちは顔を見合わせた。

苦境の中で降って湧いた、敵軍の心臓部しんぞうぶへ届く可能性のある道。ここでの対応が重要な岐路になるとこの場の全員が確信した。

「ドラーウッド將軍、一刻も早く調査をしましょう。坑道が本当に内部へ続いているのならば一気に戦局を変えられますぞ」

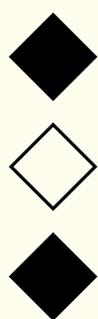
「調査などまどろっこしいことをせず、二千ほど直接送りこめばよいのでは？ 幸い——とは言い

にくいですが、後方で待機してるだけの兵士は数多いのですし。空振りならば、兵士を戻せばいいだけでしよう」

「あまり大量の兵を動かしては敵に気取けどられる可能性もあるのでは？ せっかくの不意打ちのチャンス逃しかねません」

指揮官たちが次々と意見を交わし、それらを耳にしながらか黙然もくねんとしていたドラウツドは、やがて小さく呟いた。

「――よし、決めたぞ」



開戦から一週間が経過した。

戦場には微妙な倦怠感けんたいが漂いただよつつあった。

防御を抜けないマーデン軍と、城塞化した鉾山から出られないナトラ軍。両軍の衝突は三日目をピークに膠着こうちやくし、次第に睨み合う時間が増えていった。

この日も山道の入り口付近で散発的にぶつかり合うだけで日が暮れ、両軍ともに野営の準備に入り、見張りを残して多くの兵士たちは眠りについた。動きがあったのは、深夜だ。

場所はマーデン軍が発見した尾根の洞窟である。

洞窟周辺は木々に囲まれ、見通しが悪い。月が雲でかくれていることも相まって、不気味なほど闇が深い。洞窟の内部にいたっては、その闇を煮詰めてぶちまけたかのごとき有様だ。

しかし今、その洞窟の中からにじみ出るようにして何かの影が現れた。

一つではない。二つ、三つと音もなく影は続く。そして影は瞬く間に十数にまで膨れ上がり――

「――火を灯せ！」

突如として洞窟周辺を松明の明かりが照らし出した。浮かび上がるのは洞窟の前で驚きに目を見張る

十数人の人間たちと、松明を手にし、それを取り  
囲むように布陣した百人以上のマーデン兵である。

「罨わなだ！ 洞窟に戻れ！」

洞窟の前の集団の一人が叫んだ。

「追え！ 一人も逃がすな！」

負けじと取り囲んでいた者たちの中の誰かが叫  
び、二つの集団は片や追われる者、片や追う者と  
して同時に動いた。

（ドラークウッド將軍の読み通りだ……！）

自らも追走劇に参加しながら会心かいしんの笑みを浮か  
べるのは、この指揮を任された指揮官であるア  
ングリルだ。

戦争開始から三日目。ここの洞窟の存在を知つたドラークはこう言った。

「まず、洞窟の坑道が本当に内部まで繋がっているかは解らない。だが、もしも繋がっているのなら、ナトラ軍がその坑道を知らないということはずなないだろう」

「……確かにその通りでしょうな」

ナトラ軍は鉋山を占拠した際に、当然内部の調査もしているだろう。さらに鉋山を利用していた鉋夫も抱えているのだ。気づかない方がおかしい。

「となればナトラ軍としての対処は二つだ。心臓部への敵の突入を許しかねない道を埋めるか、利

用するため残しておくか。私は後者を選んだと確信する」

「それはなぜですか？」

「坑道はいざという時の脱出経路になる上に、我が軍に不意打ちを仕掛けるため密かに兵を出すことも可能だからだ。我が軍に発見されたと分かれば埋めようとするだろうが、そうでなければ手札の一つとして残しておくだろう」

「では如何致しますか？ やはりすぐさま兵を送り、中に突入させるべきでしょうか？」

「いや、ここは一つ、獣を畏にかけてやろう」

ドラーウッドは歪んだ笑みを浮かべる。彼の胸

中には、蛮族と侮あなどつていた者たちに手痛い反撃を食らったことに対する屈辱があり、ナトラ軍を毘なぐさにかけることで、傷ついたプライドを慰なぐさめようとする思いが生まれていた。

しかしそのような思いは他の指揮官も大なり小なり抱いだいていたため、誰一人としてドラーウッドが些いささかか以上に冷静を欠ひかいていることを指摘できなかつた。

「これよりしばらく、我が軍は戦いを流し膠着させる」

「よ、よろしいのですか？」

「構わん。そして我らが動かなくなれば、ナト

ラの蛮族どもは好機と考え、さらにかき乱そうと  
してくるだろう。その時、本当に内部と繋がって  
いるのならば、あの洞窟を利用する可能性は高い。

……アングリル！」

「はっ！」

アングリルはすぐさま敬礼をした。

「お前はこれより、五百の兵を率いて洞窟の周辺  
に兵を潜ませろ。そして奴らが洞窟から這い出し  
てくれば、そやつらを殺し、一いっき気呵か成せいに内部まで  
突入するのだ。今、奴らが我らの攻撃を跳ね返し  
ているのは山道という地の利があつてのこと、平  
地で戦えば恐れるに足りん。そして寡兵かへいの奴らに

とつて、兵士が数十人死ぬだけでも相当な痛手だ」  
 「お任せください！ 洞窟から這い出してきた愚かな犬おろ  
 どもを、必ずや血祭りにあげてみせます！」

かくしてアングリルは洞窟周辺に身を潜ませ、  
 それから四日後の夜の今、こうして洞窟に逃げ込  
 んだナトラ兵を追いかけていた。

「走れ走れ！ 決して逃がすな！」

兵士に檄を飛ばしながら、アングリルもまた松  
 明を片手に薄暗い洞窟の中を駆け抜ける。

洞窟の坑道は内部に通じている。確定だ。後は  
 兵士たちと共に内部へ突入し、鉾山の内側からナ  
 トラ軍を食い破ればいい。第一功は間違いなく自

分になるだろう。

（しかし、逃げ足の速いことだ）

内心で嘲笑ちやうしやうと感心をアングリルは抱く。

奴らが洞窟から這い出てきた際に、完全に虚きよを衝ついたと思った。しかし奴らは素早く轉身して洞窟の中へ逃げ込み、一人も討うち取とれていない。

（何人かで足止めして、その間に内部に危険を知らせるべきだろうに、自らの命欲しさに一目散に逃げだすとは所詮しょせんは獣だな）

しかし獣だけあって足の速さは本物だ。相手はろくな明かりもないのに、洞窟の中を転がりもせず奥へ奥へと向かっていく。

(――む、あれは)

アングリルの目が捉えたのは洞窟の深奥しんおうに開いた坑道だ。その周囲にだけかがり火が焚たかれており、ナトラ兵たちは一目散に坑道へ逃げ込んでいく。

「あの坑道へ逃げたぞ！ 追え！」

叫びつつも、アングリルは僅かに息が切れてきたのを感じる。

だが仕方のないことだ。剣を持ち、鎧よろいを着こんで全力疾走すればこうもなる。周りの兵たちも同じような有様だ。

(……あれ?)

坑道の入り口に差し掛かったところで、アング

リルは不意に思った。

敵は、どうだった？

自分たちは全員が剣と鎧を纏う完全装備である。当然だ。敵と戦いに来たのだから。

しかし、前方を行くナトラ兵はどうだ。

（……身に着けてない。何も）

坑道の中に入り、ナトラ兵を追いかける。追わなくてはいけない。そのためにきたのだ。だが待て。何かがおかしい。坑道を駆け抜けながらアングリルは自分の中で警鐘けいしようが鳴るのを感じた。

武器も防具も身に着けていない敵。虚を衝いたはずが華麗に轉身し逃げ出した敵。数十キログラ

ムもの重量差があるのに、未だ<sup>いま</sup>につかず離れずの距離にいる敵。

(もしかして)

追いかける。追いかけながら後ろを見る。何十人とついてくる兵士たち。決して広くはない坑道。停止と轉身など今更命じられるはずもない。

(俺、誘いこまれ)

次の瞬間、頭上で轟音<sup>ごうおん</sup>が鳴り響き、衝撃と共にアングリルの意識は闇に消えた。



「――失敗した、だと？」

伝令からもたらされた報告に、ドラーウッドの顔は色を失った。

「はっ……ご指示通り洞窟周辺で待機していたところ、洞窟より現れた十数人のナトラ兵と思しき者たちを発見しました。そしてアングリル隊長の指揮の下、洞窟に逃げたその者たちを追跡し、洞窟内部の坑道へ至ったのですが……」

「ですが、なんだ。何が起きた！」

「……落盤です。坑道が崩れ、先行していたアングリル隊長共々、百人余りの兵士たちが押し潰されました」

「……」

ドラーウッドは唇を震わせ、持っていた木製の腕を握りつぶした。

「おのれ——おのれおのれおのれえー！」  
椅子を蹴り上げ拳を叩きつけ、なおドラーウッドの怒りは収まらない。

「神の教えを解さぬ犬畜生の分際で、よくも私をここまで虚仮に……！」

「しよ、將軍、どうか気を落ち着かせてください」  
「そ、そうですね。確かにアングリルを失ったのは痛手です。ですが被害としては、たかが百。万の兵の内の百人にすぎません」

指揮官たちの言い分にも一理あつた。開戦から多少死者や負傷者が出たものの、戦える兵士はまだ余裕で二万以上だ。そこから百人削れたとしても、大勢には響かない。

「きつと、ナトラの連中はしてやったりと祝宴でも開いているでしょう。しかしそんなものは奴らの勘違いにすぎません。百人で奴らの逃げ道を塞ふさいだと思えば、むしろ勝つたのは我らの方です」

まくしたてるように言葉を並べられ、ドラーウツドもようやく落ち着きを取り戻す。大きく肺の中の息を吐きだすと、倒れた椅子を戻してかけ直した。

「……そうだな、お前たちの言う通りだ。百人。たった百人だ」

そして伝令へ目を向ける。

「落盤の復旧は可能そうなのか？」

「報告では、一、二カ月はかかるものと」

「ならば此度こたびの戦争では死んだ道も同然だな……」

視線を天幕の上へ。その先にある鉾山の山頂を睨みつける。

「せいぜい浮かれている、蛮族ども。この程度の傷、我が軍にはなんら影響はない……！」

「——あるんだなこれが」

奇しくものその頃の山頂の天幕にて、ウェインはそう笑った。

「ほんとに？　だって三万の中でたかが百人よ？」  
問いかけは二二ムのものだ。一人きりであるがゆえ、その口調は砕けている。

「二二ムの言う通り、兵力という意味じゃマーデンに与えられた被害は軽微だ。ギリギリまで引き付けて落盤を起こしたとはいえ、所詮は狭い坑道だしな。鉦夫たちは上手うまく仕掛けてくれたけど、あの罫でこれ以上の成果は望めなかつただらう」

でもな、とウェインは続ける。  
「そもそも今回の狙いは兵じゃないんだよ」

二二ムは首を傾げた。

「兵じゃないなら何を狙ったのよ？」

するとウェインは親指で自らの胸を軽く叩いた。

「軍を御する将の心。俺が狙い撃ちしたのは、そこだ」

思い当たることがあったのか、二二ムは得心したような顔になった。

「相手の総大将について入念に調べさせたのは、そのためだったのね」

「ああ。かいつまんでドラーウツドのことを説明するとな、こいつは外来派のエリートで、レベティア教に傾倒してる。当然、ナトラ王国なんて蛮

族共の集まりだと思ってるだろう」

「……だというのに、開戦から鉦山の攻略は遅々として進まずにいるとなれば、相当なストレスでしようね」

「そこに舞い込んだ、鉦山内部へ続く坑道の情報だ。挽回ばんかいのチャンス。だがドラーウツドは欲を出した。ただ兵を差し向けるだけで満足せず、罨を張って追い詰めることで自分が蛮族よりも格上であると証明しようとした」

「結果、さらなる屈辱を味わわされたってわけね」  
「そういうことだ」

ウェインは手元の机に広がる地図を見る。ずら

りと並ぶのは敵兵の駒こま。対して鉾山に密集したこちらの駒の数はあまりに少ない。

「五千の兵で三万を倒す術すべは俺にはない」

だが、とウェインは言った。

「三万の兵の後ろにいる指揮官なら、俺は狙える」  
ウェインの指が、敵の駒の一番奥にある、本陣を示す駒を搦んだ。

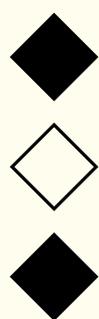
「心の傷は深く新しいほどに人の判断を惑わせる。  
ドラーウッドが傷つけば傷つくほど、マーデン軍の動きは鈍り、俺たちナトラ側の望む展開へと転がるってわけだ」

駒を弄ぶ主君を見ながら、ニームは肩をすくめた。

「前から思ってたけど、ウェインって結構性格悪いわよね」

ウェインはにっと笑った。

「実を言おうと、それが傲慢なんだ」



「進め進めえー！」

「今日こそ目障りなその陣地を落とすのだ！」

「おおおおおおっー！」

翌日より、マーデン軍は一転して苛烈かれつな攻勢を始めた。

先日の損失など何の痛痒つじょうもないと主張するかの  
 ように、数に物を言わせてひたすら圧力をかけ続  
 ける戦術は、シンプルであるがゆえに破りにくい。  
 何度跳ねのけようとも尽きない敵の攻撃に、さし  
 ものナトラ兵にも被害が広がる。

そして数日後、これ以上は支え切れぬと、三本  
 の山道の一合目付近の防陣をナトラ兵は破棄。上  
 方へと兵を退ける。

この報告にはしかめ面をしてばかりいたドラ  
 ウッドも笑みを浮かべ、マーデン兵の方もようや  
 く手ごたえを感じ、全軍に安堵あんどが広がった。

——そして、その隙を見逃すウェインではなか

った。

「ラークルム」

「はっ」

月の浮かぶ深夜、山頂にてウェインとラークルムは立ち並ぶ。

眼下には寝静まるマーデン軍。夜警は立てているが、そこには確かな油断を感じ取れる。だが無理もない。大軍で包囲しているのは彼らであり、これまでも夜襲を仕掛けたことはあっても仕掛けられたことはない。まして今宵こよいは、ようやく相手に一矢報いっしいることのできた気分のいい夜だ。農民

主体の軍では、気が緩むゆるものも当然だろう。

だからこそウェインはラークルムに言った。

「派手にやれ。ただし、先のポルタ荒原こうげんの時みに遊ぶなよ」

「お任せあれ」

ラークルムは力強く頷き、傍かたわらの馬に飛び乗った。

馬は事前に鉾山の天辺に引き上げられており、ラークルムの背後には馬に乗った兵士たちがおよそ三十騎、出撃の時を待っていた。

「では始めるぞ。——総員、私に続けえ！」

ラークルムの号令と共に、三十騎の騎馬が一斉に夜の山の斜面を駆け降りた。

馬で素早く山を下りて、ありつたけの松明で敵の天幕に火をつけて回り、捕まらぬよう移動し続けて火を広げる。

ラークルマ隊がウェインから下された指示はそれだけだった。

だが同時に、指示を実行するためにもたらされた情報はそんなものではなかった。

「この一週間、敵の動きを観察して判明したこと  
を今から教える」

夜の警邏けいらの配置と巡回範囲。狙い目である練度が低い部隊が休んでいる場所。風向きから考えた

火の広がりに方の予測。それらに伴う侵入、進行、脱出のルート。

地図を広げ、駒を置き、ウェインの口から精緻せいちに語られるそれらを耳にして、ラークルムは感嘆を隠せない。

ウェインの口くちにしていることは、時間をかけてマーデン軍を俯瞰ふかんし、検証し続けていれば解ることだ。しかしそれができぬ人間がどれほどいるのか。

さらにウェインは開戦の前から、馬でこの鉾山を駆け降りる訓練をさせていた。その頃から今の地図を頭の中に引いていたのだ。

「計画は以上だ。質問はあるか？」

あるはずがない。

抱くのは、この作戦は成功するという確信だけだ。  
——そして今。

混乱の広がるマーデン軍の中を、三十騎のナトラ兵が駆け抜けていた。

「なんだ、何が起きてる!?」「寝てる奴を起こして火を消せ! どんどん燃え移るぞ!」「騎馬隊だ! 騎馬隊が火を投げたのを見た!」「どこだ!」  
そいつらはどこに行つた!？」

怒号と悲鳴がひっきりなしにラークルムの周囲を飛び交い続ける。

だが届くのはそれだけだ。マーデン兵が混乱か

ら立ち直り、弓や剣を構え、ラークルマたちに照準を合わせる時には、既に彼らは遠く離れた場所に駆け抜けている。

「隊長、笑えるぐらい作戦がハマりましたね！」  
 ラークルマに向かって、後方から隊員の弾んだ声が届く。

状況を見れば順調であることに疑いはなかった。山を駆け降りた部隊は、相手が対応する前にマーデン兵たちが眠る野営地に突入。誰にも阻はばまれることなく火を広げ続けている。

「はは、見るよマーデンの連中。武器も持たずに右往左往してるぜ」

「おかげで我らは素通りだ。奴らのボンクラぶりに感謝しなくてはな」

作戦が上手く行っているゆえか、隊員たちの顔には余裕がある。

しかし彼らに反してラークルマは気を張りつめていた。

いわばマーデン軍という名の静かな海に飛び込み、波を荒立たせたこの行為が順調なのは、ひとえにウェインのもたらした海流の情報があるからこそだ。しかしこちらが荒立たせたことで海流には大きな変化のうねりが生じるだろう。

三万の海からすれば三十の部隊など小石でしか

ない。海流の変化を読み間違えれば一瞬にして粉砕されるのは必至だ。

もっとも、だからこそ隊長に選ばれたのが、このラークルマなのだが。

「――左方転回！」

ラークルマの指示に従い、騎馬隊は一斉に左側へと進路を切る。先ほどの進行方向にあった小高い丘を側面から見れば、その裏側では百人以上のマーデン兵士たちが混乱から立ち直るべく、隊列を組もうとしていた。もしもあのまま突っ込んでいれば、足を止められていたかもしれない。「さすがラークルマ隊長、鼻が利ききますな」

「殿下の完璧な計画に、私の不手際で泥を塗れるものか」

すげなく答えた後、ラークルマは呟いた。

「……そろそろ時間か」

彼の言葉に呼応するかのようになり、鉦山の方から不気味な地鳴りが届いた。

「よし、総員脱出陣形！」

馬の脚には限界がある。マーデン軍を一通り混乱させた後、完全に脚が止まる前に脱出しなくてはならない。その合図がこの地鳴りだった。もつとも、この地鳴りには合図以外の意味もあるのだが、それはラークルマたちとは別の軸で動いている作

戦である。

「陣形を乱すな！ 一気に山麓まで戻るぞ！」

「了解！」

一糸乱れぬ動きをもつて、ラークルマたちは鉦山へ手綱たづなを向けた。

騒ぎの気配を感じたドラーウッドは、すぐさま仮眠から跳ね起きた。

傍に立てかけてあった剣を手に取り、天幕を飛び出す。その彼の目に映ったのは、山麓付近にくつも上がっている火の手だった。

「將軍！ 敵襲です！」

目を見張るドラーウツドの元に副官の男が走り寄る。

「今しがた、山頂よりナトラ軍の騎馬が駆け降り、我が軍の野営地に火をつけて回っていると報告が！」

「なにい!？」

断崖のごとき山の斜面を夜に馬で駆け降りるなど、正気の沙汰さたではない。しかし奴らはそれをやり、こちらを炎に巻いているというのだ。

「敵の数は!？」

「わ、解りません！ 情報が錯綜さくそうしており、百騎以下とも、数百騎はいたとも！」

馬を鉾山に隠していたとするのならば、数百騎はありえない。せいぜいが百騎。ドラーウッドはすぐさまそう判断し次の疑問に移る。

「ならばそやつらの位置はどこだ！」

「そちらも不明です！ 火の手に煽られ各所で混乱が広がりに、敵を補足するどころか味方の同士討ちも始まっています！」

「ぐっ……！」

鮮やかな——鮮やかすぎる手並み。まずは混乱を収めなくてはいけないが、どこから手をつければいいのか。

脳裏に逡巡しゅんじゆんがよぎるドラーウッド。それをあざ

笑うかののように、さらなる事態が舞い込んだ。

「――な、なんだ!？」

音だ。何か大きな音が鳴っている。

マーデン軍が混乱と喧騒けんそうに包まれる中で、それでもなお届く異音。

鉦山から響いているその音は、何か大きな質量が山を駆け降りている音のようぞ。

まさか、という思いがドラーウッドを貫いた。

(全軍で駆け降りているのか……!?)

まずは騎馬でこちらの陣を素早くかき回し、次に主力で混乱する兵を討ち取る。そういう狙いなのではないかとドラーウッドは予見し、すぐさま

頭を振る。

（馬鹿な！ 混乱しているとはいえこちらは三万だぞ！ 五千で撃ち破れる数ではないー！）

しかし事実として今、大軍が降りている音がする。ならば何か狙いがあるはずだ。五千の兵で狙うもの、狙うべき価値のもの、それは――

（――本陣か!?）

軍そのものは無理だとしても、本陣に狙いを絞ったならば？

混乱しているマーデン兵の中を一気呵成に駆け抜け、指揮官の首を取ろうとするのならば？

（不可能……ではない！）

全てはこの場で導き出した推測でしかない。しかしそれを深く検証する時間がない。

ドラーウツドは声を張り上げた。

「近場の全部隊をこの本陣に集めて防御陣形を造らせろ！ 離れた場所の陣営もその場で防御陣形を構築して待機！ 敵を見つけてもまずは集まることを優先させろ！」

「は、はいっ！」

副官が素早く伝令に指示を伝え、各方面に散らせていく。

ドラーウツドもまた近隣の兵士に防御の陣形を取るように指示しながら、ふんぬ憤怒のまなざし眼差しを鉾山へ向

けた。

「舐<sup>な</sup>めるな蛮族ども。私の首、そう簡単には取らせんぞ……！」

それからマードン軍の動きは迅速<sup>じんそく</sup>と言えた。本陣を鉄壁の防陣<sup>ぼうじん</sup>で固め、敵を待つ準備を整える。その頃には地鳴りは既に止んでいた。

敵は何をしているのだろうか。攻めあぐねているのか、密かに移動しているのか。夜闇の中でその全容を知ることにはできない。緊張だけが軍の中に高まっていく。

しかしやがて空が白み始めた時、ドラーウッドの顔に衝撃が走った。

「馬鹿な……！」

ナトラ軍は山から下りてなどいなかった。

山麓に転がるのは大量の岩や丸太などだ。事前に山頂に引き上げておいたあれらを転がすことで、さも大量の兵が移動しているように錯覚させたのだ。

では何のためにそんなことをしたのか？

答えは山道の一合目にある防御用の陣地だ。マ―デン軍が苦心して手にしたそこを、再びナトラ兵が固めていたのだ。

（……敵の襲撃に備えて私は本陣を固め、間に合わない場所は独自に防御陣形を取るよう指示し

た。しかしその結果それぞれの陣が孤立し、周囲と連携が取れなくなつた……！」

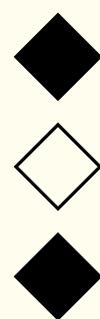
それをナトラは狙つたのだ。野営地にいた部隊が次々と固まる中、山道の陣地にいた兵士を孤立させることを。こちらが必死に防衛準備を整えている間に、ナトラ側は静かに陣地を奪い返し、目標を達成していたのだ。

「おのれ……！」

あの陣地がどれだけ固いか、手に入れるためにどれだけ苦心したかはマーデン兵もよく知つていゝる。ゆえに、奪われた効果は絶大だ。寝る事も許されずに一晩中気を張りつめ、ようやく朝を迎え



としかできなかつた。



気づけば、戦争開始から半月がすぎていた。

先の夜襲によるマーデン軍の被害は死者が七百人、負傷者は二千人に及んだ。さらに脱走兵も続出し、ナトラ軍との戦いによる戦死者も含めれば、兵の数は二万三千人ほどに落ち込んでいた。

もちろんナトラ軍とて無傷ではない。五千いた兵は今や三千だ。全体的な防御の層も薄くなっている。

しかし結果を見れば奮戦しているのは明らかであり、それを理解しているがゆえに、兵士たちの士気も未だに高い。その点はマーデン兵たちとは雲泥うんでいの差だ。

そんな意気軒昂いきけんこうなナトラ軍の天幕にて、ウェインは資料と睨めっこをしていた。

「食料は大丈夫、資材は……さすがに目減りしたけど、まだいけるな」

鉱山の各方面から上がってくる報告は、現状がウェインが想定していたそれよりも良好であることを示している。

「いやー、つれーわー！ 予定より上手く行きす

ぎてつれーわー！」

そんな余裕をひけらかすウェインに、傍らの二ムは意外にも同意を示した。

「順調なのは良いことね。それに比べてマーデンの方は最近は攻め手もだいたいぶ緩んでるけど、このまま撤退するのかしら？」

二二ムの言葉にウェインは頭を振った。

「まさか、それはねーよ。開戦から一週間以内だつたらあつたかもだけど、もう無理だ、奴らの損害は手柄ナシじゃ到底飲み込めないほどに膨らんでる」

膨らませたのは俺だけど、とウェインは上機嫌

に笑う。

「ごり押しじゃ無理だとようやく気づいて、準備中ってところだろう。終わり次第一大攻勢があるだろうな」

「準備って言うとは……攻城兵器とか？」

「ああ、ほとんど野戦装備だしなあいつら。今頃梯子だの投石器だのかき集めてるんじゃないか？」

「さすがに投石機は山攻めに持ってきても使えないでしょ」

「追いつめられると当たり前のことが解らなくなるもんさ」

そして準備が終わった後の攻勢を凌しのげば、いよ

いよもって相手の目論見は暗礁に乗り上げることになる。そこに和睦の可能性は芽生えるはずだ。肝心の凌げるかどうかだが、布石は打ってある。「俺の予定に狂いはない。あと半月でこの籠城生活とはおさらばだ」

自信に満ち溢れたウェインの様子に、半信半疑ながらもニニムは応じる。「だとしたら助かるわね。さすがに山から見る景色にも飽きてきたわ」

「言えてるな。俺もそろそろ王宮で羽を伸ばしたいところだ」

「湯浴みとかもね。ここじゃ贅沢にお湯を使うわ

けにはいかないもの」

戦場、とくに籠城する側の水は貴重だ。できるとしても時折体を拭くぐらいで、湯を張った浴槽よくそうに浸かるなどはとてもではないが籠城中にできることではない。

ニニムとて例外ではなく、それゆえに、ああ、とウェインは思い至った。

「最近微妙に俺との距離が開いてると思ったたら匂においを気にして痛いてえ!？」

ニニムが指で弾いた机上の駒が、ウェインの額に命中した。

「そういうことは□にしないの」

「ぐおおおおお……こ、これで勝ったと思うなよ」

「いや勝ち負けじゃないでしょ」

そんな軽口を互いに投げ合っていると、天幕の外から気配が届いた。

「殿下、失礼します」

現れたのはラークルムだ。ウェインとニニムは居い住ずまいを正して彼を迎える。

「どうした、何か起きたか？」

「はっ。マーデン軍から使者が送られてきました」

「使者だと？」

ウェインは眉まゆをしかめた。

使者を送るといふことはいちいちと話し合う意思

を持つということであり、内心ではマーデン側との講和を望んでいるウェインにとっては歓迎するべきことだ。

が、タイミングが解<sup>げ</sup>せない。マーデンは一大攻勢に向けて力を蓄えている時期であり、講和の是非はその攻勢が終わった後に考えることだろう。

（俺が想像するよりもマーデンが追い詰められている……これは無い。となると攻勢に向けてこちらを攪<sup>かく</sup>乱<sup>らん</sup>するためか、あるいは……）

素早く思<sup>し</sup>慮<sup>り</sup>を巡<sup>し</sup>らせつつウェインは指示を飛ばす。

「解った、とにかく会おう。二二ム、急いで会談

の場所をセットしてくれ。場所はそうだな……鉦山中腹辺りでいいだろう。ラーケルムは周辺の警戒を強めるように指示して回れ。俺が対応してる間に向こうが動くかもしねん」

「かしこまりました」

「お任せください！」

二二ムとラーケルムは即座に天幕を出て行った。そして会談の準備が整うまでの間、ウェインは思考の続きをする。

（……あるいは、本国に対するポーズ。既にマ―デン側の予定は破綻している。なぜ未だに鉦山が取れていないのかと、王宮じゃフシユターレが

激怒<sup>げきど</sup>してるだろう。家臣たちも不安を抱き始めているはずだ。その中の誰かが、今からでも講和しようと言いだした、か)

その家臣がドラーウッドにとって無視できない相手ならば、形だけでも使者を出してくるのはおかしくない。

もちろんこれらはウェインの推測であり、本当にそうなのかは解らない。しかし予定よりも長引いてるこの戦争で、中央からまだ決着はつかないのかとプレッシャーをかけられているのは間違いないだろう。

「そろそろ尻<sup>しり</sup>に火がついてきたんじゃないか？

ドラーウツド」

対戦相手の苦悩を思い、ウェインは小さく喉のどを鳴らした。

結論から言えば、ウェインの予想は的を射ていた。

「將軍、またも王宮から使者が」

曇くもり顔で告げる指揮官に、ドラーウツドは舌打ちしながら言った。

「適当にあしらって追い返せ。今は王宮の相手をしている場合ではないのだ」

「しかし將軍、恐れながらこれ以上使者を無下むげに扱えば、王宮の方も何かしらの対処をしてくるも

のかと……」

「現在集めている攻城兵器についても、□を挟まれるやもしれません」

「っ……っ……」

ドラーウッドは焦燥感しょうそうを隠そうともせず齒は噛がみする。

ここがウェインとドラーウッドの違ちがうところだ。ナトラ王国における王太子にして摂政せつしょうであるウェインは、実質的に現ナトラの指導者だ。たとえ明白な結果が伴ともなわなくてもごり押しできるだけの権限を持っている。

対してドラーウッドは軍の指揮官ではあるが、

それは王より委任されたものにすぎない。王の機嫌を損なえばクビは職務的にも物理的にも容易に吹き飛んでしまう。それを防ぐためには、王やその周囲の重臣たちに解りやすい結果を示し続ける必要がある。

だが、それができていない。一週間で鉦山を落とす予定がもう半月。攻略も遅々として進んでおらず、攻城兵器という新たな戦力の要求までする始末だ。

どうなっているのかと使者が飛ばされるのはいわば必然。最初はどうにか誤魔化して追いついていたが、さすがに限界が迫りつつある。後ろ盾で

ある外<sup>ス</sup>来<sup>テ</sup>派<sup>ラ</sup>のホロヌイエ大臣の責任を問う声も上がっているらしい。

「……使者は、なんと？」

深く息を吐き、静かに指揮官に問いかける。

「はっ。一刻も早く鉾山を掌握しろと。そのためには……その、ナトラ軍との講和も考慮に入れるべしとも」

するといきり立ったのは他の指揮官たちだ。

「馬鹿な！ 今更講和だと!?!」

「ありえん！ 奴らのためにどれほど仲間が血を流したと思っっている！」

「ドラーウッド將軍、宮廷の雀<sup>すずめ</sup>どもなど無視して

攻勢の準備を進めましょう！」

指揮官たちが口々に講和を拒絶するのは、講和で終わらせるとプライドが許さないという感情もあるが、ろくに戦功をあげられていないことへの焦燥もある。今の段階で講和などしては、恩賞などまるで期待できない。

「……」

もちろんドラードとてそれは同じだ。

同じではある、が。

「いいだろう、ナトラ軍に向けて使者を立てる」

「しよ、將軍!？」

「ですがそれは！」

「落ち着け。あくまで形だけだ。使者を出してナトラ軍に拒絶されたとなれば面目めんもくは立つ。その間に準備を整え、武力で鉦山を奪い返す。これならば問題あるまい」

これには指揮官たちも得心したらしく、一様に頷いた。

「ローガン、使者にはお前が行け」

名指しされたのはドラーウツドの副官である。間違っても講和を成立させないためにも、ここには信用する手持ちの人材を使うしかない。

「くれぐれも奴らにはへつらうな。奴らが徹底抗戦を望むようにしろ」

「蛮族を煽<sup>あお</sup>るだけ煽<sup>あお</sup>ればいいわけですな」

「そうだ。ただし怒らせすぎて殺されるようなへマはするなよ」

「承りました」

かくして講和の条件の検討<sup>けんとう</sup>などをすませ、数時間後、ナトラ軍が籠城する鉦山に使者は向かうこととなつたのである。

会談の場に現れた使者を一目見て、ああこれは講和する気ないな、とニームは察した。

ローガンと名乗ったその男は、テーブルの向こう側に座るのが王太子であるというのに、尊大な

態度を隠そうともせず言い放った。

「この交渉において、私の言葉は総指揮を預かる  
ドラーウッド將軍の言葉と思つてもらつて相違そういあ  
りませぬ。その上でウェイン殿下、ここに住み着  
いた貴殿の飼い犬と、それを操あやつる手腕は見事なも  
のですな。ドラーウッド將軍も高く評価しておら  
れましたぞ」

これには警備をしていた兵士たちのボルテージ  
が一瞬にして最高潮になった。ウェインが手で制  
しなければ、ローガンは串刺しになつていたこと  
だろう。

「それでローガン殿、本日は何用で参られたのか

な？ まさか我らを挑発するためだけに山を登ってきたわけではあるまい？」

「無論、そのような無益なことに時間を費やす風習は、マーデンにはありませぬ。私がここに来たのは、講和を結ぶために他なりませぬ」  
などと口にしていたが、当然のごとく突きつけてきた講和の条件は馬鹿げたものだ。

鉦山からの即時撤退、武器の放棄、鉦山住民の返還、さらに不当に鉦山を占拠していたことに対する賠償金の請求。吞ませる気など一切ないというものが鮮明に伝わってくる。

「いかがかな？ ウェイン殿下」

「残念だが、その条件では講和は望めないな」  
当然そのような話になった。

「我らとしては、最大限の譲歩をしているつもり  
ですがな。これ以上戦争を続ければ、ご自分の首  
と胴が分かれたまま祖国へ帰ることになりかねま  
せぬぞ？」

「恐ろしい話だ。しかしローガン殿、私の予想では私は  
意気揚々と国に帰れる気がするのだよ」

「なるほど、やはり貴殿の周りには犬しかおらぬ  
ようだ。老婆心ながら忠告させて頂くが、殿下は  
自らの間違いを正してくれる人間を傍におくべき  
かと」

ローガンは席を立った。会談はご破算はさんで終了と  
いうことのようにうだ。

(全く、時間の無駄だったわね)

ニニムは内心でため息をつきつつ、会談場所の  
片づけの手順を脳裏で描き始める。

しかしそこで予想外のことが起こった。ローガ  
ンが足を止めて振り向いたかと思えば、ニニムを  
見やりながら吐き捨てたのだ。

「特に、そのこの灰被はいかぶりは疾とく打ち捨てるべきでし  
よう。そのような下賤げせんな奴隷どれいを傍に置くなぞ、と  
ても高貴なる血筋のすることとは思えませんな」

「—————」

その時、場の空気が凍ったことを、恐らくローガンは理解しなかつただろう。

ニニムは咄嗟とっさにウェインに声をかけようとす  
るが、喉まで出かかった言葉が押しとどめられ  
る。すぐ傍にいる少年の背中から、得体の知れな  
い鬼気ききが漏れ出るのを感じたからだ。

「ローガン殿」

ウェインの声は驚くほど平坦へいたんだった。

「最初に言っていた、貴殿の言葉はドラーウッド  
将軍の言葉というのは……確かかな？」

「相違ないが、なにか？」

「いや結構。将軍にはくれぐれもお体に気を付け

るよう伝えておいてくれ」

ローガンは不審そうな顔をしていたものの、そのまま立ち去った。

しかしローガンの姿が見えなくなっただけから、ウェインは席についたまま動こうとせず、周囲が緊張に包まれる中、ニニムは意を決した。

「で、殿下、その」

「すまないことをしたな、ニニム」

ニニムの呼びかけを遮るマシエギようにウェインは言った。

「ジーヴァの時はそうでもなかったから、油断していた。

やはり西側にはフラム人に対する偏見が根強い。不用意に

お前を西側の人間の目にさらして、不快な思いをさせてしまった」

「い、いえ、そのようなことは……」

「次からは気を付けるとしよう。それではこの片づけを頼むぞ。俺は先に上に戻る」

「……ははっ」

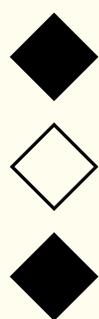
ウェインは席を立って鉦山の頂上に向かって歩き出した。

片づけを命じられたニームは彼の背中を見送ることしかできず、やがて声が届かない距離になったところで、ウェインは護衛の兵士に言った。

「ラークルマを呼べ」

会談から数日後、マーデン軍は攻勢のための準備を完了させる。

鉦山を舞台としたこの戦争は、最終局面を迎えようとしていた。



「將軍、全部隊の配置が完了しました！」

「用意した梯子も各方面に行き渡っております」

「残るは將軍の号令を待つのみです」

居並ぶ指揮官たちが□々に告げる先に立つのはドラーウッド。

彼は大きく息を吐くと、強い眼差しを皆に向けた。

「開戦から三週間。無駄な時間をかけてしまった」  
 すぐに終わるはずだった戦争はもつれにもつれた。  
 卑劣な姦計かんけいによって兵は削られ、潤沢じゆんたくだった物資は今や底を尽きつつある。

「全ては私の不徳ふとくゆえのことだ。お前たちには苦  
 労をかけたな」

勝って当然の戦をこれだけ長引かせてしまったのだ。恐らくは自分にまともな恩賞など出ないだろう。それどころか戦犯として罰を受ける可能性すらある。

しかしもうそれで構わない。ただ奴らを倒すこ

とができるのならばそれでいい。

「屈辱の時間は今日までだ。夕日の到来を待つまでもなく、蛮族共の血でこの山は赤く染まるだろう。

——始めろ！」

「はっ！」

太陽が中天に輝く頃、鉦山目がけてマーデン軍の総攻撃が始まった。

マーデン軍総攻撃の知らせは、すぐさま山頂にいるウェインの元まで届けられた。

「来たか」

ウェインはそう小さく呟くと、伝令に素早く指

示を飛ばした。

「鉦山下部の防御陣地は破棄<sup>はき</sup>だ。兵を上<sup>は</sup>に集めて  
防御を固めさせろ」

「はっ！」

「鉦夫に言<sup>い</sup>って中腹までの坑道も崩させろ。鉦山  
内部に敵が入れないようにな<sup>な</sup>」

「すぐに完了させます！」

伝令が天幕から飛び出し、残された二二ムはウ  
エインに言<sup>い</sup>った。

「耐えられる？」

「無理だな」

ウェインの返答は簡潔だ。

「敵の侵入ルートを山道に限定することで戦況を維持してきたんだ。山道以外からガンガン登って来られたら、兵力差の勝負になる。となれば、勝ち目はないな」

「ただし、このままなら。でしょ？」

「そういうことだ」

ウェインはにっこり笑った。

「ここの指揮はハガルに任せる。ニニムはそつちの補佐に回ってくれ」

「了解。——死なないでね、ウェイン」

「心臓がここに残るんだ。死ぬ理由がどこにある」  
ウェインはニニムの髪を軽く撫なでると、天幕の

外に出る。

そこに待っていたのはラークルムだ。

「殿下」

「ラークルム、準備は？」

「万端です。いつでも出られます」

ウェインは満足げに頷いた。

「それじゃ、あいつのアホ面を<sup>づら</sup>拝みにいくとしよう」

鉦山の戦況は一方的なものだった。

山道という制限から解き放たれたマーデンの軍勢は、鉦山の至る所に長い梯子をかけ、次々と斜

面を駆けあがっていく。その光景はさながら砂糖の山にたかるアリの群れのようにである。

いかに練度に勝るナトラ兵といえど多勢に無勢ぶぜいだ。鉾山の上方に固まって押し返そうとしているが、ジリジリと削られてるのが麓ふもとからでも解る。

「將軍、各方面で我が軍が圧倒しています！」  
報告に来る伝令の声も弾んでいる。マーデン側に流れが来ていることは誰の目にも明らかだ。

「これならば陥落は時間の問題ですな」  
ドラーウツドの補佐として本陣に残っている指揮官たちの表情も明るい。

そんな彼らを戒いましめるようにドラーウツドは強い

語気で言った。

「油断するな。追い詰められた蛮族がどのような  
自<sup>や</sup>棄<sup>け</sup>を起こすか解らん」

そして問いかけを投げる。

「鉦山の裏手はきちんと抑えているな？」

「はっ。万が一奴らが裏手から逃げようとしても、  
足止めできざる兵力を置いています。指揮もローガ  
ン殿が執<sup>と</sup>つていますので問題ありません」

「それでいい。もはや奴らを見逃すなど手<sup>て</sup>緩<sup>ぬる</sup>いこ  
とはせん。全員この地で骸<sup>むくろ</sup>にしてくれる」

そうドラウツドが気炎を吐いていると、数騎  
のマーデン兵がこちらに向かって駆けて来るのが

見えた。

「將軍！ ドラ―ウッド將軍はどちらに!? □―  
ガン隊長より緊急の連絡ですー！」

よく通る声が全員の耳に届いた。指揮官たちは  
顔を見合わせ、緊張を走らせる。この戦争が開始  
して以来、緊急の連絡といえは悪い事ばかりだ。  
まさか鉦山の裏手に何事があったのか。

「……話を聞く。あの伝令を呼べ」  
「は、ははっ！ おおいそこの、將軍はこちら  
だ！」

指揮官に呼ばれた伝令たちは、馬を下りてドラ  
―ウッドの前まで駆け寄り、跪いた。

「報告しろ。ローガンがどうした」

「はっ、それが……」

言いながら伝令は背囊はいのうを下ろし、何気ない動作でその中身を放り投げた。

ローガンの生首なまくびが、ドラーウッドの眼前に転がり落ちた。

は——？ と、居並ぶ全員の思考が停止した。間隙かんげきを突くように伝令が地を蹴った。同時に抜剣。流水のように洗練された動作。

「——あの世で会おうってよ」

鉄の刃が、ドラーウッドを袈裟斬けさぎりにした。

ドラーウッドが驚愕きょうがくに目を見開きながら後ろに

倒れこむ。

地面とぶつかった鎧が甲高い音を上げ、凍り付いていた周囲の時間がようやく動き出す。

「き、貴様何をーーがっ!？」

指揮官たちが剣の柄に手をかけるも、それを引き抜くよりも早く残りの伝令が彼らを切り捨てる。さらに天幕の外からも槍が指揮官たちに向かって突き出され、瞬く間に全員が討ち取られた。

「殿下、片づきました」

「ご苦労」

ドラーウッドに斬<sup>き</sup>りかかった男は短くそう答えた。そして彼は倒れるドラーウッドを見る。

「……あれ、まだ生きてるのか」

切り裂かれた鎧の隙間すきまから大量の血を溢れさせながら、しかし間違いなくドラードは呼吸し、その眼差しを襲撃者に向けていた。

「やっぱダメだな俺の剣の腕。大したことないわ」  
「ぐっ……ごほっ。き、貴様は……」

「なんだ、俺が誰か気になるのか？」

男は兜を脱いだ。まだ少年といえるあどけない顔立ち。その人相にドラードは覚えがあった。マードンの兵装を身に着けているが間違いない。

「貴様……ウェインか……！」

「こうして面と向かって会うのは初めてだな、ド

ラーウッド將軍」

兜を放り投げ、ウェイン・サレマ・アルバレストはにっこりと笑った。



「なぜ、なぜ貴様がここに……！」

「そりゃあお前の首を取りに来たからさ。ダメだぜドラード。いくら勝負に出たからって本陣の人数をこんな手薄にしたら」

「ぐっ……！」

ドラードはウェインを睨にらみながら、彼の足

元に転がる剣に意識を向ける。傷口が焼けるように痛い。□の中は鉄の味でいっぱいだ。だが、あの剣を取れば。それにこうして会話で時間を稼げれば、誰かが本陣の様子を不審に思うことも。

「人は来ない」

見透かされたかのような声に、ドラーウッドは肩を震わせた。

「天幕の周りは俺の兵が固めてるし、そっちの兵士はどいつもこいつも今は山のことと頭が一杯だ。本陣ここのことなんて火の手でも上がらない限りは気にもしないさ」

「解ったような□を……！」

「解るさ。そうなるよう俺が仕向けたわけだしな」  
「なにい!？」

気を緩めまいとする必死のドラウウッドに向かつて、ウエインは肩をすくめた。

「いかにマーデン軍を抑圧し続け、今日この日の解放感に夢中にさせるか。それがこの戦争における俺の基本的な計画だ。面白おもしろいもので、自制つてのは劣勢より優勢な時の方がやりにくい。ようやく迎えた今日の大攻勢で、マーデン軍は末端の兵士から中枢であるお前たちまで、全員が浮足立った。三週間、お前たちを上から眺めてきた俺にとって、浮ついてるお前らの隙を見抜くことなんて簡単だ」

「……」

反論しようとして口を開くが、事実として今の状況がある。ドラーウッドは口<sup>くち</sup>惜<sup>お</sup>し気に糸口がないかと脳裏を回転させ、思い至った。

「だが！ だが、お前たちが寡<sup>か</sup>兵<sup>へい</sup>で山を下りたのは確認されているはずだ。部隊を指揮している者までその情報が届けば」

「そりゃ無理だ。俺たちは山を下りてなんていないからな」

ドラーウッドの目が揺らぐ。山を下りていないならばいかにして彼らはここに到着したというのか。

「洞窟の坑道、覚えてるよな」

ドラーウッドは朦朧もうろうとしてきた意識の中で、彼の言葉をかみ砕く。

「っ……い、いや、あれは岩盤をどかすのに数力月はかかると……」

「その横だよ」

ウェインは楽しそうに言った。

「あの坑道の横を通るようにして、事前に鉱夫たち  
に掘ってもらってたのさ。鉱山内部から、洞窟  
手前まで伸びる坑道を」

「――」

ドラーウッドの肩が震えた。

「ま……さか」

「そうだ、あの崩落はマーデン兵を削るのが目的じゃない。崩落を知らしめることで、洞窟の存在をお前たちの意識から消すためのものさ」

ドラーウッドは、軍人として自分の中に積み上げてきた多くのものが、音を立てて崩れていくのを感じた。将として何もかもが、この少年に及ばないのだと、否応なしに理解した。

「後は残った部分を掘り進めて開通させて、お前たちの装備を着こんで外に出れば、もう誰も俺たちをナトラ兵とは疑わない。移動の途中でローガンを見つけれられたのは偶然だけだな」



ウェインの剣がドラーウッドの胴体を貫いた。

「俺の心臓を侮辱した奴は、残らず殺すと決めて

いる」

—いっせん閃。

ドラーウッドの肉体が両断され、床を転がった。

「じゃあな、ドラーウッド」

ウェインは剣の血を拭ぬぐい、鞘さやに納めた。

隣で伝令の兜を脱いだラークルムは恭うやうやしく一礼した。

「お見事です、殿下」

「この程度で見事なものか。……って、なんで泣いてるんだラークルム」

「申し訳ありません。殿下の剣技の美しさに心が震えてしまい……」

「……まあいい。そろそろズラかるぞ。ああ言っただけど、ローガンがいなくなっただことに気づいた裏手の部隊がこっちに人を寄越すかもしれん」

「この後は予定通り、火をつけながらで？」

「ああ。食料や資材を中心に火をつけて回る。さつさとこっちの異変に気づいて動揺してもらわなきゃ、今も戦ってるうちの兵士たちが押し潰されるからな。行くぞ」

「ははっ！」

ウェインたちは素早く馬の元まで戻ると、積み

込んでいた松明で天幕に火をつけた。

火は瞬く間に回り、ドラーウッドたちの骸は燃え盛る炎に飲み込まれていく。さらに炎と煙は空高く立ち上り、鉾山の上方で戦う兵士たちにも伝わった。

「お、おいあれ」「燃えてるのうちの本陣じゃないか？」「そんな、まさかまた敵兵が!？」

以前夜襲で火をかけられたことは、マーデン兵の誰もが覚えてい<sup>で</sup>る。それゆえに炎の恐怖と混乱はすぐに伝<sup>で</sup>播<sup>ば</sup>し、さらに状況の確認に向かった伝令からドラーウッドを筆頭とした指揮官たちの死が知れ渡ると、足並みの乱れは致命的となった。

なおも抗戦を望む者、撤退を試みる者、ただ  
呆然ぼうぜんとする者――統率を失ったマーデン兵たちに  
ナトラ軍を打ち破る力はなく、マーデン軍は多く  
の犠牲者を出しながら、転がり落ちるようにして  
山麓まで退却することとなった。



ウェインたちが山頂に帰還を果たしたのは、日  
も暮れかけた頃だ。

未だ激戦の熱気が冷めやらぬそこに戻った途端、  
喝采かつさいをあげる兵士たちに迎えられた。

「おお！ 殿下の御帰還だ！」

「殿下、よくぞ御無事で！」

「殿下の火計で見事マーデン兵は退ひきましたぞ！」

兵たちはその多くが負傷していた。死者も少なくないただろう。しかしそれでも表情には活気が宿り、  
□々にウェインの無事を喜び、彼を称たたえた。

「皆、よくやってくれた！ 今日の戦いはマーデンにとって大きな打撃であることは間違いない！  
勝利は近いぞ！ ここを最後の正念場と思い、  
気を引き締めろ！」

「おおおおおおおおおー！」  
兵士たちの雄叫おたけびが地面を震わせる。

そしてウェインが兵たち一人一人に短く声をかけながら奥へ進むと、そこに老将ハガルが待っていた。

「ハガル、俺の不在の間、よくやってくれた」

「勿体なき御言葉でございます」

ハガルは恭しく一礼する。

「現状について聞きたい。マーデンはどうしてる？」

「はっ。鉱山の包囲を解き、山麓から少し離れた平地にて固まっています。現在のところ攻勢に出る様子はありません」

「今頃誰が指揮を代行するか、さらに継戦するか」

で揉<sup>も</sup>めに揉めてるだろうからな」

「殿下はマーデンが継戦を行うと思っ<sup>て</sup>おいで  
で？」

「いや、無い」

ウェインは断言した。

「今日で決めると意気込んだ戦で大敗し、兵の士  
気は最悪。物資もだいたい<sup>ぶ</sup>焼かれた。向こうの指揮  
官たちは、死んだドラ<sup>ー</sup>ウツドに全責任を被<sup>かぶ</sup>せて  
撤退を選ぶだろう。ここで指揮を執<sup>つ</sup>て負けたり  
なんてしたら、自分が敗戦の責任を負<sup>う</sup>ことにな  
るからな」

「道理ですな」

ハガルは頷いた。

（そして、その後が始まる和睦の交渉……俺にとつての本番はこれだ）

今度こそ失敗してはならない。  
持ちうる技能のすべてを駆使して、この二束三文の鉱山をマーデーンに売りつけるのだ。

（そのためにも、もう準備をしとかなきゃな。二ニムにも手伝ってもらって……）

そこまで考えてウェインはふと気づいた。

「そういえば二ニムは？」

「二ニム殿でしたら各部隊の被害状況について精査を。もうじき戻るはずです」

「そうか。だったら二二ムが戻るまで、戦勝の前祝いに酒でも」

飲もうか、と続けようとしたところで、山頂の端からざわめきが届いた。

ウェインとハガルは目を見合わせ、即座にざわめきの方角へ向かった。

「どうした、何があった」

「あ、で、殿下、それが……あれを見てください」

見張りの兵士が指さしたのは、マーデン軍が駐留している平地だ。その場所を見て、ウェインは驚きに瞳を揺らした。

マーデン軍が、鉾山から遠ざかろうとしている

のだ。

「これは……撤退するつもりか？」

ナトラ軍に背をむけ、内地へ向かおうとしている様はまさしく撤退する軍の姿に他ならない。

しかしウェインは懸念けねんを抱く。撤退するのは良  
いだろう。しかし、判断が早すぎる。これほど速  
やかに意見を纏めて決断を出せるような人材は、  
ドラーウッドとともに始末したはずだ。

「ハガル、あれはこちらを欺あざむく偽装ぎそうだとは思  
うか？」

「……いえ、あの様子ですと本当に撤退するもの  
かと。今のマーデン軍の状態では、そういった小

細工を設けようにも兵士がついて来れないでしょう」

「……………」

むむむ、とウェインは内心で唸る。<sup>うな</sup>

マーデン軍が早期に撤退することに不満はない。早いほどに和睦交渉の開始も早まるのだ。だがやはり、裏に何かあるのではないかと考えてしまう。

「殿下、あの、恐れながら」

不意に、おずおずと傍にいた兵士が口を開いた。

「これはつまり、私たちは勝ったという事でし  
ようか……………」

気づけばウェインの周囲には何十人も兵士た

ちが集まり、去り行くマーデン軍とウェインのことを交互に見つめている。

彼らに何と言うべきか。ウェインはしばし考え、決めた。

「皆の者、聞け！ マーデン軍は我らに背を向け、逃げ帰ろうとしている！」

張り上げたウェインの声に、遠くの兵士たちも顔を向ける。

「あるいは我らに対する卑劣な策略の布石ふせきかもしれない！ だが、そのようなモノに頼らざるをえない時点で、もはや我らに敵かなわぬと自ら認めたとようなものだ！」

ウェインは力強く言った。

「ゆえに、私はここに断言しよう！——この戦、  
我らナトラ軍の勝利である！」  
シン、と鉦山が静まり返った。

そして次の瞬間、爆発ばくはつしたような歓声が兵士たちから上がった。

「勝ち鬨かどぎを上げよ！ 逃げるマーデンの兵士たちに、我らこそが勝者であることを知らしめるのだ！」

ウェインに煽られ、兵士たちが口々に勝ち鬨を上げる。間近で浴びていると、骨まで震えるほどだ。

「よろしいのですか？」

ハガルの耳打ちにウェインは頷いた。

「向こうが策を弄<sup>ろう</sup>してゐるにせよ、すぐに仕掛けてくるのは間違いない。ならば士気を上げておくのも一つの手だろう。ハガル、くれぐれも警戒は怠<sup>る</sup>なよ」

「御意<sup>ぎよ</sup>」

ハガルは恭しく頷いた。

するとそこに、兵士の間を縫うようにしてニニムが息を切らしながら現れた。

「殿下、ここにおられましたか」

「ニニムか。……なんだ、どうした？」

彼女の様子から、ただならぬものをウェインは感じ取る。

「被害の調査をしていたそうだが、予想以上に深刻だったか？」

「いえ、その点はむしろ予想より軽微でした」  
ニニムは頭を振り、ですが、と続けた。

「問題はそこではないのです。殿下、今しがたマ―デンの王都に潜もぐらせていた密偵から連絡が届いたのです」

「ほう。まさかフシユターレが怒りのあまり家臣の虐殺ぎゃんくつでも始めたか？」

「陥落しました」

「……………」

ウェインはニニムの言葉をかみ砕くのに数秒の

時を要した。

「陥落？」

「はい」

「マーデンの王都が？」

「はい」

「……どこに、どこにやって？」

「マーデンの隣国のカバリヌです。こちらに大兵力を割いていたため、強襲を受けてもろくに抵抗できず、そのまま……フシユターレ王も死亡したとか……」

「……」

何やってんだマーデンとか、どんだけ馬鹿なん

だフシユターレとか、そんな罵倒ばとうが凄まじい速度でウェインの脳裏を駆け巡る中、彼の頭脳は最も大事な問題に辿り着く。

「なあニニム……俺、この後でマーデンと和平交渉するはずだったよな」

あまりの衝撃に、普段の言葉遣いを出しながら、ウェインは絞り出すように言った。

「この場合、交渉とか、どうなると思う……?」「ニニムは若干目を逸らしながら、おずおずと答えた。

「和平する先が滅亡してしまったので、恐らく、立ち消えかと……」

「……………」

そっかー。

立ち消えかー。

ウェインは小さくを息を吐き、空を仰いだ。

そして叫んだ。

「な、ん、じゃ、そりゃああああああああ!?!」

ウェインの絶叫は、兵士たちの勝ち鬨の中に飲み込まれ、むな虚しく消えて行った。

◆エピローグ◆

大陸最北の国であるナトラ王国は、当然のごとく夏が短い。

日差しが強くなり、草木の緑が濃くなってきたかと思えば、あっという間に秋と冬が訪れる。そんな気候だ。

しかし、だからこそ王国民は精一杯夏を楽しむ。ひとたび街に繰り出せば、陽気に過ぎす人々の姿が至る所で見つかるだろう。祭りなども催され、この時期のナトラ王国は夜遅くまで笑い声が絶え

なくなる。

が、そんな城下の要素と相反して、ウェインは執務室の机に突っ伏して意気消沈いきしょうちんしていた。

「どうしてこうなった……」

ジラート金鉱山を巡るマーデンとの戦に決着が  
ついてから一カ月。

鉱山の防衛のためにハガルを残し、ウェインは  
王国に帰還し、溜たまりに溜たまっていた政務を片つ  
端から片づけつつ、マーデンについての情報収集  
を行い続けた。

マーデンが隣国カバリヌに滅ぼされたというニ  
ュースは、すぐさま大陸中に知れ渡った。

北方の小国とはいえ国は国。それが滅亡して歴史が途絶えらるゝとなれば、国政にかか関わる者ならば誰だれしも興味を抱くだろう。

特にマーデンには金鉱山がある。これを巡ってナトラ王国と争っていたのは周知のことだが、この鉱山の扱いに注目が集まった。

事実上鉱山を占領しているナトラ王国。それを認めず争っていたマーデン王国。そのマーデンを滅ぼしたカバリヌ国。自然に考えるならナトラの土地になりそうではあるが、カバリヌがそれを認めるのかどうか、つまりその一点に尽きる。

そしてまさしく今日、ナトラとカバリヌとの会

談が行われ、結論が出たのだ。

「――失礼します」

執務室のドアを開け、現れたのはニームだった。彼女は机に突っ伏すウェインの姿を認めるや否いなや、ああ、という顔になった。

「カバリヌの使者との会談、ダメだったの？」

「……ダメだった」

呻うめくように応じた後、ウェインはガバっと起き上がって天井てんじょうを仰あおいだ。

「鉱山売りつけられなかったあああああ！  
くっそおおおおお！」

マーデンと講和して枯れかけている鉱山を高値

で売るといふ計画は、カバリヌによってマーデンが滅びることおで惜おしくも潰つえた。

しかしウェインは諦あきらめなかつた。カバリヌからしてみれば、マーデンの金鉱山は喉のどから手が出るほど欲しいはず。むしろ手に入れることを考慮に入れての侵攻だろう。彼らのシナリオとしては、ナトラの軍に勝利するも少なくない犠牲を出したマーデン軍を迎え撃ち、鉱山もろともマーデン国を手に入れるつもりだつたはずだ。

そう、予定外だつたのはカバリヌも同じなのだ。カバリヌは力づくでも鉱山を手に入れたいだろう。しかし予定外の戦争といふのは二の足を踏むもの

だ。

ゆえにウェインは付け入る隙すきがあると考え、すぐさまカバリヌに使者を出し、会談の場を設けることを試みた。鉾山を高値でカバリヌに売りつけるためだ。

が、目論見もくろみは成就じょうじゆしなかった。

「カバリヌの方、マーデンの王族を取り逃がしたみたいだつて話があつたらろ？」

「ええ、密偵の情報にあつたわね。鉾山から撤退したマーデン軍をまとめ上げ、潜伏させ、カバリヌに対して抵抗運動をしてるとか」

「どうもそれを抑えるのにかなり手を焼いてるみ

たいでな。ナトラ<sup>うち</sup>と二面作戦をやるのはマズイつてことで、不可侵条約を結ぶことに全力だったみたいだ。鉦山はナトラの物でいいですよの一点張りで、取り付く島もなかったぜ」

「あらまあ」

カバリ又は西側の国のため、ニニムは今回の会談には出席しなかったが、きつとその時のウェインは苦虫を纏<sup>まと</sup>めて噛<sup>か</sup>み潰<sup>つぶ</sup>したような顔をしていたのだろうと思ひ、小さく笑った。

「おいおい笑い事じゃねーぞニニム。見るよこの資料、今回の戦争で消費した人、物、金！ おかげで国庫は空っぽ！　なのに戦果は枯れた鉦山だ

けとぎてる！ ああああもおおおー！」

頭を抱えて七転八倒しちてんぱつとうするウェインにニニムは歩み寄り、紙束たばを鼻先に突きつけた。

「それじゃ、はい。そんなウェインにプレゼント」  
「なにこれ、三万の軍勢に勝った超カッコいい俺おれへの女の子からのラブレター？」

「だったら破り捨ててるわ。ペリントからの報告書よ」

あの戦争に参加した鉱夫たちには褒賞ほじうせうを与えた。さらに纏めまと役やくだったペリントはナトラに召し抱え、鉱山の監督官かんとくかんとして働いてもらっていた。

「報告たってどうせ大した内容じゃ……うん？」

手早く資料をめくっていたウェインの眼が止まる。

「新たな鉱脈の発見って……え、マジで？」

「独自に調査させたけど、本当みたい。さすがに全盛期とまでは言わないけど、黒字にはなりそうよ」

「おおおおお……」

ウェインは椅子いすの背もたれに寄りかかり、大きく息を吐いた。

「軍部にどのタイミングで鉱山がハズレだったことを伝えるか考えてたけど、どうにか首の皮一枚つな繋がったな」

「今のウェインの名声なら、無くても大丈夫だつたとは思わよ？ 民を慈あつやくしみ、戦いくさにも強く、政治手腕も一級品で、建国以来の名君になるって評判だもの」

「いいや、そんな評判なんてどうせ一時的なものだ。そのくせ失敗はいつまでも後を引くからな。油断は大敵だぞニニム」

頑がんとして譲らない態度のウェインに、ニニムは苦笑交じりに息を吐く。戦では大胆な作戦を立てるのに、普段に戻るとこの有様ありさまだ。しかしそのやり方でいくつもものの国難を乗り越えてきたのだから、これはこれで間違いではないのだらう。

「しかしそうか、鉦山が使い物になるのか。それなら少し余裕が出てくるな。帰ってからずっと忙しかつたし、こころで少し休みでも取って」

「ダメ」

ニニムはウェインの前に書類の山をドンと置いた。

「……これを片づけければ休める？」

「ううん、おかわりが来るわ」

「……」

「他<sup>ほか</sup>にも東側の諸国の大使から面会の要請。文官からは予算再編成についての相談。消耗した軍備の補充の問題もあがってるわ。あ、それとフラ―



アースワルド帝国皇帝の崩御ほうぎよから始まる大陸全  
土の動乱。

後の世において、賢王けんおう大戦たいせんと呼ばれる時代が、  
幕を開けようとしていた。